石匂遺跡 III

－A･B･C･E･I地点の調査－

大野城市文化財調査報告書

－ 第 52 集 －

1998

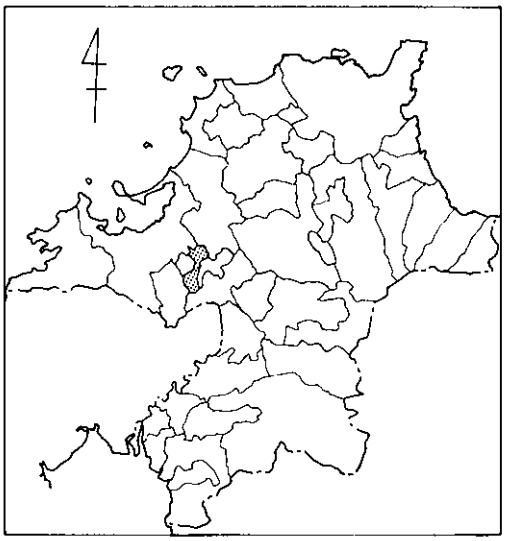
大野城市教育委員会

石匂遺跡 III

－A･B･C･E･I地点の調査－

大野城市文化財調査報告書

－ 第 52 集 －



1998

大野城市教育委員会

序

石勺遺跡発掘調査の３次めの報告書を刊行することができました。関係各位のご理解とご協力、またご指導に対し、あつくお礼申し上げます。

今次の報告書は大野城市施工の御笠川西部区画整理事業と、生涯学習施設「まどかぴあ」の立体駐車場建設工事に伴う発掘調査の結果をまとめたものです。

区画整理事業によって発掘調査を行った箇所の一つは、それまで遺跡の存在が全く知られていなかった所で、直前の試掘調査によって遺跡の存在が確認されました。石勺遺跡の発掘調査の嚆矢となった場所です。これを含めてこれまで石勺遺跡は合計10ヶ所を調査し、縄文時代から奈良時代までという非常に長い期間の遺跡であることが明らかになりました。

現在「まどかぴあ」の立体駐車場となっている場所からは、縄文時代の遺構や弥生時代の甕棺も見つかっています。

今回の報告書では触れていませんが、石勺遺跡からは弥生時代後期から古墳時代にかけての遺構も確認されています。順次報告書を刊行していく予定であり、その中でこの遺跡の解明がさらに進められていくことと思います。

十分な内容とは申せませんが、本書が当地域の古代史解明の一助となりますことを祈念して序といたします。

平成10年３月31日

大野城市教育委員会
教育長 堀　内　貞　夫

例　　言

1．本書は大野城市教育委員会が御笠川西部土地区画整理事業および生涯学習施設「まどかぴあ」立体駐車場建設工事に伴って実施した、大野城市瓦田および曙町に所在する石勺遺跡の発掘調査の報告である。

2．遺構の分類記号はＳＫ－土坑・ピット、ＳＤ－溝、ＳＪ－甕棺墓、ＳＸ－その他の遺構である。

3．遺物の写真撮影は岡紀久雄（埋蔵文化財技術研究会会員）による。

4．遺物番号は通し番号とし、図版と挿図の番号を統一した。

5．図２は建設省国土地理院発行の地形図『福岡南部』を基に作成したものである。

6．本書の執筆はⅠ・Ⅲ－１～４・Ⅳ－１を向直也が、Ⅱ・Ⅲ－５・Ⅳ－２を丸尾博恵が行った。編集は向と丸尾による。

本　文　目　次

ページ

Ⅰ　はじめに……1
　1　発掘調査の経緯……1
　2　発掘調査の体制……4
Ⅱ　位置と環境……5
Ⅲ　発掘調査の結果……7
　1　Ａ地点の調査……7
　2　Ｂ地点の調査……27
　3　Ｃ地点の調査……29
　4　Ｅ地点の調査……43
　5　Ｉ地点の調査……48
Ⅳ　まとめ……53
　1　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｅ地点……53
　2　Ｉ地点……54

図　版　目　次

図版１　(1)　Ａ地点完掘状況①（北側から）
　　(2)　Ａ地点完掘状況②（北東側から）
図版２　(1)　Ａ地点完掘状況③（北隅の部分、北側から）
　　(2)　Ａ地点完掘状況④（北隅の部分、南側から）
図版３　(1)　Ａ地点完掘状況⑤（東隅の部分、北側から）
　　(2)　Ａ地点完掘状況⑥（東隅の部分、北西側から）
図版４　(1)　Ａ地点完掘状況⑦（西隅の部分、東側から）
　　(2)　Ａ地点完掘状況⑧（中央部分、北東側から）
図版５　(1)　Ａ地点ＳＫ112 土器出土状況①
　　(2)　Ａ地点ＳＫ112 土器出土状況②
図版６　(1)　Ａ地点ＳＫ111 土器出土状況
　　(2)　Ａ地点調査中の状況（北側から）
図版７　Ａ地点出土遺物①
図版８　Ａ地点出土遺物②
図版９　Ａ地点出土遺物③
図版10　(1)　Ｂ地点調査前の状況（東側から）
　　(2)　Ｂ地点１号トレンチ完掘状況（南東側から）

図版11 (1) Ｂ地点２号トレンチ完掘状況（北東側から）
(2) Ｂ地点１号トレンチ（手前）と２号トレンチ（奥）の関係（南東側から）
(3) Ｂ地点出土遺物
図版12 (1) Ｃ地点調査前の状況
(2) Ｃ地点遺物包含層の状況
図版13 (1) Ｃ地点完掘状況（東側から）①
(2) Ｃ地点完掘状況（東側から）②
図版14 (1) Ｃ地点南隅の土坑群（ＳＫ146・ＳＫ147を掘る前）
(2) Ｃ地点ＳＫ01（北側から）
図版15 (1) Ｃ地点ＳＫ01断面
(2) Ｃ地点ＳＫ29（東側から）
図版16 (1) Ｃ地点ＳＫ31土器出土状況
(2) Ｃ地点ＳＫ74（西側から）
図版17 (1) Ｃ地点ＳＫ74断面
(2) Ｃ地点ＳＫ68土器出土状況
図版18 (1) Ｃ地点調査風景（東南側から）①
(2) Ｃ地点調査風景（東南側から）②
図版19 Ｃ地点出土遺物①
図版20 Ｃ地点出土遺物②
図版21 (1) Ｅ地点調査前の状況
(2) Ｅ地点完掘状況（南側から）
図版22 (1) Ｅ地点ＳＤ02土器出土状況
(2) Ｅ地点出土遺物
図版23 (1) Ｉ地点北部完掘状況（南側から）①
(2) Ｉ地点北部完掘状況（南側から）②
図版24 (1) Ｉ地点中央部完掘状況（南側から）①
(2) Ｉ地点中央部完掘状況（南側から）②
図版25 (1) Ｉ地点南部完掘状況（東側から）
(2) Ｉ地点ＳＪ01（北側から）
図版26 (1) Ｉ地点ＳＪ01完掘状況（東側から）
(2) Ｉ地点ＳＪ01工具痕の状況（南側から）
図版27 (1) Ｉ地点ＳＤ01完掘状況（南側から）・埋土土層
(2) Ｉ地点ＳＤ01土器出土状況
図版28 Ｉ地点出土遺物①
図版29 Ｉ地点出土遺物②

挿　図　目　次

ページ

図１　石勺遺跡と周辺の主な遺跡……2
図２　石勺遺跡の調査箇所……6
図３　Ａ地点検出遺構図……8
図４　Ａ地点ＳＫ08・ＳＫ41・ＳＫ111出土土器実測図……9
図５　Ａ地点ＳＫ112出土土器実測図①……11
図６　Ａ地点ＳＫ112出土土器実測図②……12
図７　Ａ地点ＳＫ113・ＳＫ115・ＳＫ146・ＳＫ152・ＳＫ159・ＳＫ160出土土器実測図……13
図８　Ａ地点ＳＫ161・ＳＫ162・ＳＫ163・ＳＫ169・ＳＫ178・ＳＫ200・ＳＫ236・ＳＫ239出土土器実測図……16
図９　Ａ地点ＳＤ01・ＳＤ02出土土器実測図、ＳＸ01出土土器実測図①……19
図10　Ａ地点ＳＸ01出土土器実測図②……20
図11　Ａ地点包含層出土土器実測図……22
図12　Ａ地点出土石器実測図①……23
図13　Ａ地点出土石器実測図②……24
図14　Ａ地点出土石器実測図③・土製品実測図……25
図15　Ａ地点出土鋳型・石製品実測図……26
図16　Ｂ地点検出遺構図……27
図17　Ｂ地点ＳＫ08・ＳＫ09・ＳＫ12出土土器実測図……28
図18　Ｂ地点出土石器実測図……28
図19　Ｃ地点検出遺構図……30
図20　Ｃ地点ＳＫ01出土土器実測図……31
図21　Ｃ地点ＳＫ02・ＳＫ08・ＳＫ18・ＳＫ29・ＳＫ31出土土器実測図……32
図22　Ｃ地点ＳＫ34・ＳＫ36・ＳＫ43・ＳＫ68・ＳＫ74・ＳＫ101出土土器実測図……35
図23　Ｃ地点ＳＫ108・ＳＫ116・ＳＫ146・ＳＫ147出土土器実測図……36
図24　Ｃ地点包含層出土土器実測図……40
図25　Ｃ地点出土櫛描紋土器実測図……41
図26　Ｃ地点出土石器実測図①……41
図27　Ｃ地点出土石器実測図②、石製品・土製品実測図……42
図28　Ｅ地点検出遺構図……43
図29　Ｅ地点ＳＫ11・ＳＫ16・ＳＫ27・ＳＫ30・ＳＤ02・ＳＸ01出土土器実測図……44
図30　Ｅ地点ＳＤ01出土土器、包含層出土土器実測図①……45
図31　Ｅ地点包含層出土土器実測図②……46
図32　Ｅ地点出土石器・石製品実測図……46

ページ

図33　Ⅰ地点ＳＪ01実測図……48
図34　Ⅰ地点ＳＪ01出土土器実測図……49
図35　Ⅰ地点ＳＤ01実測図・土層実測図……50
図36　Ⅰ地点ＳＫ01実測図……51
図37　Ⅰ地点遺構出土土器実測図……51
図38　Ⅰ地点遺構出土石器実測図……52
図39　Ⅰ地点遺構外出土遺物実測図……52
図40　Ⅰ地点風倒木痕の倒木方向……56

付図　石勺遺跡Ⅰ地点遺構配置図

Ⅰ　はじめに

1　発掘調査の経緯

石勺遺跡についての報告はすでに、『石勺遺跡Ⅰ』(1996年) と『石勺遺跡Ⅱ』(1997年) の中でその一部について行っている。その中でも触れているが、福岡県が発行した遺跡分布図にその所在についての記載がない遺跡であった。現在は概ねその範囲がつかめられている。

試掘調査によって遺跡の確認がされてから既に10年経とうとしているが、当初は市街地の中のこの場所に遺跡があろうとは予想だにしていなかっただけに、その時の驚きは今でも鮮明に残っている。本書に記載したA地点と呼んだ箇所が、試掘調査によって初めて遺跡の確認がされた場所である。

大野城市の施工で御笠川西部土地区画整理事業が行われることになり、新しく道路が敷かれる部分の土地（A地点・B地点と呼ぶ箇所）について試掘をすることになった。1988年の5月のことである。住宅地の中でもあり、遺跡分布図にも記載がないため、「今日の試掘は遺構が確認されないことを確認するのが目的だ」などと、内心軽い気持ちで取りかかっていた。ところが重機でトレンチを入れた直後、トレンチ面に高密度の遺構がはりつく光景が展開し、排土の中からはたくさんの弥生土器が出土した。当初の想定から一転し、遺構がないことの確認どころか、ただちに本調査の調整をする必要が生まれてしまった。この「意外な」試掘の結果を受け、年内中に本調査にかかることになった。

A地点・B地点の調査の後も、様々な建設工事に先立ち調査を行う必要が生まれ、現在までJ地点までの調査を進めてきた。これに伴って、遺跡の範囲と性格がほぼ分かるようになってきたわけである。福岡県の身障者授産指導所(H地点)や、生涯学習施設「大野城まどかぴあ」(G地点)も、発掘調査後にこの遺跡の上に建った施設である。残念ながら、調査後は破壊されてしまっているのが現状である。

本書はその中のA地点、B地点、C地点、E地点、I地点の調査の概要を記したものである。

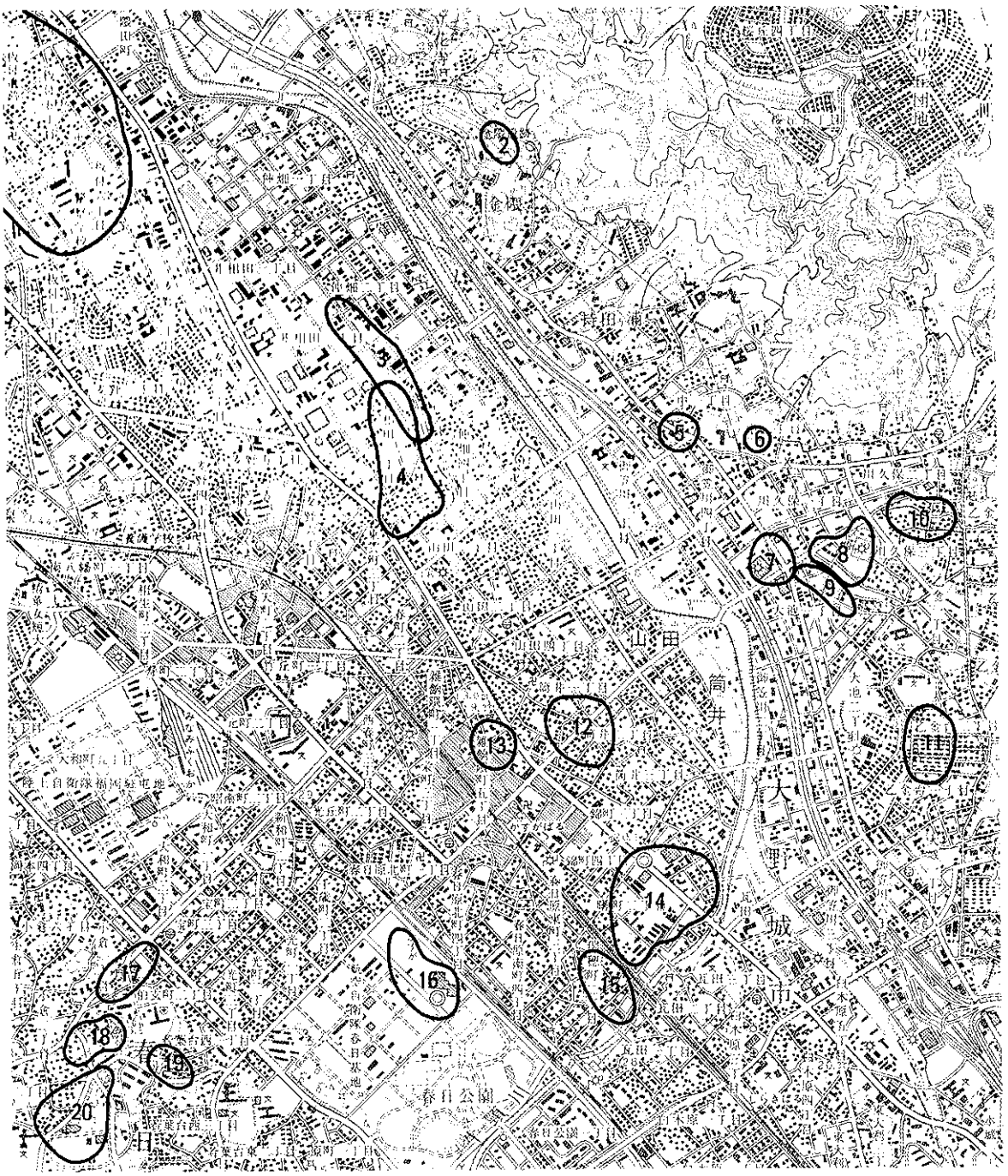
なお、H地点とG地点の調査結果については、前者が『石勺遺跡Ⅰ』で、後者が『石勺遺跡Ⅱ』で報告されている。詳細はこの2冊を参照されたい。

J地点は今年度（1997年度）の調査箇所である。このJ地点と、残るD地点、F地点の調査結果については後日改めて報告の計画である。

本書で扱うA地点、B地点、C地点、E地点、I地点の概要について、後で重複する部分もあるが以下にごく簡単に記しておきたい。

A地点　大野城市瓦田1063－3に当たる。市道建設工事に伴い調査した。現在市道となっている。調査面積は約240m²である。調査はB地点と並行して行った。期間は1988年6月13日から同年9月9日までである。前述したように初めて石勺遺跡の存在が分かった場所である。

B地点　大野城市瓦田1065－2に当たる。A地点同様、市道建設工事に伴い調査したもので、現



〈凡例〉

1	板付遺跡	2	金隈遺跡	3	**仲島遺跡**	4	**井相田遺跡**	5	塚口遺跡
6	御陵前ノ椽遺跡	7	ヒケシマ遺跡	8	森園遺跡	9	中寺尾遺跡	10	松葉園遺跡
11	銀山遺跡	12	村下遺跡	13	雑餉隈遺跡群	**14**	**石勺遺跡**	15	瑞穂町遺跡
16	駿河遺跡	17	伯玄社遺跡	18	ナライ遺跡	19	西平塚遺跡	20	高辻遺跡

図1　石勺遺跡と周辺の主な遺跡（1/25,000）

在市道となっている。調査面積は約40㎡である。A地点と並行して調査した。

C地点　大野城市瓦田1052－3に当たる。調査期間は1989年7月10日から同年8月18日までである。ここも現在市道となっている。そのうち遺構が存在する部分についてのみ約200㎡を調査した。

D地点　大野城市曙町3丁目18－1に当たる。調査は1990年8月20日から同年10月6日までの1次、1990年11月13日～同年12月26日までの2次調査と、2回に分けて行った。調査面積は約670㎡である。当初民間のマンションの建設が計画され、そのため緊急に調査を行ったものであるが、調査後に建設計画はなくなり現在市の公園となっている。A～C地点では弥生時代のみの遺構であったが、ここでは弥生時代から古墳時代までの遺構が確認された。

E地点　大野城市瓦田1064－5に当たる。調査期間は1990年8月25日から同年9月10日までである。個人住宅の建築に伴う調査で、面積は約60㎡と狭い。位置的にA・C地点に近く、遺物包含層、遺構の状況も同じである。

F地点　大野城市曙町2丁目9－3に当たる。調査期間は1992年4月2日から同年6月12日までである。航空自衛隊官舎改築に伴う調査で、約1000㎡の面積を調査した。縄文時代早期の押型文土器片と打製石鏃が出土しており、遺跡の存続期間は弥生時代よりもさらに古い段階からあることがわかった。

G地点　大野城市曙町2丁目14－1に当たる。ここは旧大野町役場、それに付属する建物、さらには直前まで使用されていた中央公民館が建てられていた場所である。大野城市の生涯学習施設「まどかぴあ」の建設に先立って調査したものである。調査面積は約6200㎡、調査期間は途中6か月ほど中断するが、1993年1月26日から1994年4月22日までである。

H地点　大野城市曙町2丁目4－18、福岡県身体障害者授産指導所の場所である。同施設の立替えに伴って調査を行った。期間は1994年11月24日から翌1995年3月8日までである。調査面積は約3000㎡で、弥生時代の甕棺墓や土坑墓からなる墓地を確認した。九州大学の故、鏡山猛教授によって1963年に調査された甕棺墓（資料は九州大学考古学研究室所蔵）がこの場所であったことを再確認できたことも成果の一つである。

I地点　大野城市曙町2丁目9－2、9－11に当たる。大野城市の生涯学習施設「まどかぴあ」の立体駐車場の建設に先立って調査したものである。調査面積は約2400㎡、調査期間は1996年10月7日から1997年2月27日までである。ここからは縄文時代晩期の刻目凸帯文土器と、弥生時代中期前葉の甕棺墓が出土した。

2　調査の体制

A地点、B地点の発掘調査は1988年度、C地点の発掘調査は1989年度、E地点の発掘調査は1990年度に行った。I地点の発掘調査は1996年度である。整理作業は一括して1997年度に行った。なお、調査技師は石勺遺跡発掘調査の担当者のみを掲げた。

○1988年度（S63年度）

教育長		久野英彦
教育部長		助村浩靖
社会教育課	課長	岡部弥之助
	課長補佐	青木克正
	主査	高橋裕司（庶務担当）
	技師	向　直也（調査担当）

○1989年度（H元年度）

教育長		久野英彦
社会教育課	課長	岡部弥之助
	課長補佐	青木克正
	主事	浦山敏弘（庶務担当）
	技師	向　直也（調査担当）

○1990年度（H２年度）

教育長		久野英彦
教育部長		後藤幹生
社会教育課	課長	岡部弥之助
	課長補佐	白水岩人
	主事	浦山敏弘（庶務担当）
	技師	向　直也（調査担当）

○1996年度（H８年度）

教育長		堀内貞夫
教育部長		香野信儀
社会教育課	課長	赤星健彦
	係長	舟山良一
	技師	石木秀啓（調査担当）
	技師	丸尾博恵（調査担当）

○1997年度（H９年度）

教育長		堀内貞夫
教育部長		香野信儀
社会教育課	課長	赤星健彦
	係長	舟山良一
	技師	向　直也
	技師	丸尾博恵
	嘱託	西村晴香
	補助員	武下里織

II　位置と環境

大野城市は北側に三郡山地、南側に背振山塊から派生する牛頸山に挟まれ、平野の真ん中を東南～北西方向に流れる御笠川、牛頸山から御笠川に合流する牛頸川の２つの河川の沖積作用により形成された福岡平野の東南部に位置している。

石勺遺跡は大野城市役所周辺の曙町・瓦田一帯に広がる複合遺跡である。現在は市街地となり旧地形はわかりにくいが、明治時代に作成された地図をみると牛頸川に沿って春日丘陵から八つ手状にのびる微高地が存在しており、石勺遺跡はこの微高地の先端部に立地すると考えられる。既調査で遺構が削平されていることからも、この推測は成り立つであろう。またこの微高地の南側裾部を牛頸川が流れる。

石勺遺跡は縄文時代から奈良時代にわたって遺構が確認されている。今回の報告書では弥生時代の遺構・遺物が多いため周辺の弥生時代の遺跡について概観していきたい。

御笠川の東側では、御陵前ノ椽遺跡[註1]（６）で前期中葉、中寺尾遺跡[註2]（９）で前期後葉の甕棺墓が見つかっている。また塚口遺跡[註3]（５）では中寺尾遺跡の甕棺よりやや新しい形態の甕棺が出土している。これは橋口編年[註4]のＫＩｃ式(金海式)とＫＩＩａ式(城ノ越式)の中間にあたり、前期末から中期初頭の甕棺編年の貴重な資料になると思われる。森園遺跡[註5]（８）では中期中葉から後葉にかけての甕棺墓が見つかっている。また、集落では銀山遺跡（11）において前期の土器などが表採されているが詳細は不明である。松葉園遺跡[註6]（10）では後期の竪穴住居を検出している。

御笠川の西岸に目を移すと、石勺遺跡[註7]（14）では縄文時代晩期から、仲島遺跡[註8]（４）では中期初頭集落の形成が始まり、村下遺跡（12）では中期前半から後期の竪穴住居を検出している。後期には駿河遺跡[註9]（16）がある。墓地としては瑞穂町遺跡（15）で甕棺墓が、雑餉隈遺跡（13）では後期の甕棺墓・箱式石棺墓・石蓋土壙墓が知られている。

大野城市において弥生時代前期の集落の様子は分かっていない。一般に集落は中期初頭までは微高地や丘陵上に形成されることが多く、大野城市では乙金山麓に所在する銀山遺跡（11）、春日市では門田遺跡・一の谷遺跡・平田西遺跡・惣利東遺跡などがある。しかし、集落の規模はさほど大きくはなく、遺跡の増加は中期までまたなければならない[註10]。一方、海岸部に近い那珂遺跡・比恵遺跡・板付遺跡（１）などでは前期の集落が見つかっている。

註１　向直也『御陵前ノ椽遺跡』大野城市文化財調査報告書第48集（1997）大野城市教育委員会
註２　浜田信也他『中・寺尾遺跡』大野町の文化財第３集（1971）大野町教育委員会
　　馬田弘稔他『中・寺尾遺跡』大野城市文化財調査報告書第１集（1977）大野城市教育委員会
註３　『大野城市の文化財』第22集（1989）大野城市教育委員会
註４　橋口達也他『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告－XXXI－』（1979）福岡県教育委員会
註５　向直也他『森園遺跡Ｉ』大野城市文化財調査報告書第26集（1988）大野城市教育委員会
註６　平成９年度に大野城市教育委員会が発掘調査を行った。
註７　石木秀啓『石勺遺跡Ｉ』大野城市文化財調査報告書第47集（1996）大野城市教育委員会
　　舟山良一他『石勺遺跡II』大野城市文化財調査報告書第50集（1997）大野城市教育委員会
註８　『仲島遺跡Ｉ～XI』（1980～1993）大野城市教育委員会
註９　池辺元明『駿河遺跡』福岡県文化財調査報告書第98集（1992）福岡県教育委員会
註10　『春日市史』上巻（1995）

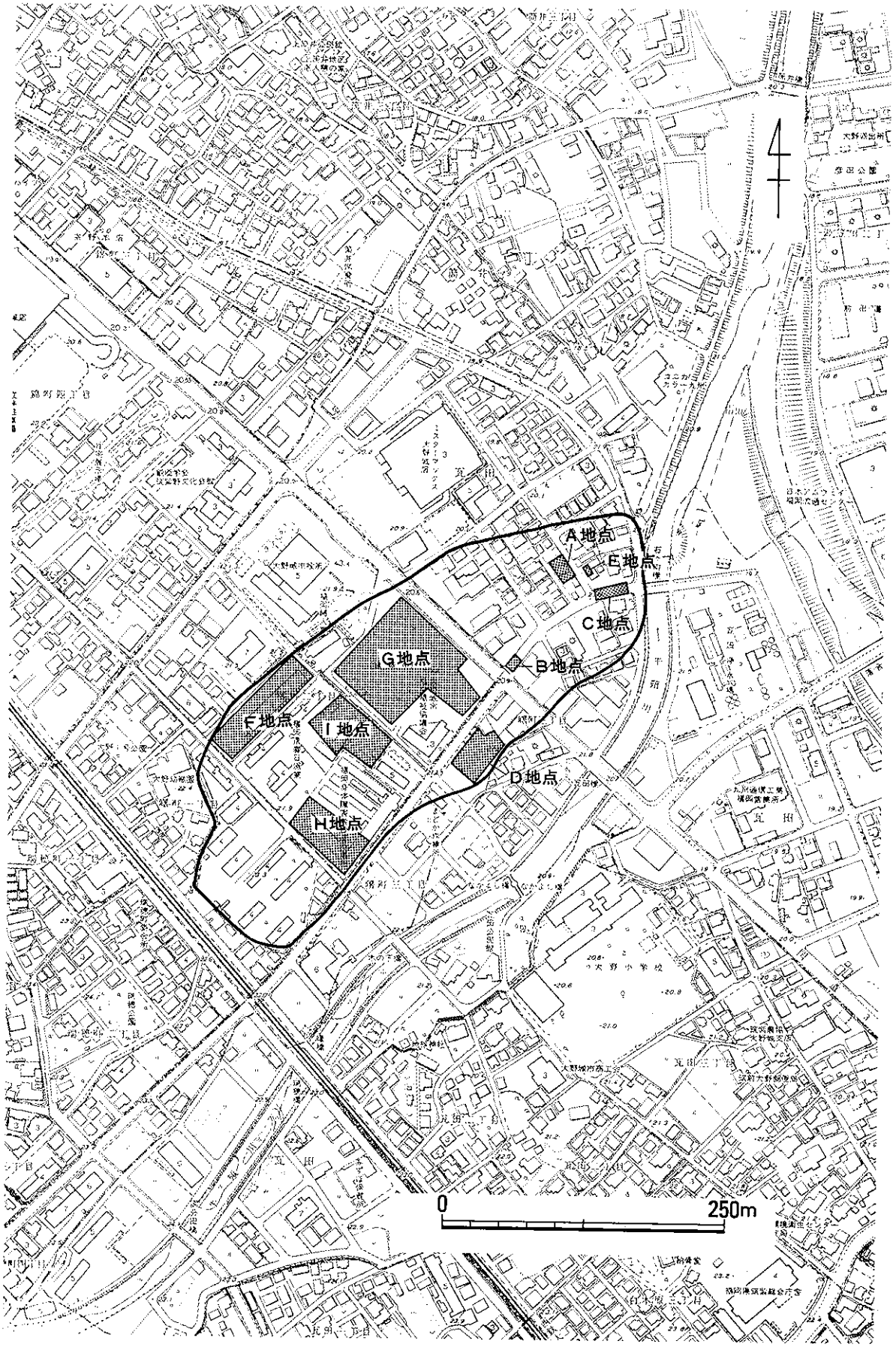


図2　石勺遺跡の調査箇所（1/5,000）

III　調査の結果

1　A地点の調査

(1)　概要

A地点は大野城市瓦田1063－3に当たる。現在市道および宅地となっている。調査面積は約240㎡である。調査はB地点と並行して行い、その期間は1988年6月13日から同年9月9日までである。前述したように初めて石勺遺跡の存在が分かった場所である。試掘の際に表土を約35cm掘り下げた所で、いきなり大量の弥生土器片を含む遺物包含層が姿を現した。包含層の厚さは約30cmを測り、その下に黒色土の遺構面が広がっていた。

検出した遺構は、溝（SD）と大小の土坑（ピット，SK）群である。遺構の密度は極めて高いが、その性格を明らかにすることができなかった。多数の土坑の一部は、壁を削平された竪穴住居の柱穴、あるいは高床式の建物の柱穴の可能性があるが、数が多いだけにどれとどれが一つの遺構としてまとまるのか判断ができなかった。時期は弥生時代中期前葉から中葉にかけてのものである。遺物包含層中からは、青銅器の鋳型の小片が1点出土している。

(2)　各遺構出土の遺物

遺物包含層を含めても、古墳時代以降の遺物は含まれておらず、土器だけを見ればすべて弥生土器のみであった。土器の器種の前に土器の種類を明示していないが、すべて弥生土器のことと理解して頂きたい。計測値の後ろに「(復元)」とあるのは、図上復元であることを表す。

SK08

径約20cm×30cm、深さ約50cmのピットである。

出土遺物（図4－1）

鉢（1）

口径17.8cm、器高10.1cm、底径6.6cmである。

SK17

径約45cm×25cm、深さ20cmのピットである。

出土遺物（図14－145）

土器は弥生中期とわかる小片が若干出土しているだけで、図示できない。

土製品

投弾（145）

約半分を欠く。長さ3.4cmである。

図 3　A地点検出遺構図（1/100）

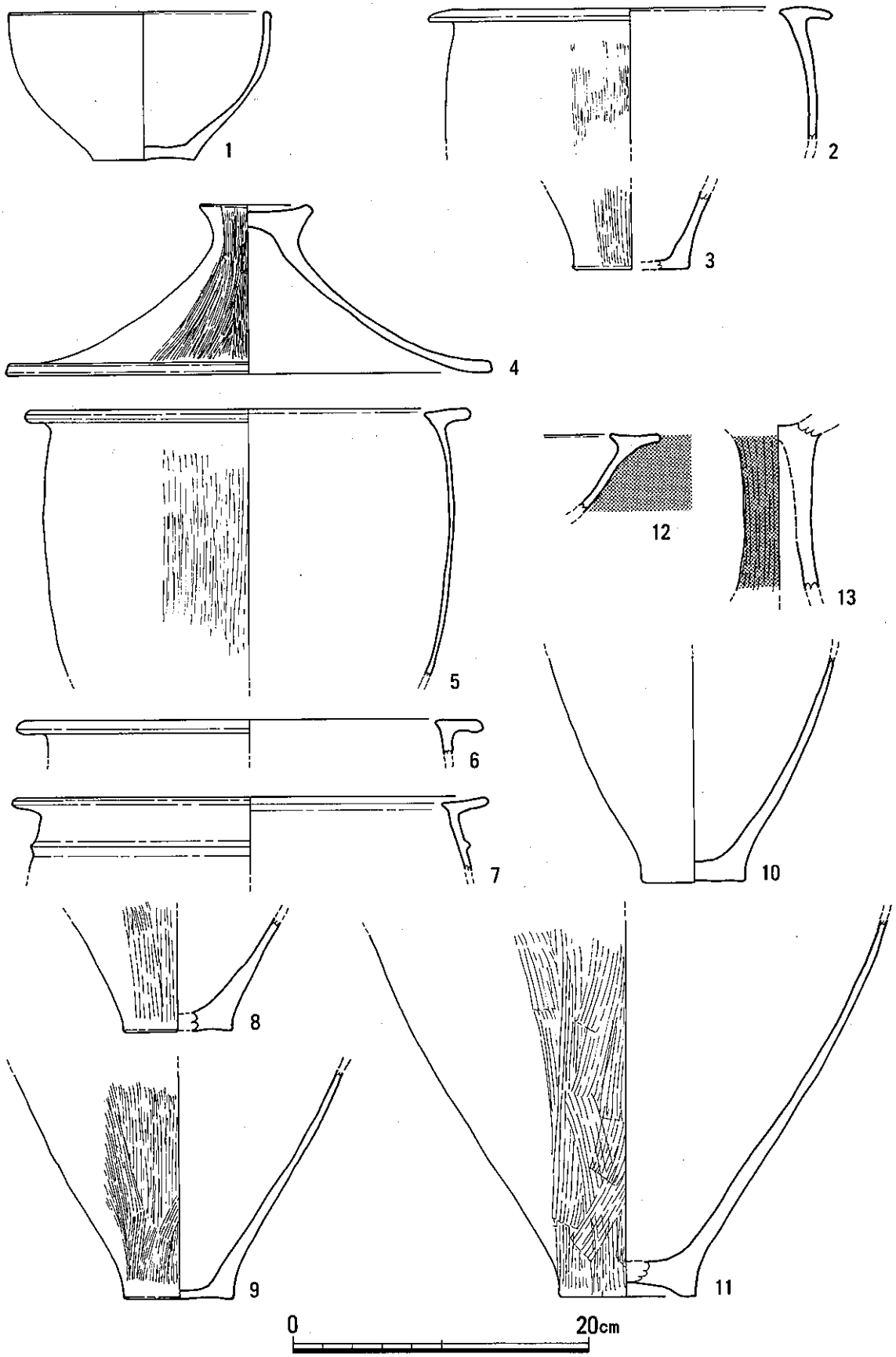


図4　A地点SK08(1)・SK41(2・3)・SK111(4～13)出土土器実測図（1/4）

ＳＫ41

径約70cm×35cm、深さ35cmの土坑である。

出土遺物（図４－２・３）

甕（２・３）

２は口径29.4cm（復元）。３は底部で、残存高5.3cm。

ＳＫ49

溝ＳＤ01に切られる径100cm×(70cm＋χ)の楕円形土坑。

出土遺物（図12－123）

土器は弥生中期とだけわかる小片が出土しているが、図示できない。

石器

石庖丁（123）

立岩産の石庖丁で、半月形の石庖丁を再研磨したものである。長さ10.4cm、高さ4.6cm。

ＳＫ111

径約2.7m×2.2m、深さ約1.1mの２段掘りの大きな土坑。性格は不明。

出土遺物（図４－４～13、図14－142・143）

蓋（４）

口径32.8cm（復元）、器高11.5cm、つまみ部径7.6cm。

甕（５～11）

５は胴部下半を欠く。口径30.0cm（復元）。６・７は口縁部のみ。６は口径31.0cm（復元）。７はやや内傾し１条の凸帯をつける。口径32.2cm（復元）。８～11は底部である。底径は８が7.4cm、９が7.4cm、10が7.0cm、11が9.4cm（復元）である。

高杯（12・13）

12は杯部の口縁部片だが、直径を復元できない。内外面ともに丹塗りである。13は胴部の上位部で外面丹塗りである。

石器・石製品

石鏃（142）

黒曜石製の打製石鏃である。長さ2.0cm、幅1.0cm。

紡錘車（143）

約半分を欠失している石製紡錘車。直径4.2cm、厚さ６mm。

ＳＫ112

ＳＸ160との切り合い関係が明確でなく、東側の端はわからないが、径約(1.5m＋χ)×1.3m、深さ60cmの土坑。

出土遺物（図５・６）

比較的まとまった状態で弥生土器が出土した（図版５）。

壺（14～21）

14は口縁部から肩部上位にかけての大型の壺である。鋤先状の口縁端部には刻みを入れる。頸部には１条の凸帯をつける。口径は34.8cm（復元）である。外面は丹塗り。15は小型の壺で、口径12.4cm（復元）である。16・17は無頸壺である。16は口縁直下に２つの円孔をつける。２個１対あると思われるが、その部分は欠損している。蓋受けの穴と考えられるが珍しいものである。口径は15.4cm（復元）である。外面と口縁部内面にかけて丹塗り。17も無頸壺で、口縁部内面に明瞭な稜が入る。口縁端部外面には１条の沈線紋を入れる。口径は18.5cm(復元)である。外面は丹塗り。18～21は底部で、底径は18が6.7cm、19が5.4cm、20が6.7cm、21が11.0cmと大型である。

甕（22～31）

22は口径27.4cm（復元）、23は口径29.4cm（復元）、24は口径32.4cm、25は口径30.6cm（復元）である。26は底部を欠くが、全体の形状は知れる。器高は50cm弱になろう。口縁直下に凸帯を１条巡らす。口径は40.4cm（復元）である。27～31は底部である。27・28は上げ底、29～31は平底である。底径は27が6.2cm、28が6.5cm、29が7.0cm（復元）、30が8.8cm（復元）、31は大型で11.8cmである。

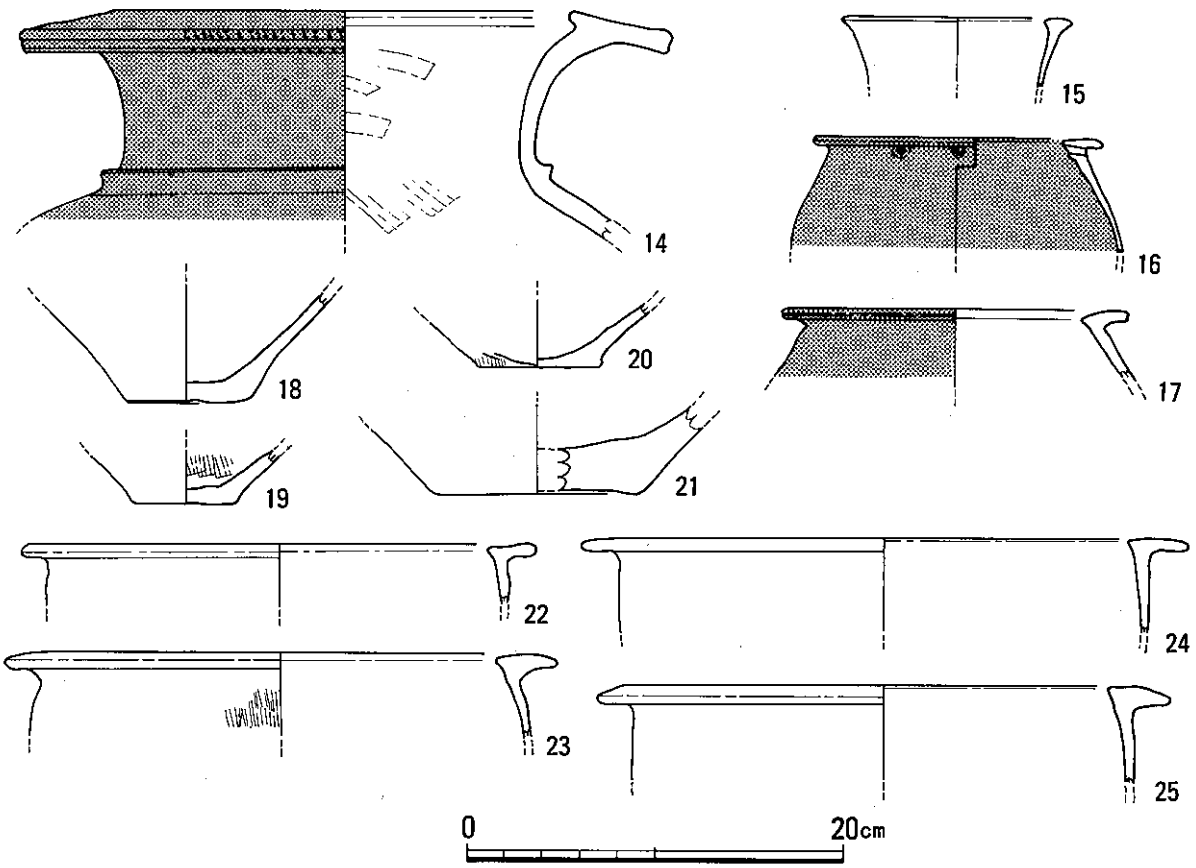


図５　A地点SK112出土土器実測図①（1/4）

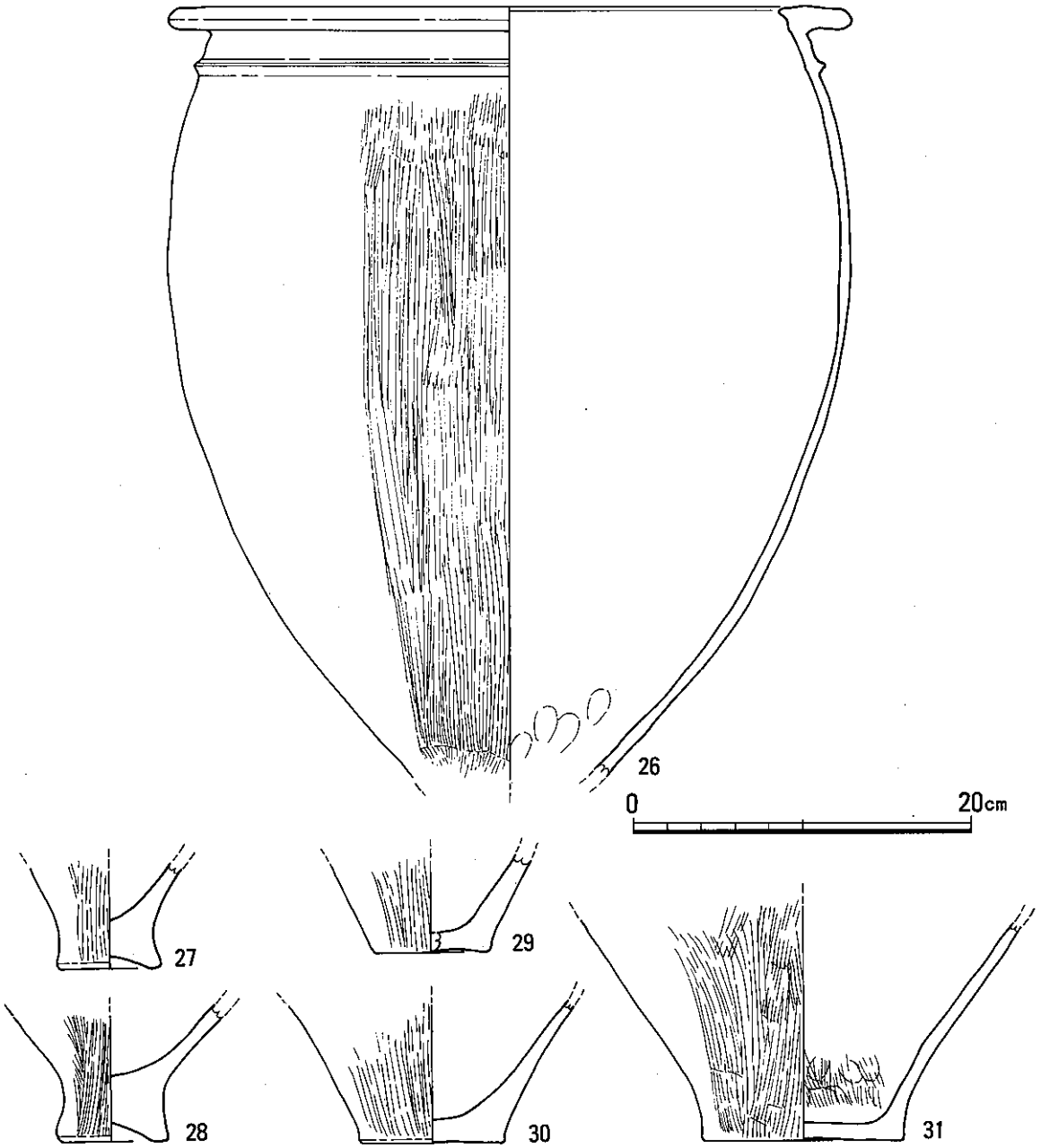


図 6　A地点SK112出土土器実測図②（1/4）

ＳＫ113

径約1.55m×85cm、深さ約60cmの土坑。

出土遺物（図７－32）

甕（32）

断面三角形の口縁の甕で、口径は25.8cm（復元）である。

ＳＫ115

溝ＳＤ02を切る。径約50cm×30cmのピット。

出土遺物（図７－33）

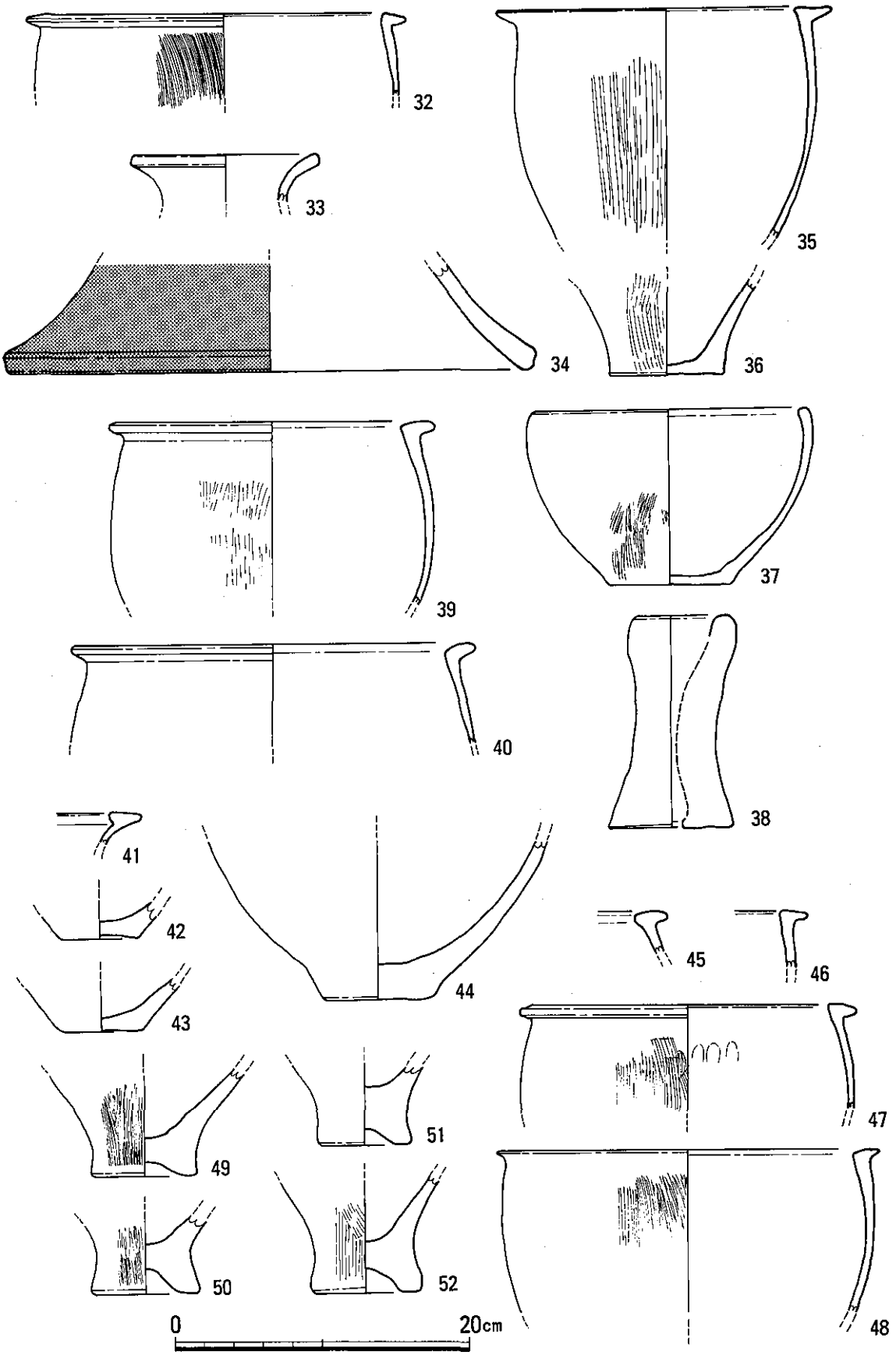


図7　A地点SK113(32)・SK115(33)・SK146(34)・SK152(35～38)・SK159(39・40)・SK160(41～52)出土土器実測図（1/4）

壺（33）

緩やかに「ハ」の字形に開く口縁部である。口径は12.4cm（復元）である。

ＳＫ146

径約25cmの円形ピットで、深さ約40cm。

出土遺物（図７－34）

筒型器台（34）

脚端部のみで、全容を窺えない。遺物包含層から透かしを持つ脚部の小片が数点出土しており、その型式のものである可能性がある。端径35.0cm（復元）で、外面丹塗り。

ＳＫ152

径約1.1ｍ×75cm、深さ35cmの土坑。

出土遺物（図７－35～38）

甕（35・36）

35は不完全な逆Ｌ字形口縁の甕。口径22.8cm（復元）。36は底径8.0cm（復元）の底部。

鉢（37）

口径18.3cm、器高12.0cm、底径8.4cmである。

支脚（38）

器高8.6cmのものだが、器台になるかもしれない。

ＳＫ159

調査区外南側にも広がるため全掘できなかった。掘り上げた部分で幅約1.2ｍ、深さ約40cmの土坑である。

出土遺物（図７－39・40、図13－140）

甕（39・40）

39は口径22.2cm（復元）。40の口縁部は内傾し、口径27.0cm（復元）である。

石器

石剣（140）

小型の磨製石剣と分類したが、形態的には石鏃に近い。茎を作り脊には鎬を有する。残存長8.0cm、残存幅1.7cmである。

ＳＫ160

ＳＸ11と切り合い関係にあるが、前後関係が不明で西側の境は不明瞭。概ね1.5m×1.2m、深さ60cmの大型土坑。性格は不明。南側はＳＤ02と接している。

出土遺物（図７－41～52）

壺（41～44）

41は口縁部の小片。42～44は底部で、底径は42が5.2cm（復元）、43が5.6cm、44が7.4cmである。

甕（45～52）

口縁部は未発達な逆L字形。45・46は小片である。47は口径23.0cm、48は口径26.0cm(復元)。49～52は上げ底の底部で、器形的には45～48の口縁部と対応するものである。底径は49が7.2cm、50が7.4cm、51が6.4cm、52が7.6cmである。

ＳＫ161

径約1.7m×1.4m、深さ約60cmの大型の土坑。ＳＫ162に切られる。

出土遺物（図８－53～57、図15－149）

甕（53～57）

53は口径29.4cm。54～57は底部で、57は平底である。底径は54が7.4cm、55が7.7cm、56が6.6cm、57が8.3cm（復元）である。

石製品

砥石（149）

１ヶ所を特に擦り込んだ溝状の窪みが残る。長さ4.6cm、高さ3.6cm。

ＳＫ162

ＳＫ161を切る。南側は調査区外に出る。径約1.3m×（１m＋χ）の大型土坑。

出土遺物（図８－58）

甕（58）

やや上げ底気味の底部である。底径7.3cm。

ＳＫ163

調査区東隅に位置し、かなりの部分が調査区外にある。一部しか掘られていないが、大型の土坑である。掘り上げた部分で深さは約45cmある。

出土遺物（図８－59）

甕（59）

口縁部の小片で、断面形は三角形である。

ＳＫ164

径約40cm×30cm、深さ約20cmのピットである。

出土遺物（図14－141）

土器は弥生中期とだけわかる小片があるが、図示できない。

石器

石鏃（141）

大型の磨製石鏃で、先端部を欠く。残存長は5.2cmで、本来７cm近くはあったと考えられる。茎を

作りだし、鎬を有する。厚さは6㎜。実用品であったとすれば殺傷力は強力である。

ＳＫ169

径約1.2ｍ×80㎝、深さ約40㎝の土坑。

出土遺物（図８－60・61）

甕（60・61）

ともに小片である。61は「く」の字の端部で下方に曲げる。

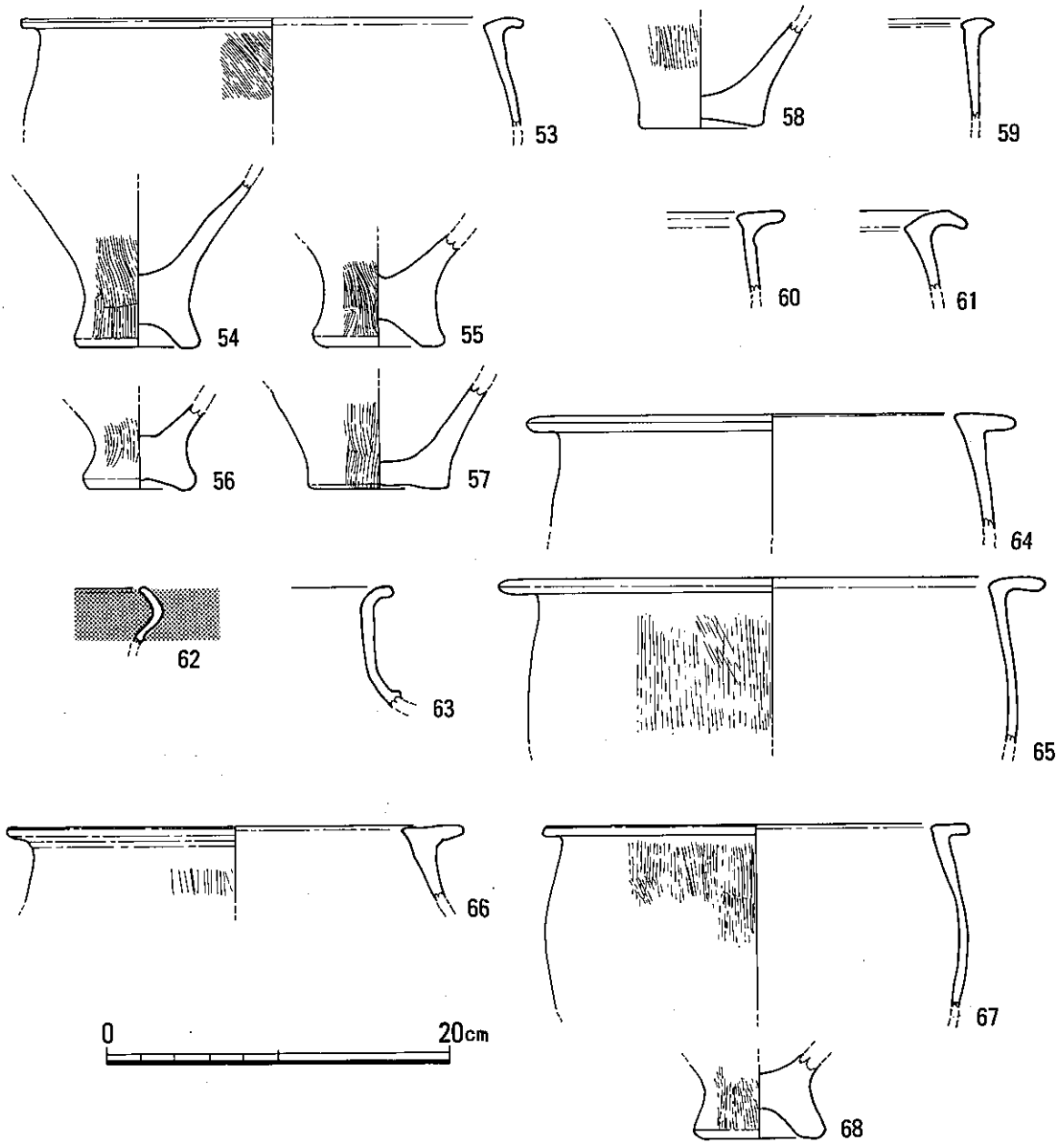


図８　A地点SK161(53～57)・SK162(58)・SK163(59)・SK169(60・61)・SK178(62)・SK200(63～65)・SK236(66)・SK239(67・68)出土土器実測図(1/4)

ＳＫ178

径約１ｍ×70cm、深さ約45cmの土坑。

出土遺物（図８－62）

壺（62）

袋状口縁壺の小片。内外面共に丹塗り。

ＳＫ200

径約1.15ｍ×85cm、深さ約40cmの土坑。

出土遺物（図８－63～65）

壺（63）

口縁部の小片で断面しか掲げられない。端部を小さく外反させ、頸部と肩部の境に１条の凸帯を巡らす。

甕（64・65）

ともに逆Ｌ字状の口縁部だが、64は内面が突出する型式、65は丸みを持って外反する型式である。64は口径28.6cm（復元）、65は口径32.0cm（復元）である。

ＳＫ236

東端は調査区外にある。径約(60cm＋x)×50cm、深さ約65cmの土坑。

出土遺物（図８－66）

甕（66）

外面の仕上げが十分でないため肉厚となっている。口径は26.8cm（復元）である。

ＳＫ237

径約70cm×50cm、深さ50cmの土坑。

出土遺物（図13－134）

土器は弥生中期とだけわかる小片が若干あるが、図示できない。

石器

石鑿（134）

立岩産の石材を用いた鑿形の石器で、刃部側を欠失している。残存長4.7cm、厚さは８mmである。

ＳＫ239

溝ＳＤ02と接する。径約１ｍ×80cm、深さ約65cmの土坑。

出土遺物（図８－67・68）

甕（67・68）

67は口径25.0cm。68は上げ底の底部で、底径7.8cmである。

ＳＤ01

調査区をほぼ東西に直線的に走る溝。ＳＤ02とは約20ｍの間隔をあけほぼ平行している。幅約50cm～60cm、深さは最も深い部分で約20cmである。断面の形は底の大きなＵ字形である。

出土遺物（図９－69）

甕（69）

丸味を持って「く」字状に外反する口縁部の小片である。

ＳＤ02

調査区の南端に位置する溝。幅約60cm～70cm、深さは最も深い場所で約25cm。この溝の南側の肩の面をなす落ち込みの広がりが次に述べるＳＸ01である。

出土遺物（図９－70～81、図13－133）

壺（70～73）

70は口縁部の小片で、端部の伸びはあまり大きくない。71～73は底部で、底径は71が5.6cm、72が9.4cm、73が6.1cm（復元）である。

甕（74～80）

口縁部の形態は三角形、未発達な逆Ｌ字形のものが多い。74は口径27.4cm（復元）、75は口径26.1cm、76は口径25.8cm、77は口径26.4cm（復元）である。78・79は小片。80は上げ底の底部で、底径6.7cmである。

鉢（81）

胴部の張りがなく鉢形となる。口径は21.6cm（復元）である。

石器

石斧（133）

柱状片刃石斧の折損品で、折損後砥石として再利用されている。１面には溝状にすり減った窪みが見られる。

ＳＸ01

溝ＳＤ02の南側の肩の面に当たる性格不明の落ち込みで、その範囲はかなり広いが調査区外にも広がるため、正確な大きさはわからない。

出土遺物（図９－82～92、図10、図12－124、図14－146、図15－150）

壺（82～88）

82・83は口縁部の上面に粘土帯を貼りつけるものである。82は端部に刻みを施す。口径は18.0cm（復元）である。83は大きく張り出す胴部が続き、頸部と肩部の境に１条の凸帯を巡らす。肩部外面の一部に丹が残っており、本来全面丹塗りであったと考えられる。口径は19.0cm（復元）である。84は「ハ」の字形に外反する口縁部。口径は18.4cm（復元）である。内外面ともにミガキで、外面には縦方向の暗紋が入る。85は扁球形の胴部で最大径は16.9cm（復元）である。外面はミガキ。86は無頸壺の口縁部小片で、端部を下方に丸く収める。87・88は底部で、87の外面には暗紋が入る。

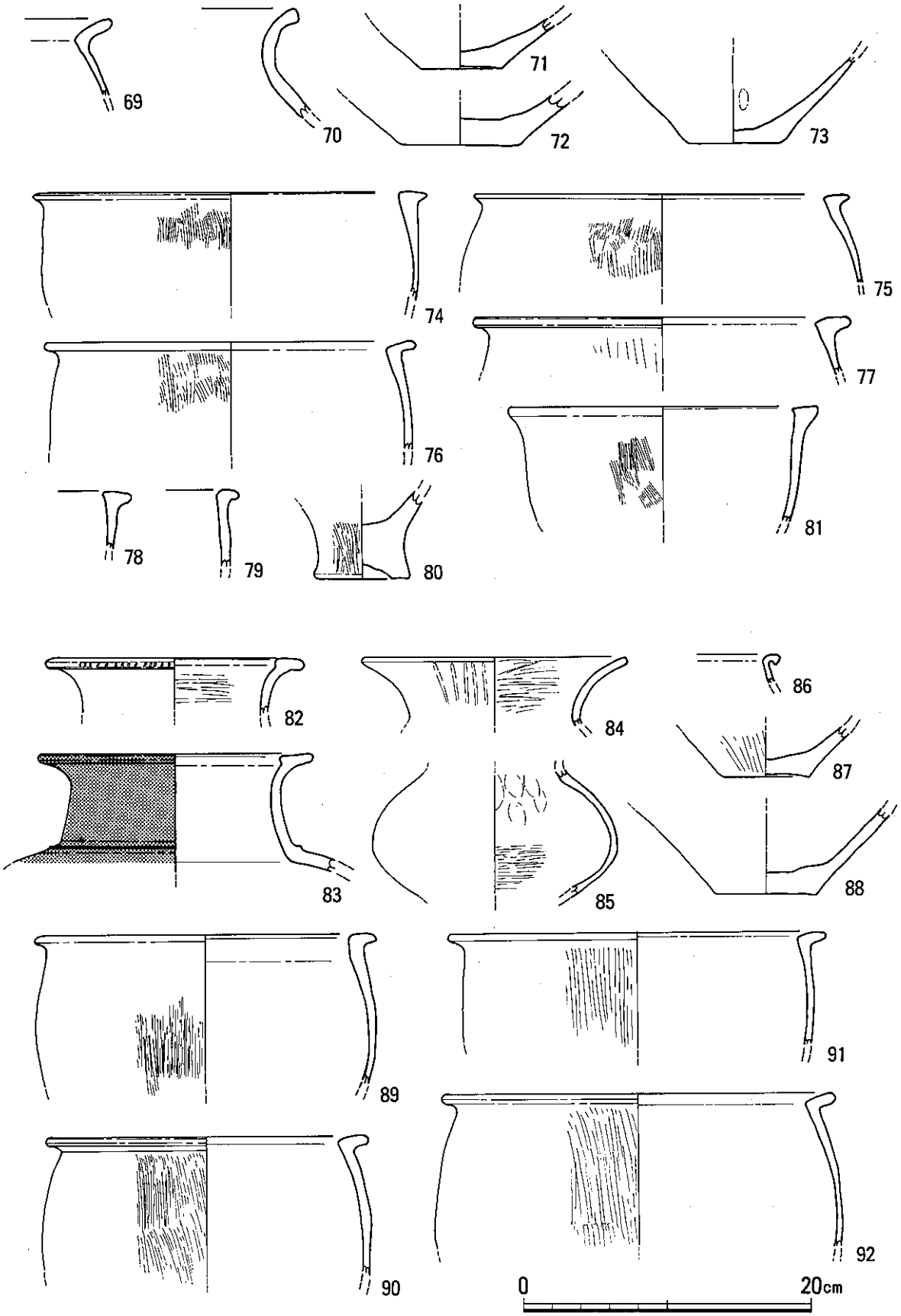


図 9　A地点SD01(69)・SD02(70～81)出土土器実測図、SX01(82～92)出土土器実測図①（1/4）

底径は87が5.9cm、88が7.0cmである。

甕（89～105）

93～95は肩部に一条の凸帯を巡らす。口径は89が23.8cm（復元）、90が22.4cm（復元）、91が26.2cm（復元）、92が27.6cm（復元）、93が29.6cm（復元）、94が29.0cm（復元）、95が28.2cm（復元）、96

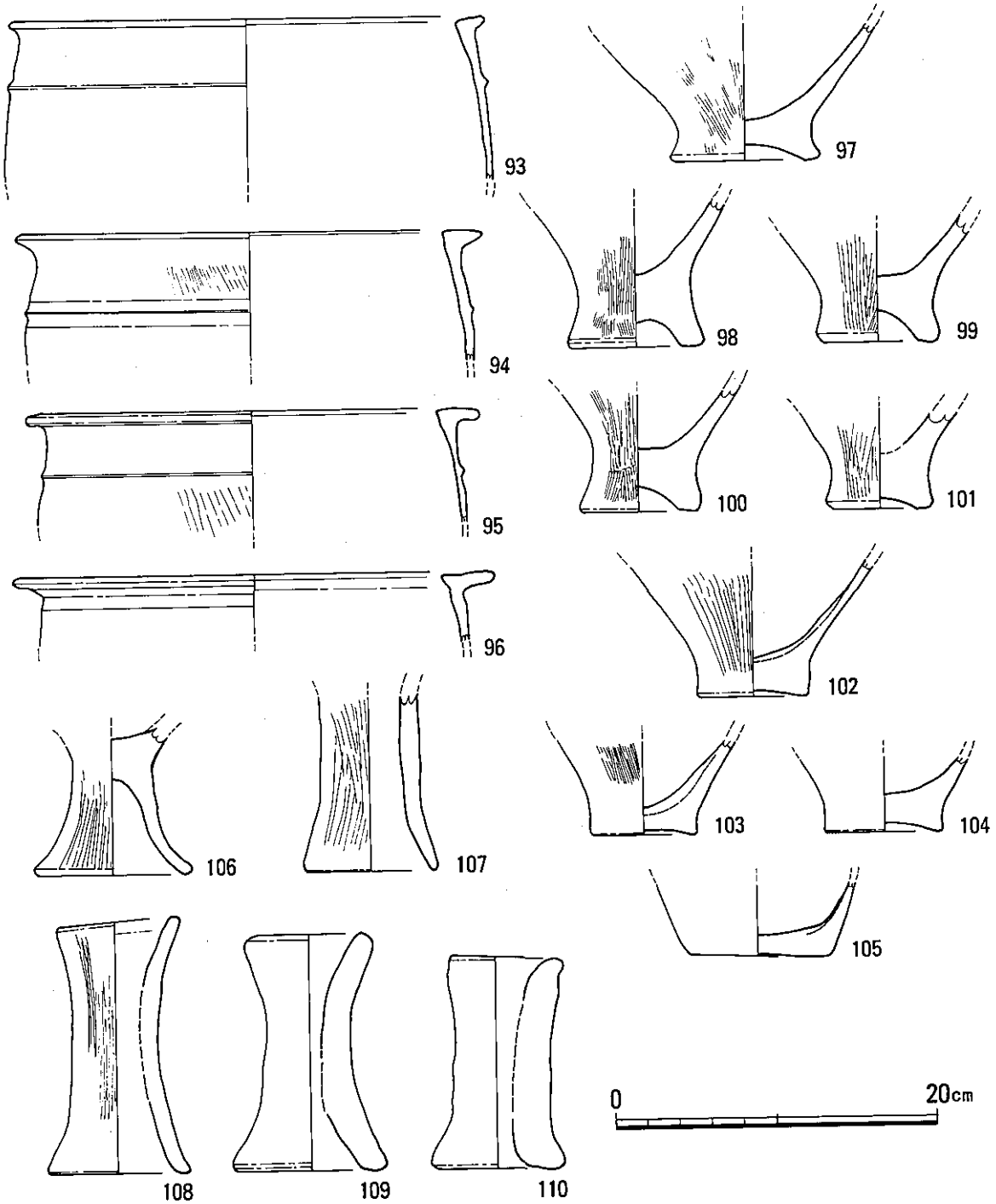


図10　A地点SX01出土土器実測図②（1/4）

が30.0cm（復元）である。97～105は底部で、上げ底のものと平底のものとがある。底径は97が9.3cm、98が8.5cm、99が7.8cm、100 が7.5cm、101 が6.8cm、102 が9.0cm（復元）、103が7.7cm、104が7.4cm、105が9.0cmである。105は胴部への続き方の傾きが小さく異質である。

高杯（106）

杯部を欠く。脚端径10.0cm（復元）、残存高8.9cmである。外面はヘラミガキする。

器台（107～110）

器高は107が11.2cm（残存高）、108が15.7cm、109が14.5cm、110が13.2cmである。110は支脚とすべきであろうか。

土製品

投弾（146）

長さ3.2cm、径1.9cmを測る。

石器・石製品

石包丁（124）

大型の石包丁で、残存長9.5cm、高さ5.7cm。残存部の割合から考えて孔がないのは不自然で、未製品と考えられる。

砥石（150）

長さ13.8cm、幅5.5cm、高さ6.5cmの砥石。

包含層

遺物包含層からは大量の弥生土器と石器が出土したが、図示できるものはさほど多くはない。約30cmの厚さを持つ包含層であるが、どのようにして形成されたものであるか、いまだ合理的な解釈ができていない。

出土遺物（図11、図12－125～131、図13－132・135～139、図14－147、図15－148・151～153）

壺（111～116）

111～113 は鋤先状口縁の上面に円形浮紋を貼りつけたものである。111は口径29.4cm（復元）。112・113 は小片。112は丹塗りである。114も鋤先状口縁の壺だが、頸部までの残りがよく、1条の凸帯を巡らしているのがわかる。口径28.6cm（復元）である。115は小さく外開きする直口壺の口縁部で、3条の低い凸帯を巡らしている。口径は8.4cm(復元)で、外面はミガキで仕上げている。116は大型壺の胴部下半で、底径10.7cmである。

蓋（117）

甕の蓋となるもので、口径30.0cm（復元）、器高10.0cmである。

高杯（118）

杯部下位から脚部上位にかけてのもの。内外面ともに丹塗りである。

甕（119・120）

119は緩やかに「く」字形に外反する口縁部を持ち、胴部中位に1条の凸帯を巡らす。口径18.8cmである。120は口縁部の外反の程度が強く、器壁は厚い。口径15.2cm（復元）である。

鉢（121・122）

121は小型の無頸壺と分類すべきものかもしれない。底部は平底で、口縁部は端部を欠くが、緩やかに外反する。残存部で口径は9.1cmを測る。122の鉢は口縁端部の仕上げが雑で、波打っている。口径14.0cm（復元）、器高11.8cm。底面には穿孔されたと思われる穴がある。

石器・石製品

石庖丁（125～131）

いずれも折損品。127は立岩産。131は大型である。

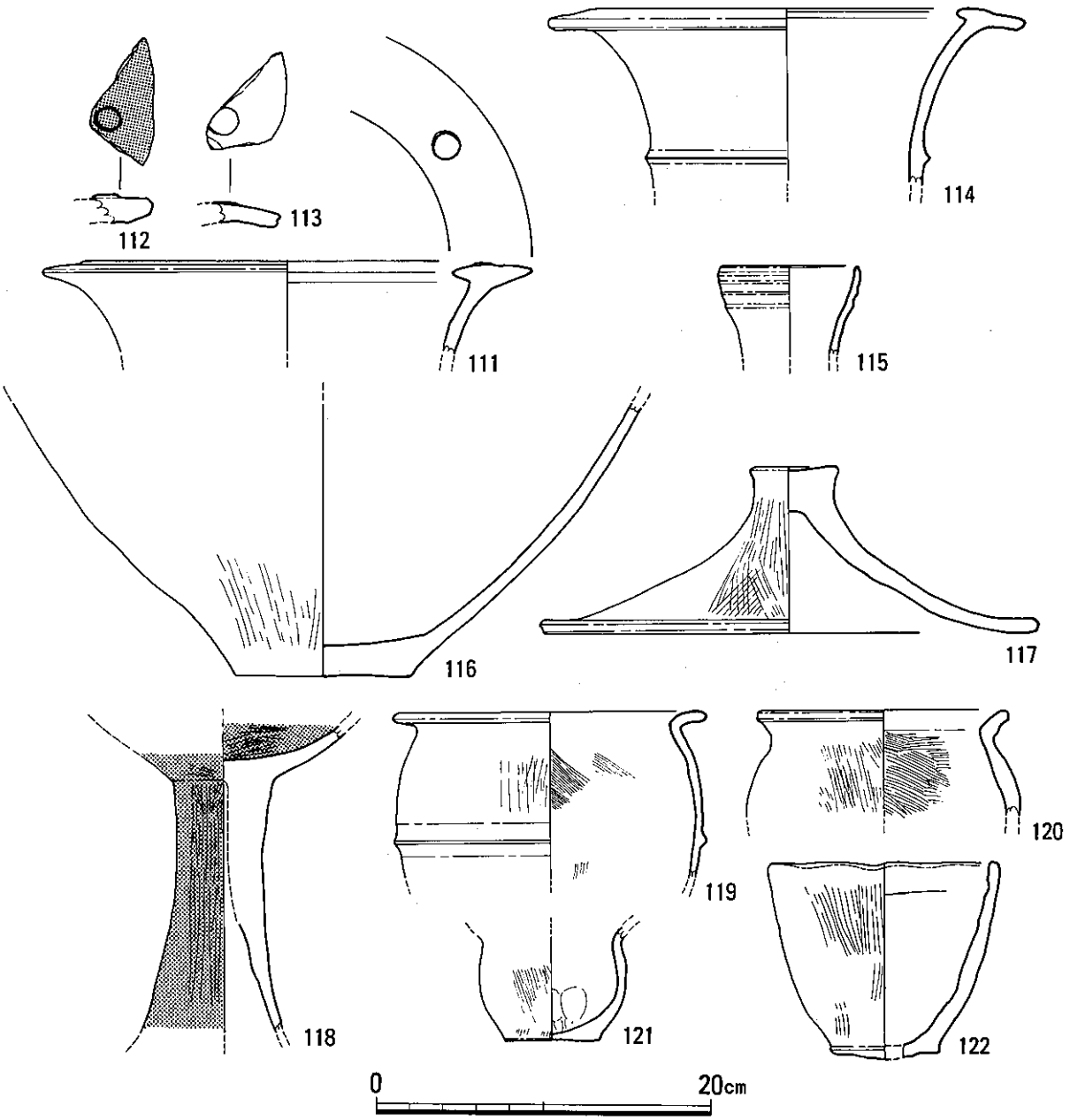


図11　A地点包含層出土土器実測図（1/4）

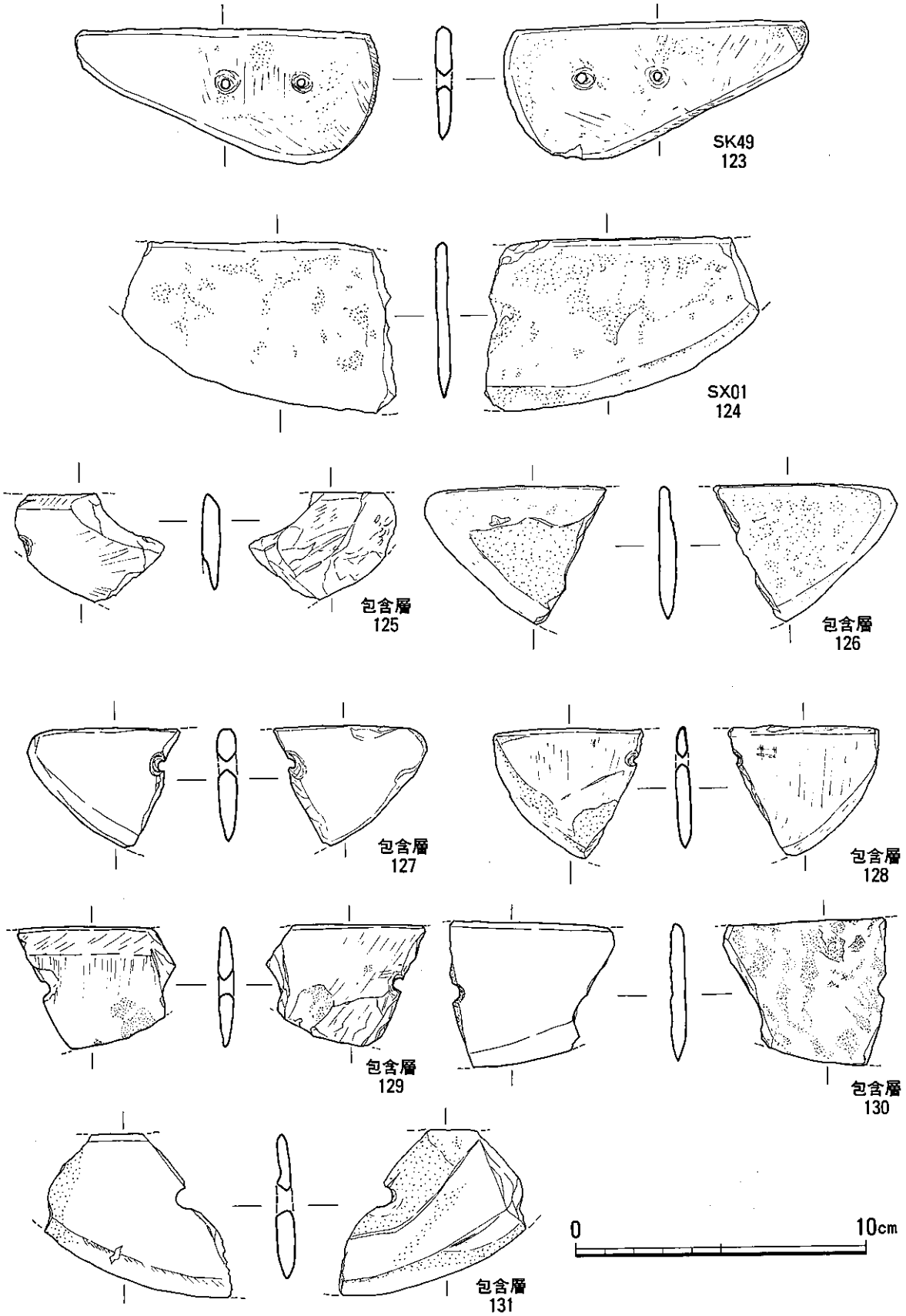


図12　A地点出土石器実測図①（1/2）

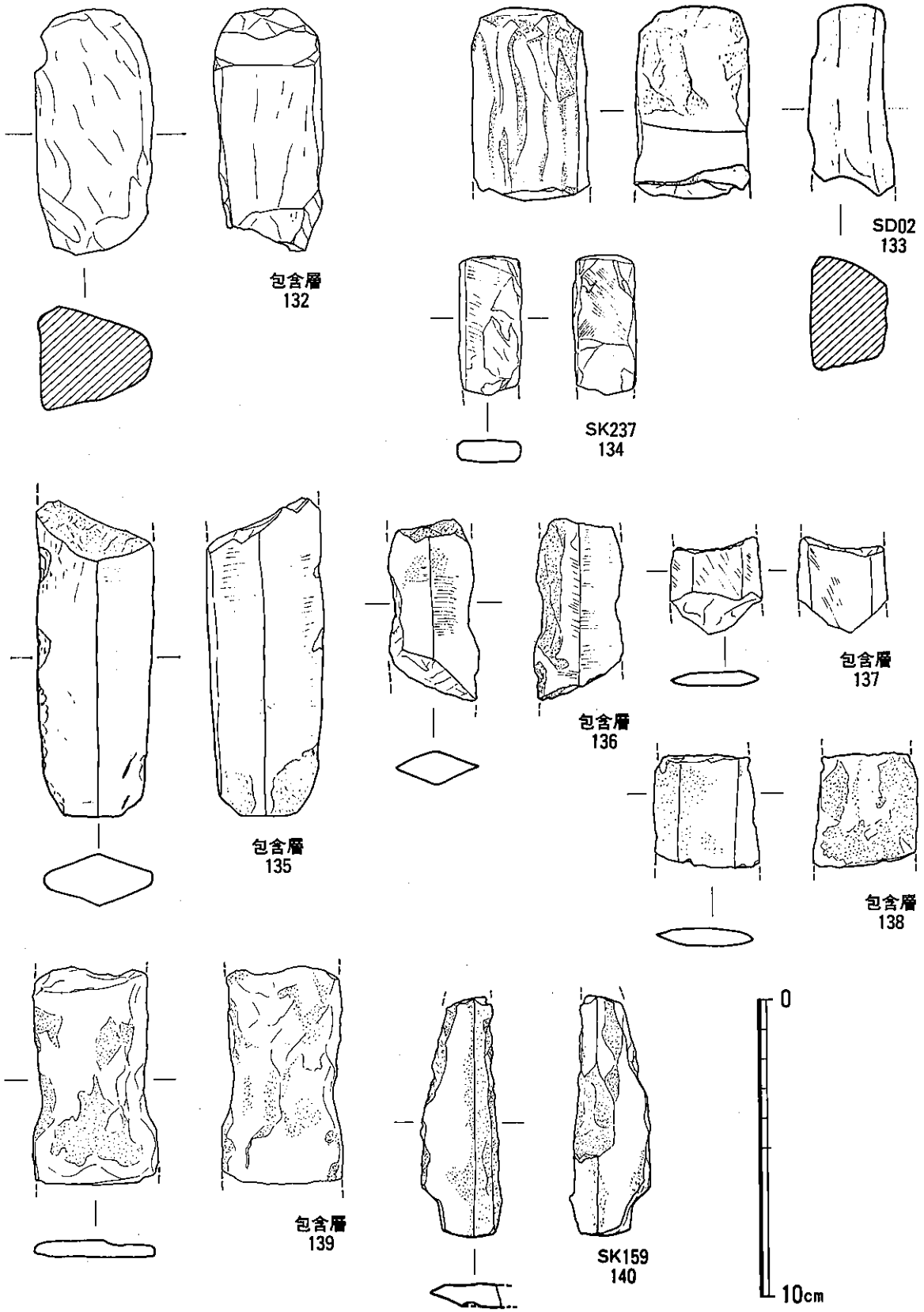


図13　A地点出土石器実測図②（1/2）

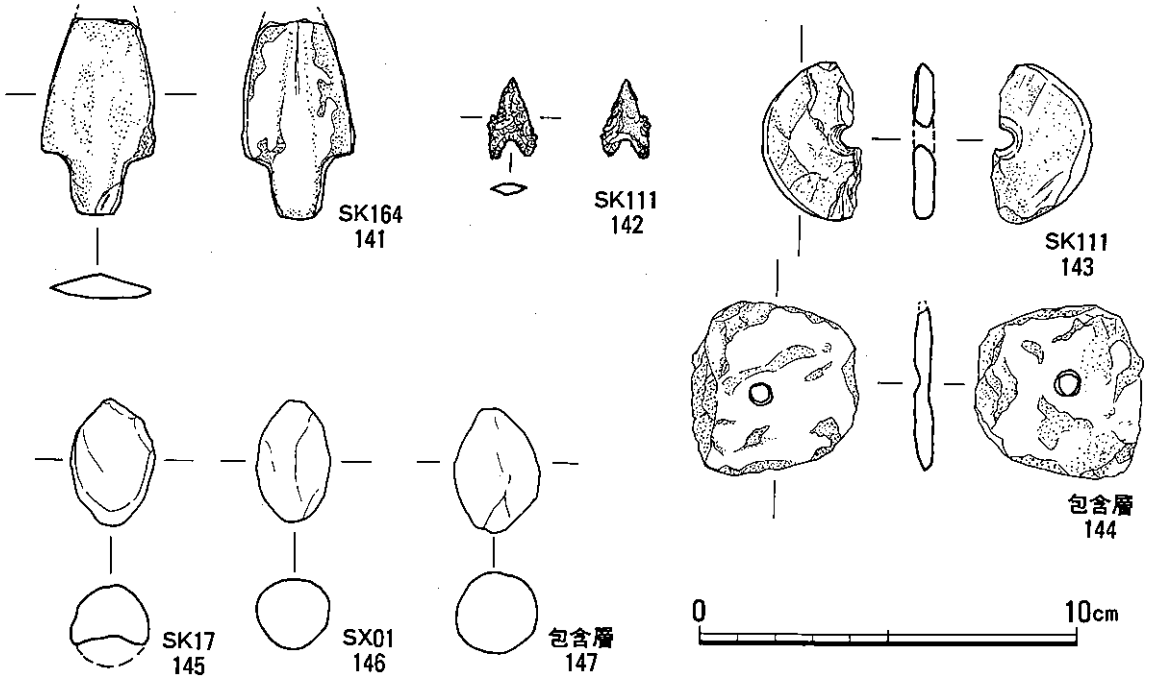


図14　A地点出土石器実測図③・土製品実測図（1/2）

石斧（132）

刃部側を欠損する柱状片刃石斧。残存長8.1cm。

石剣（135～139）

135は大型の石剣で、石槍とも言いうるものである。鎬を有するが、茎は作りださない。残存長10.0cm、幅3.8cm、厚さ1.7cmである。石材は立岩産である。136は残存長6.0cm、幅3.0cm、厚さ1.1cmで、明瞭な鎬を作る。135・136は、ともに鎬を作り出さない扁平なもの。139も扁平な石剣だが、長大で両側に抉りを入れ把の部分を作っている。鋒側を欠く。残存長7.3cm、厚さは6㎜である。

紡錘車（144）

未製品で、両側から穿孔を行っているがそれぞれの位置がずれたため、製作途中で放棄されたものと思われる。直径4.4cm、厚さ4㎜である。

鋳型（148）

青銅器の鋳型で、砥石として再利用されている。磨耗が著しいが、銅剣を製作したものと思われる。鋳型としては2面（A面・B面）ある。銅剣とすればA面では刃部から脊までの距離は9㎜、B面では1.1cmとわずかながら差がある。残存長5.8cm、幅2.2cm。石材は石英長石斑岩である(山口大学名誉教授、松本徑夫先生のご教示による)。

砥石（151～153）

151は長さ18.5cm、幅7.2cm、高さ6.7cm。上面はくぼむ。152は長さ13.8cm、幅5.7cm、厚さは6～9㎜と扁平である。153は長さ6.2cm、幅8.0cm、厚さ2.6cm。両面がくぼむ。

土製品

投弾（147）

長さ3.3cm、径2.1cmを測る。

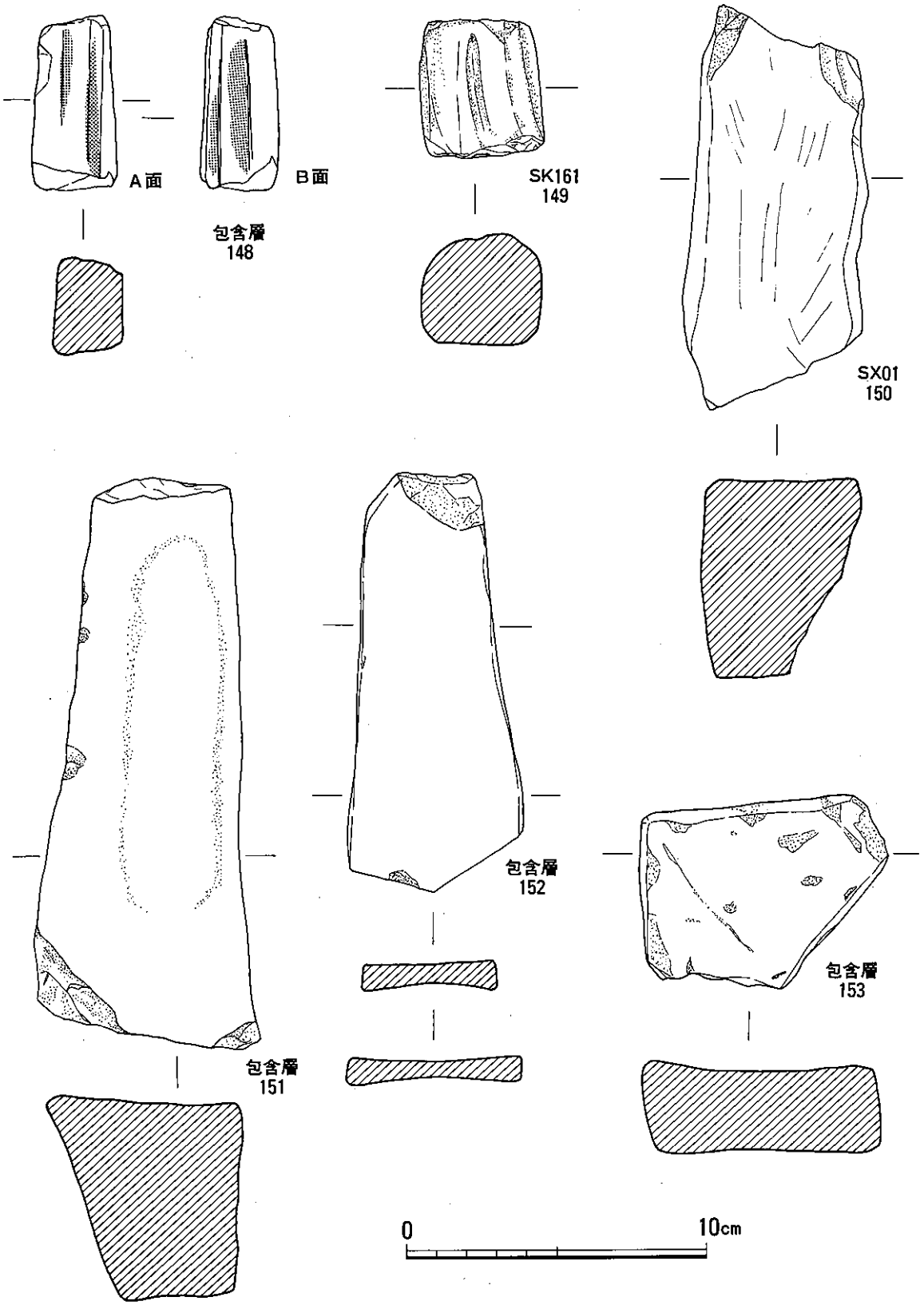


図15　A地点出土鋳型・石製品実測図（1/2）

2　B地点の調査

(1)　概要

大野城市瓦田1065－2に当たる。市道建設工事に伴い調査したもので、現在市道となっている。調査面積は約40m²である。A地点と並行して調査し、発掘調査自体は1988年6月に終了した。

調査区は、原状で道路とコンクリートの排水溝が両側にあったためその制約を受け、あまり広く掘り広げることもできず、1号トレンチ（形状は溝形ではない）と2号トレンチと呼称した2つの小区画に分けざるをえなかった。1号トレンチと2号トレンチの間があいているのは、ここにコンクリートでできた構造物が埋まっていたためである。

遺構面までの深さは原地表から約1.1mあった。A地点・C地点・E地点で確認された遺物包含層の堆積は全くなかった。

検出した遺構は小型の土坑（ピット，SK）群である。遺構密度は高くはなかった。

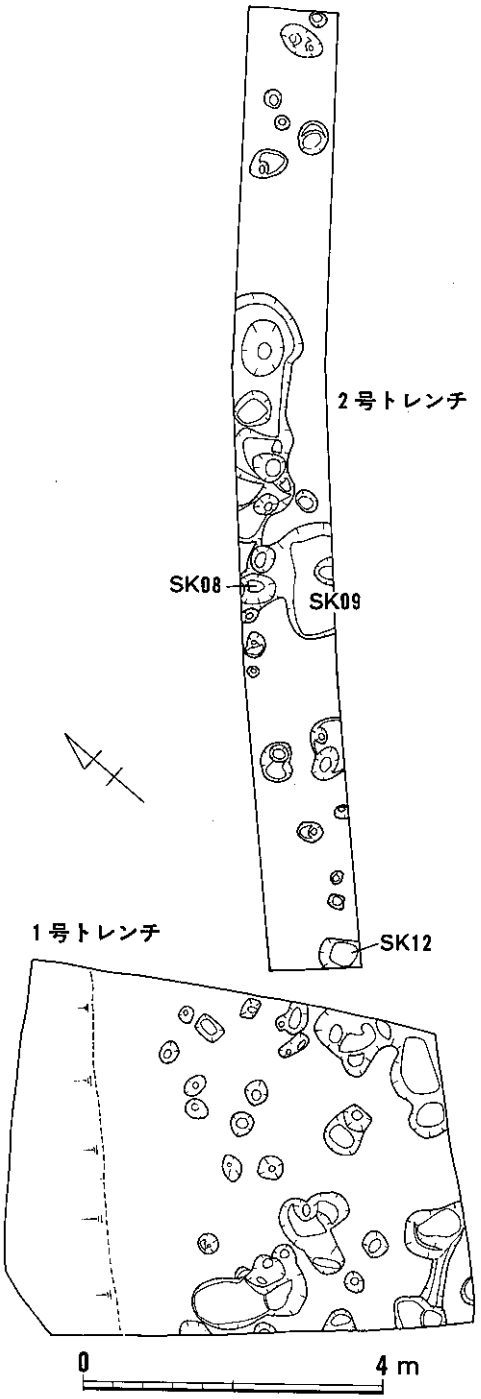


図16　B地点検出遺構図（1/100）

(2)　各遺構出土の遺物

土器はA地点同様、弥生土器ばかりであったため、土器の器種の前には改めてそのことを表記していない。また、出土量も少なく、弥生中期前葉から中葉とだけわかる小片がほとんどで、図示できるものは少ない。

SK08

2号トレンチ内で検出した径約40cm×30cm、深さ約20cmのピットである。

出土遺物（図17－154）

甕（154）

口径26.0cmを測る。

SK09

完掘できていない。堀り上げた部分で、長さ約1.05m、深さ約20cmの土坑。

出土遺物（図17－155～157）

甕（155～157）

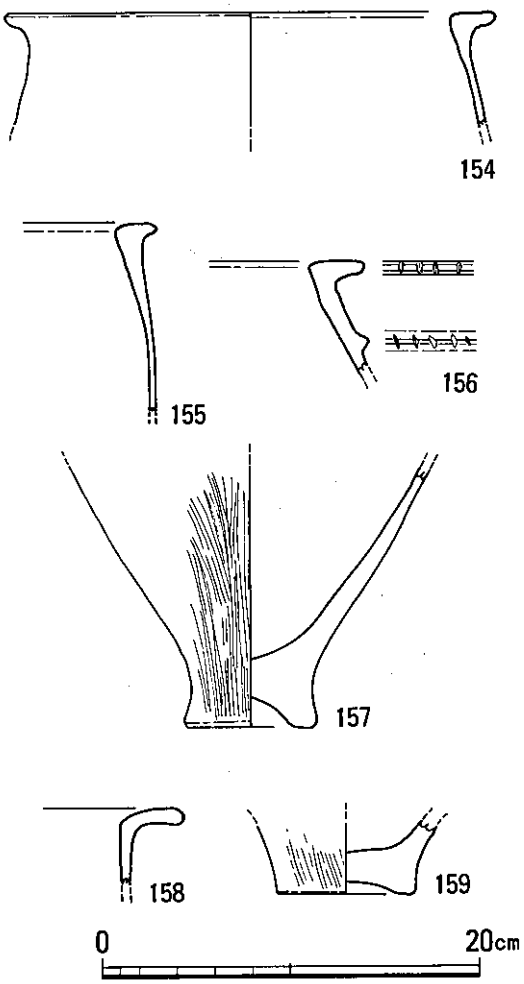


図17　B地点SK08・SK09・SK12
出土土器実測図（1/4）

155・156の口縁部はともに小片である。156には口縁下に凸帯を巡らし、口縁端部と凸帯に刻みを施す。157は底径7.0cmの上げ底の底部である。

ＳＫ12

これも調査区の制約で完掘できていない。深さ約50cmの土坑である。

出土遺物（図17－158・159）

甕（158・159）

158は逆Ｌ字形の口縁部の小片である。159はやや上げ底気味の底部で、底径7.4cmである。

１号トレンチ遺構面直上

石器

石庖丁（図18－160）

立岩産の石庖丁で、破損したものを再研磨したと考えられる。長さ9.6cm、高さ3.9cmである。

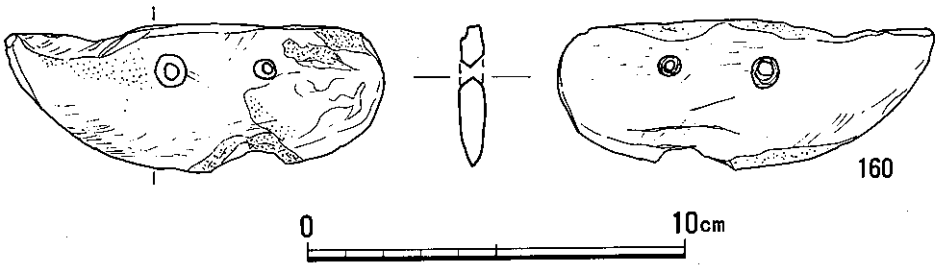


図18　B地点出土石器実測図（1/2）

3　C地点の調査

(1)　概要

調査期間は1989年７月10日から同年８月18日までである。大野城市瓦田1052－３に当たる。現在は市道となっている。遺構が存在する部分についてのみ約200㎡を調査した。石勺遺跡の東端の一部分である。遺構が存在しない部分とは調査区の東側（すなわち調査区外）で、全面が砂層の堆積である。東側を流れる牛頸川の氾濫によって浸食され堆積したものと考えられるが、この氾濫によって遺跡の一部も破壊されたと理解される。したがって、石勺遺跡の範囲は本来さらに東側にまで広がっていたことが推測される。

黒色土の遺構面の上には、Ａ地点同様、大量の遺物を含む厚さ約30～40cmの包含層が堆積していた。しかし包含層の範囲は調査区全面ではなく、西南隅の部分だけであった。

検出した遺構は大小の土坑（ピット，ＳＫ）群である。東南隅では比較的規模の大きな遺構の切り合いが認められた。ＳＫ145～ＳＫ147は、東南隅の土坑群の埋没後に掘られた大土坑で、この部分は色を変えて表現している。

(2)　各遺構出土の遺物

Ａ・Ｂ地点同様、土器は弥生土器ばかりであったため、土器の器種の前には改めてそのことを表記していない。計測値の後ろに「(復元)」とあるのは、図上復元であることを表す。

ＳＫ01

径約1.6ｍ×1.3ｍ、深さ約70cmの楕円形の土坑で、ＳＫ02の一部を切っている。

出土遺物（図20・図26－244・図27－256）

甕（161～165）

161は口径25.0cm、162は口径24.6cm（復元）、163は口径26.0cm（復元）である。164・165は上げ底の底部で、161～163と型式的に対応するものである。底径は164が9.6cm、165が7.0cmである。

器台（166）

支脚に分類すべきかもしれない。また、天地逆の可能性もある。器高は12.4cmである。

石器

石庖丁（244）

折損品で風化が著しい。孔が穿たれておらず、未製品である。残存長8.9cm。

土製品

土製円盤（256）

土器片を再加工したものである。径3.6cm×3.3cm、厚さ６㎜。用途は不明である。

ＳＫ02

西側の範囲はＳＫ147との関係で不明確で、全体の形状を知りえなかった。幅約２ｍ、深さ約20cm

図19　C地点検出遺構図(破線は攪乱)（1/100）

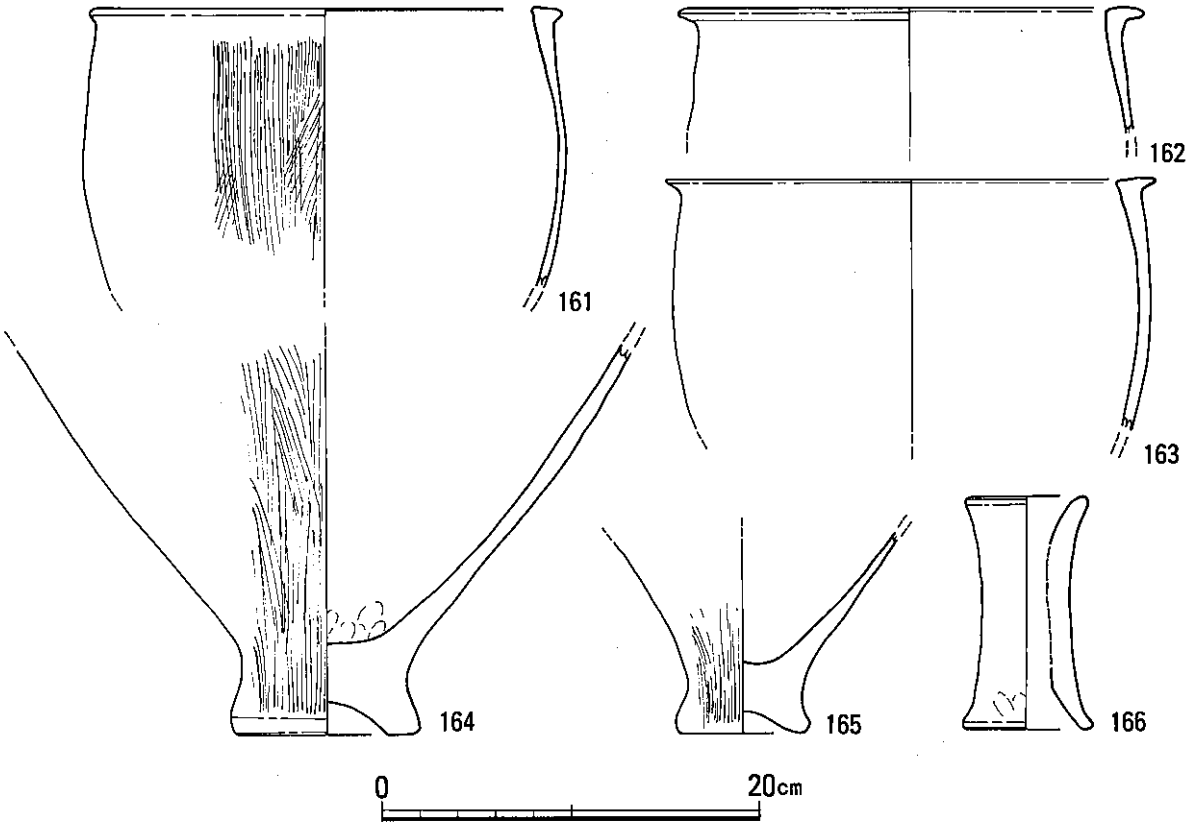


図20　C地点SK01出土土器実測図（1/4）

の大型土坑である。

出土遺物（図21－167・168）

甕（167・168、図27－253）

167は口縁部内面に稜線が入る。口径22.0cm（復元）。168は口縁部の小片である。

石器

石鏃（253）

黒曜石製の打製石鏃で、抉りはあまり深くない。長さ2.7cm、幅1.3cm、重量2.4ｇである。

ＳＫ04

ＳＫ34・ＳＫ36周辺の遺構が明確に現れるまでの、比較的大きな遺構のまとまりを１つにくくったもので、形のある遺構ではない。調査過程の便宜的な呼称である。

出土遺物（図26－245、図27－251）

石器

石庖丁（245）

立岩産の石庖丁の折損品で、残存長、高さともに4.2cmである。

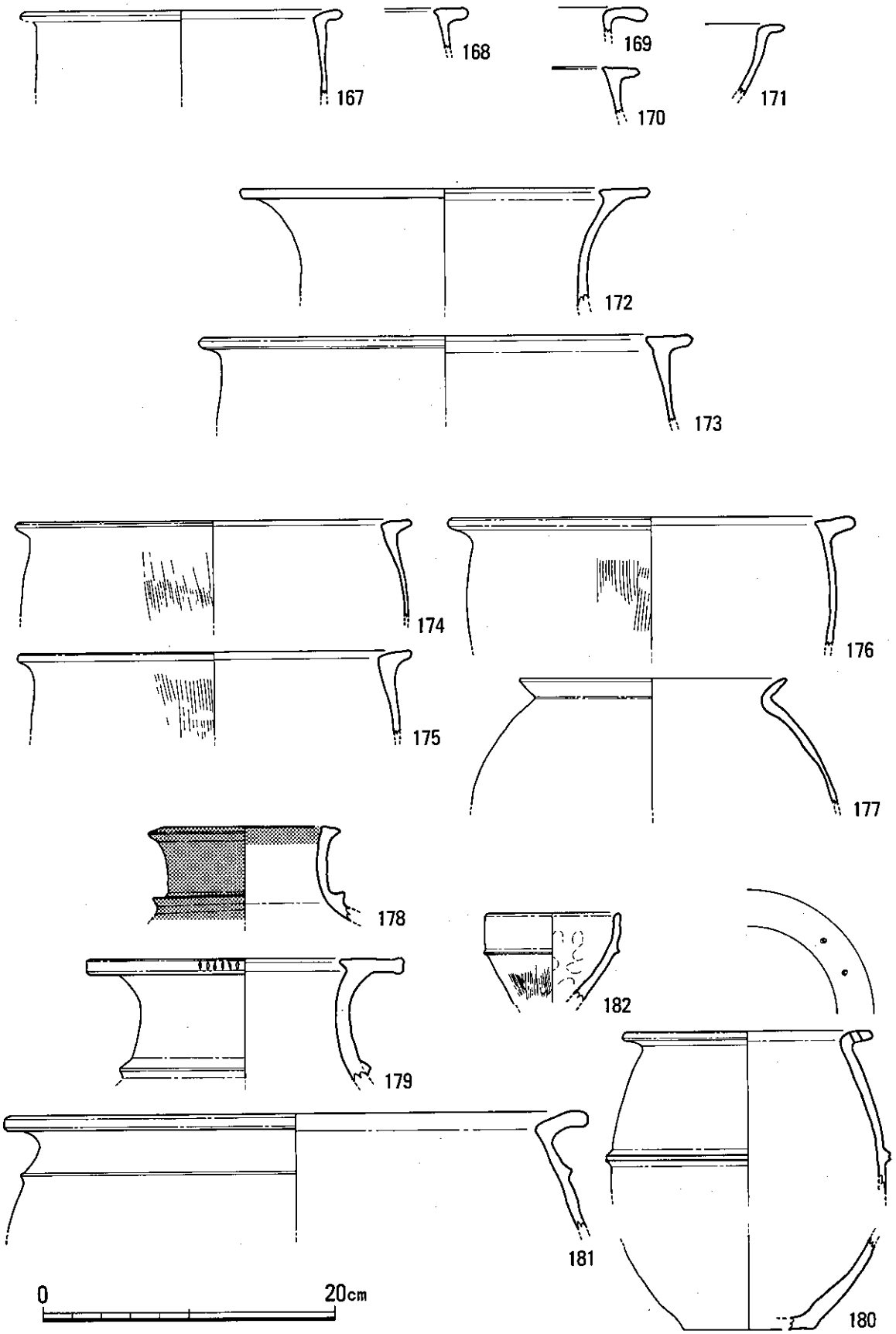


図21　C地点SK02(167・168)・SK08(169～171)・SK18(172・173)・SK29(174～177)・SK31(178～182)出土土器実測図（1/4）

石剣（251）

磨製石剣の折損品である。明瞭な鎬を有し、刃もいまだ鋭く残る。残存長4.0cm、幅4.3cm。

ＳＫ08

直径約50cm、深さ約35cmの円形土坑である。

出土遺物（図21－169～171）

甕（169・170）

どちらも口縁部の小片である。

鉢（171）

逆Ｌ字形に外反する口縁部を持つ鉢の小片である。

ＳＫ18

径約75cm×50cm、深さ約70cmの土坑である。

出土遺物（図21－172・173）

壺（172）

鋤先形口縁を持つ壺で、口径は28.0cm（復元）である。

甕（173）

未発達なＴ字形の口縁部を持つ甕で、口径は33.8cm（復元）である。

ＳＫ23

径約2.6ｍ×1.6ｍの不整形土坑の中に掘られた直径約40cm、深さ約30cmの円形ピットである。

出土遺物（図26－247）

土器は弥生中期のものとわかる小片があるが、図示できない。

石器

石庖丁（246）

折損品で、残存長5.0cm、高さ4.0cmである。

ＳＫ29

２ｍ×2.8ｍ、深さ30～50cmの大型の方形土坑である。底面は平坦である。東隅を楕円形の土坑に切られている。

出土遺物（図21－174～177）

甕（174～177）

174・175は逆Ｌ字形の口縁部を持つもの。174は口径27.2cm（復元）、175は口径27.3cm（復元）である。176は未発達な逆Ｌ字形の口縁部を持つもので、口径28.0cm（復元）である。177は「く」字状の口縁部に丸味を帯びた胴部が続くものである。口径は18.4cm(復元)。上記３つの甕よりも型式的に後出するものである。

ＳＫ31

径約1.8ｍ×1.1ｍ、深さ約70cmの２段掘りになった不整形の土坑。

出土遺物（図21－178～182、図26－247）

壺（178～180）

178は口縁部の未発達な壺である。頸部と肩部の境に１条の大きな凸帯を巡らせる。口縁部内面から外面全部丹塗りである。口径は13.2cm。179は端部に刻みを入れた鋤先形口縁を持つ壺で、頸部と肩部の境に凸帯を１条巡らす。口径は21.8cm（復元）である。180は樽形の無頸壺で、上半と下半は接合しないが同一個体である。口径は17.2cm（復元）、底径は9.0cm（復元）で、器高は18cmほどになろう。口縁部上面には蓋を緊縛するための穴があけられている。胴部最大径（復元で9.5cm）の部位には１条の凸帯が巡る。

甕（181）

内傾する逆Ｌ字形口縁を持つ甕で、口縁下に１条の凸帯を巡らす。口径は40.0cm（復元）である。

鉢（182）

小型の鉢で１条の凸帯を巡らす。口径は9.0cm（復元）、底部を欠くが器高は７cmほどになろう。

石器

石庖丁（247）

残存長5.1cm、高さ4.1cmの折損品。

ＳＫ34

全掘できていないがほぼ円形になろう。径約70cm、深さ約70cmの土坑。

出土遺物（図22－183）

壺（183）

無頸壺の口縁部で、上面に蓋を緊縛するための穴があけられている。口径は18.2cm（復元）。

ＳＫ36

径約70cmのほぼ円形の土坑である。深さ約40cmで、すぐ北側の円形土坑と壁を共有している（切り合っているが、前後関係不明確）。

出土遺物（図22－184～187）

甕（184～187）

いずれも口縁部の小片で、未発達なＴ字形、逆Ｌ字形の口縁を持つものである。

ＳＫ43

径約70cm×85cm、深さ約65cmの土坑である。

出土遺物（図22－188・189）

甕（188）

内傾する逆Ｌ字形の口縁部である。

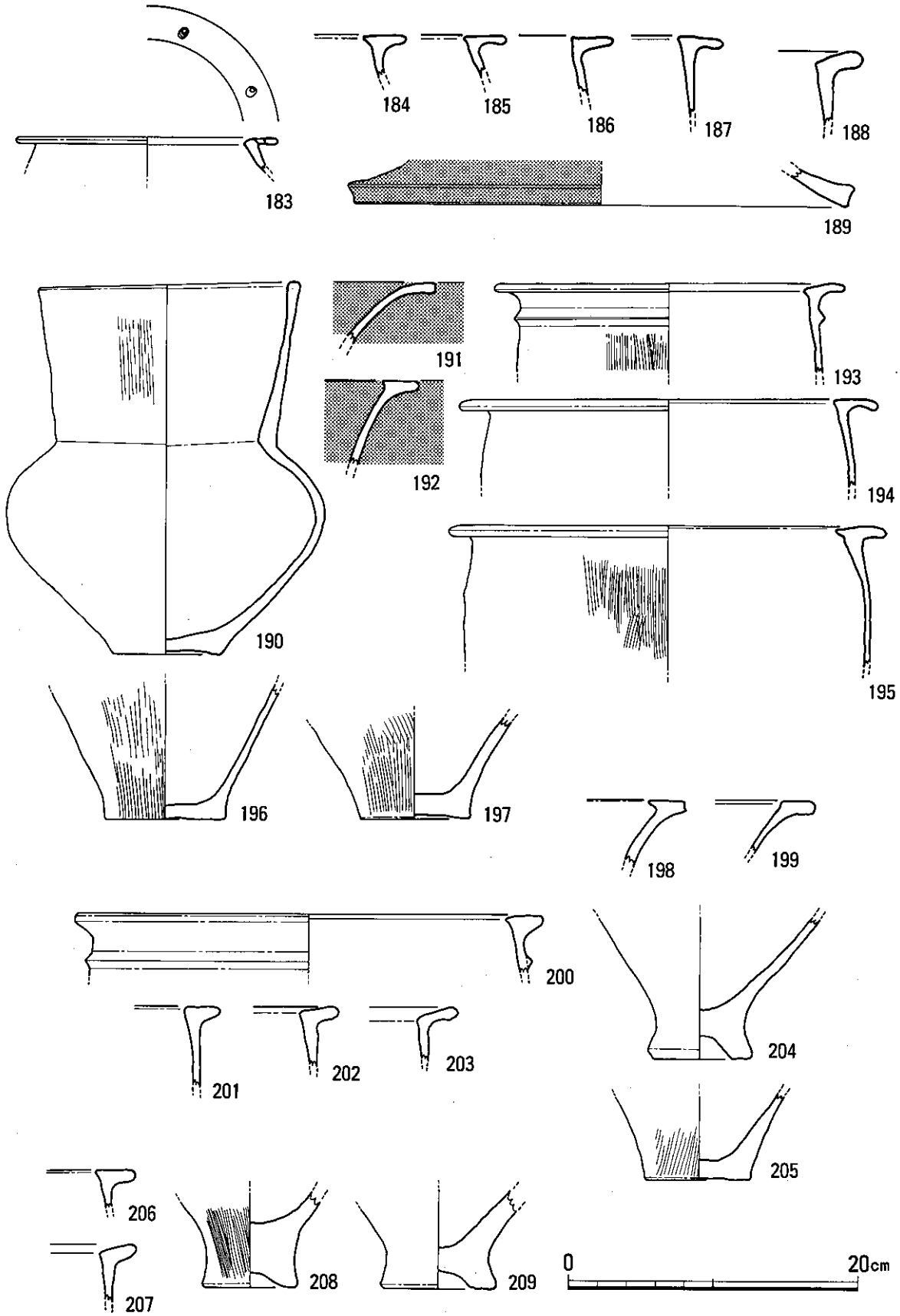


図22　C地点SK34(183)・SK36(184～187)・SK43(188・189)・SK68(190～197)・SK74(198～205)・SK101(206～209)出土土器実測図(1/4)

脚部（189）

径34.0cm（復元）の大型のもので、筒型器台の脚端と考えられる。外面は丹塗りである。

ＳＫ61

径約60cm×50cm、深さ約25cmの土坑で、西側は小ピットと重なりあう。

出土遺物（図27－255）

土製品

紡錘車（255）

約半分が残る。径約5.6cm、厚さ1.1cm。

ＳＫ64

直径約40cm、深さ約50cmの円形土坑。

出土遺物（図26－248）

石器

石庖丁（248）

両端を欠損する。残存長5.2cm、高さ4.1cmである。

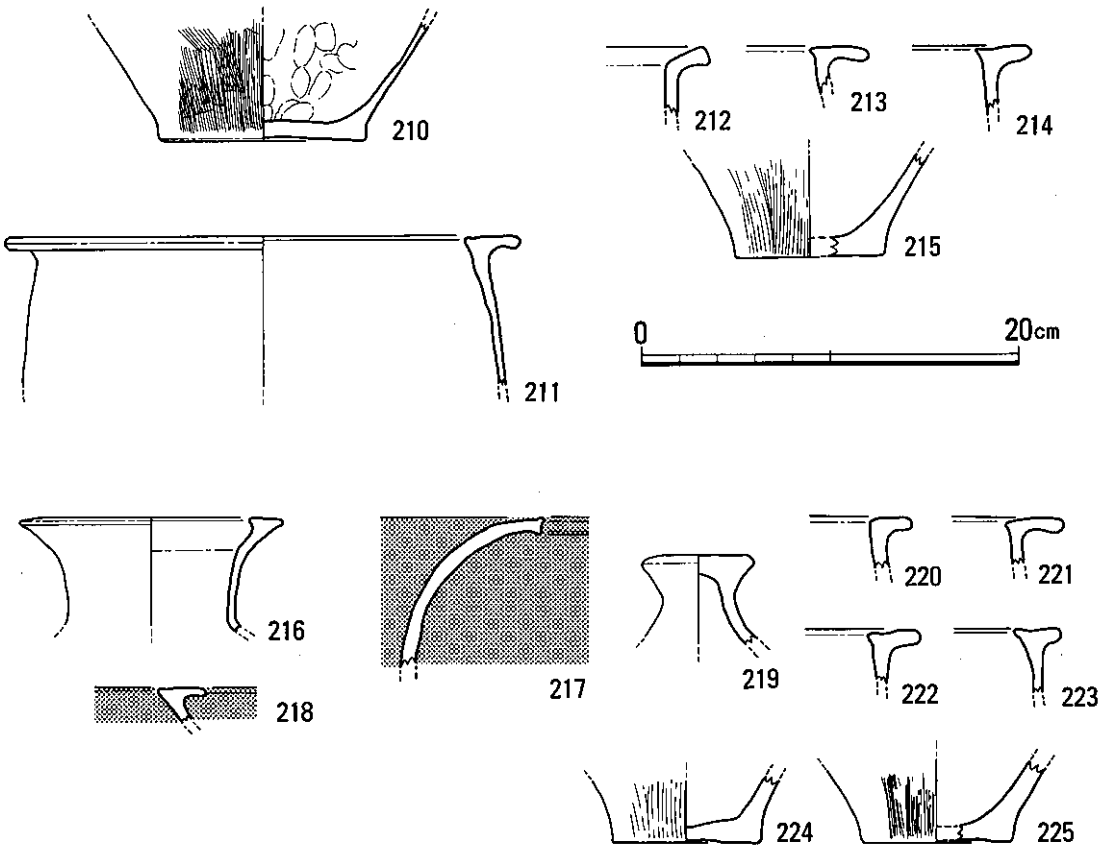


図23　C地点SK108(210)・SK116(211)・SK146(212～215)・SK147(216～225)出土土器実測図（1/4）

ＳＫ68

径約1.5m×90cm、深さ約30cmの楕円形土坑である。南側の一部を円形ピットに切られる。廃棄されたような状況で、まとまって土器片が出土した（図版17－(2)）。

出土遺物（図22－190～197）

壺（190～192）

190は長頸壺であるが口縁部は直行し、端部を丸く収めるだけで終わる。口径18.0cm、器高25.9cm、底径7.4cmの、本調査で全器形がわかる数少ない土器の一つである。191・192は口縁部の小片２種。ともに内外面とも丹塗りである。

甕（193～197）

193～195は未発達なＴ字形の口縁部を持つもの。193は１条の凸帯を巡らす。口径は193が22.4cm、194が29.0cm（復元）、195が30.2cm（復元）である。196・197は平底の底部で、上記の口縁部と型式的に対応する。底径は196が8.4cm、197が7.7cmである。

ＳＫ74

径約1.55m×1.2m、深さ約40cmの一部２段掘りの楕円形土坑。埋土はレンズ状に堆積しており、炭に混じって土器片がややまとまって出土した。なお、ガラス小玉が１点出土したが、遺憾ながら現在確認できていない。

出土遺物（図22－198～205）

壺（198・199）

外反する広口壺の口縁部２種である。

甕（200～205）

200は口径32.4cm(復元)。201～203は口縁部の小片である。204・205は底部の２種で、底径は204・205ともに7.1cm。

ＳＫ101

径約60cm×45cm、深さ約45cmの土坑。

出土遺物（図22－206～209）

甕（206～209）

206・207は口縁部の小片２種。208・209は上げ底の底部で、底径は208が6.6cm（復元）、209が8.0cmである。

ＳＫ108

北側を小土坑に切られる。径約1.35m×55cm、深さ約15～60cmの土坑である。

出土遺物（図23－210）

底部（210）

底径11.0cmで、甕の底部と思われる。

ＳＫ116

長さ約3.7ｍ、幅約75cm、深さ約10cmの溝形の土坑である。

出土遺物（図23－211）

甕（211）

逆Ｌ字形の口縁部を持つもので、口径は27.4cm（復元）である。

ＳＫ146

調査区南西隅の土坑群を切って広がる大型の不整形土坑の一つ。範囲は明瞭でない。深さは約50cmである。

出土遺物（図23－212～215）

甕（212～215）

212～214は口縁部の小片。如意形のもの（212）と、未発達なＴ字形のもの（213・214）である。215は底部で、底径8.0cm（復元）。

ＳＫ147

ＳＫ146と同様に調査区南西隅の土坑群を切って広がる大型の土坑である。底面は凹凸が激しく、また丸味のある底面の箇所がいくつもあり、多数の小土坑がほぼ同時期に掘られたため、結果的に大きな不整形の遺構になったと考えられる。

出土遺物（図23－216～225、図26－249、図27－250・252）

壺（216～218）

216は未発達な鋤先形口縁のもので、口径は14.0cm(復元)。217は広口壺の口縁部の小片。内外面ともに丹塗りである。218は無頸壺の小片。外面は丹塗りである。

蓋（219）

甕の蓋となるものだが、大部分を欠失している。

甕（220～225）

220～223は逆Ｌ字形、未発達なＴ字形口縁の甕の小片である。224・225は平底の底部で、底径はともに8.0cm（復元）である。

石器

石庖丁（249）

立岩産の石庖丁の折損品で、残存長7.4cmである。

石斧（250）

太形蛤刃石斧であるが、頂部、刃部側とも欠損し、状態は悪い。残存長10.1cm、幅7.0cmである。

石剣（252）

小型の磨製石剣である。鎬を有するが風化が進み、片面は剥離している。残存長2.7cm、幅2.6cmである。

包含層

出土遺物（図24、図27－254）

Ｃ地点の包含層からも多量の遺物を採集した。Ａ地点のものに比べると時期が下るもの（弥生後期）も含まれているのが特徴である。土師器も少量ながら含むが、須恵器が出現する時期以降のものは含まれていない。

壺（226～232）

226～228は上面に粘土帯を貼りつける壺の口縁部である。226・227の端部には刻みを入れる。228の上面の平坦部にはヘラ描き紋を入れる。227は内外面ともに丹塗りである。229は無頸壺の口縁部の小片である。230・231は二重口縁の壺で、ともに口縁外面の屈曲部には明瞭な稜線が入る。230には頸部と肩部との境に１条の凸帯を巡らす。口径は18.8cm（復元）である。232は底部。

甕（233～240）

弥生中期のもの（233～235）と同後期のもの（236～240）とに明確に区分できる。233は未発達な逆Ｌ字形口縁に凸帯を１条巡らすもので、口径25.6cm（復元）である。234・235は「く」の字形口縁に移行しつつある段階のもので、口径は234が28.0cm（復元）、235が30.4cm（復元）である。236～239は、「く」字形になった口縁部に長い胴部が続くものである。底部は239のように丸くなる。口径は236が15.0cm（復元）と小型、237・238がともに19.0cm（復元）と大型である。240は230のような二重口縁の壺の底部になるかもしれない。

鉢（241）

両側に把手をつける小型の鉢であるが、把手は２つとも欠失している。口径11.8cm(復元)、器高8.8cm。一応230以降の土器と並行する時期の弥生土器としてくくったが、土師器の範疇に入れるべきかもしれない。

石製品

砥石（254）

あらゆる面（計７面）を砥石として利用している。特にその２面には、幅２～３㎜、深さ２㎜の溝状の擦り痕が明瞭に残っている。

櫛描紋のある土器（図25－242・243）

ＳＫ18と遺物包含層から２点出土している。残念ながら小破片で全容を知り得ない。242は包含層から出土した。波状紋の始点の部分の小片である。天地、器種、傾きは不明確である。243はＳＫ18から出土したもので、直線紋と波状紋が施される。天地は不分明だが、直線紋の方を上にして図示した。器種は壺であろうと思われるが確かではない。傾きも同様である。福岡平野域の土器には本来ないものだが、胎土を肉眼で見る限り、他の土器に比べて赤みが弱いという程度の差である。施紋の状態は稚拙で、繊細さに欠ける。九州大学の西健一郎氏のご教示によれば、筑後南部から肥後北部の土器ではなかろうかということである。

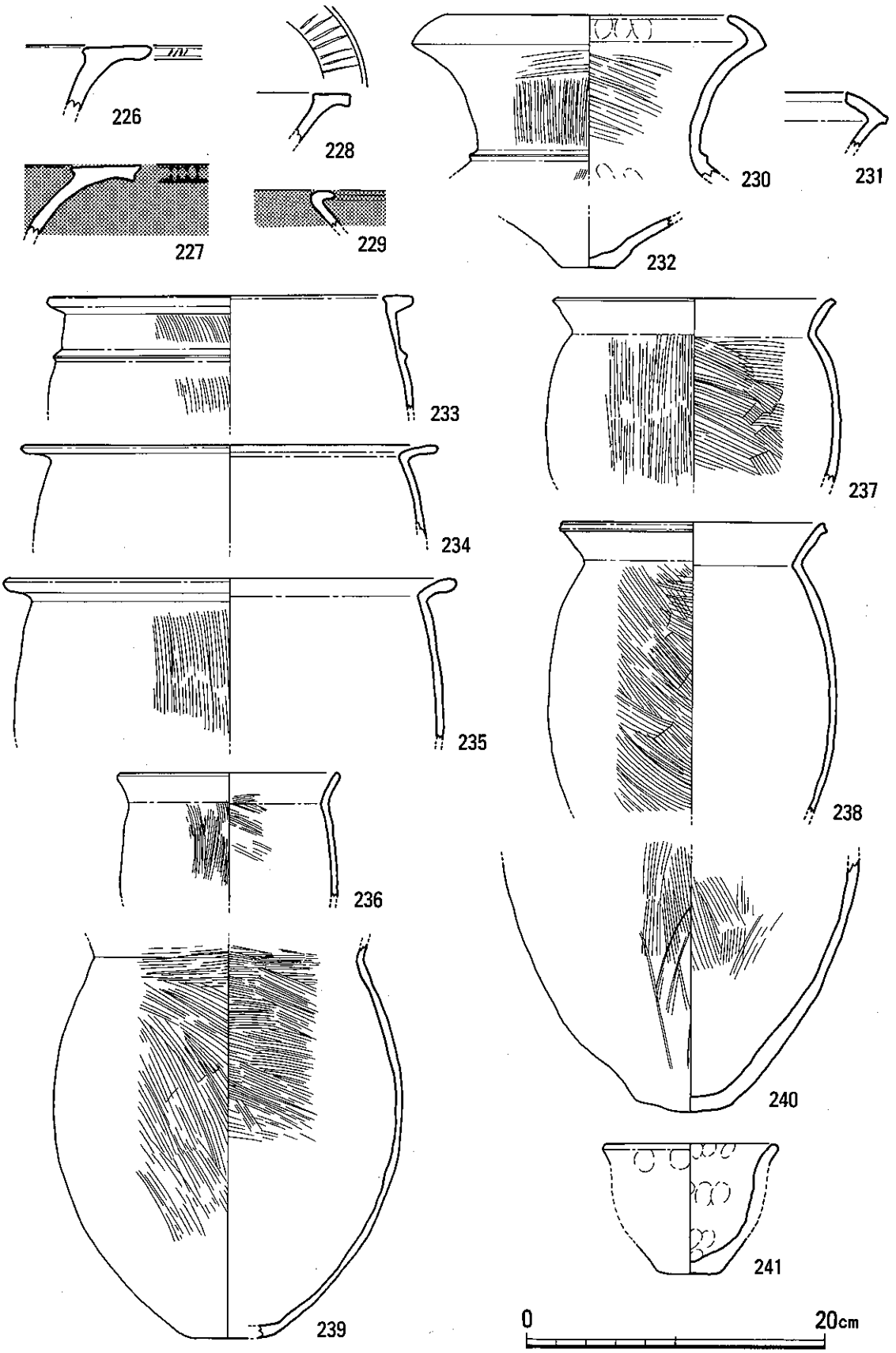


図24　C地点包含層出土土器実測図（1/4）

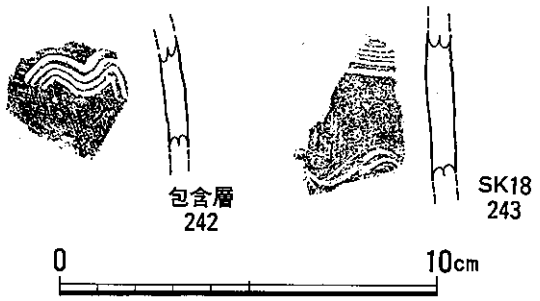


図25　C地点出土櫛描紋土器実測図（1/2）

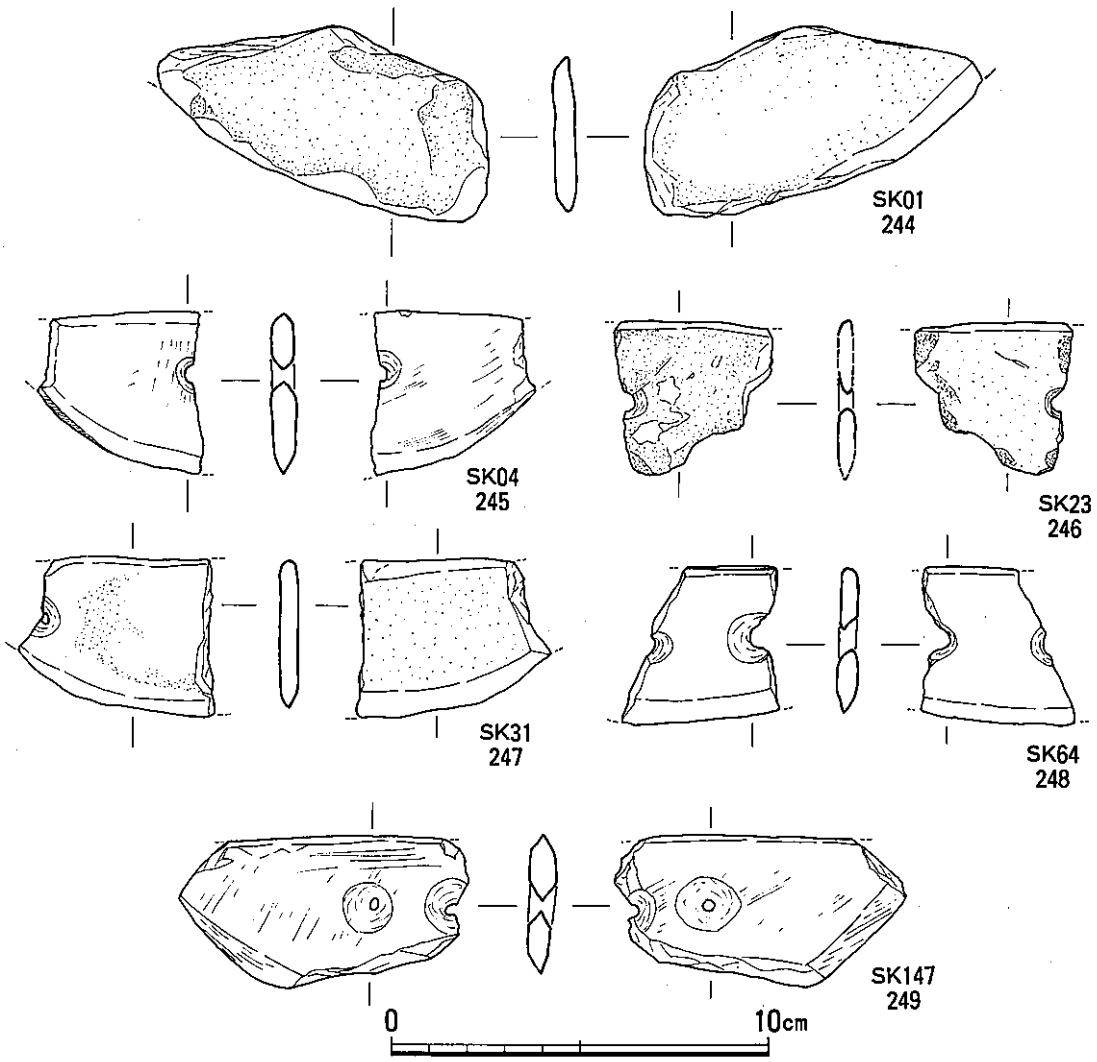


図26　C地点出土石器実測図①（1/2）

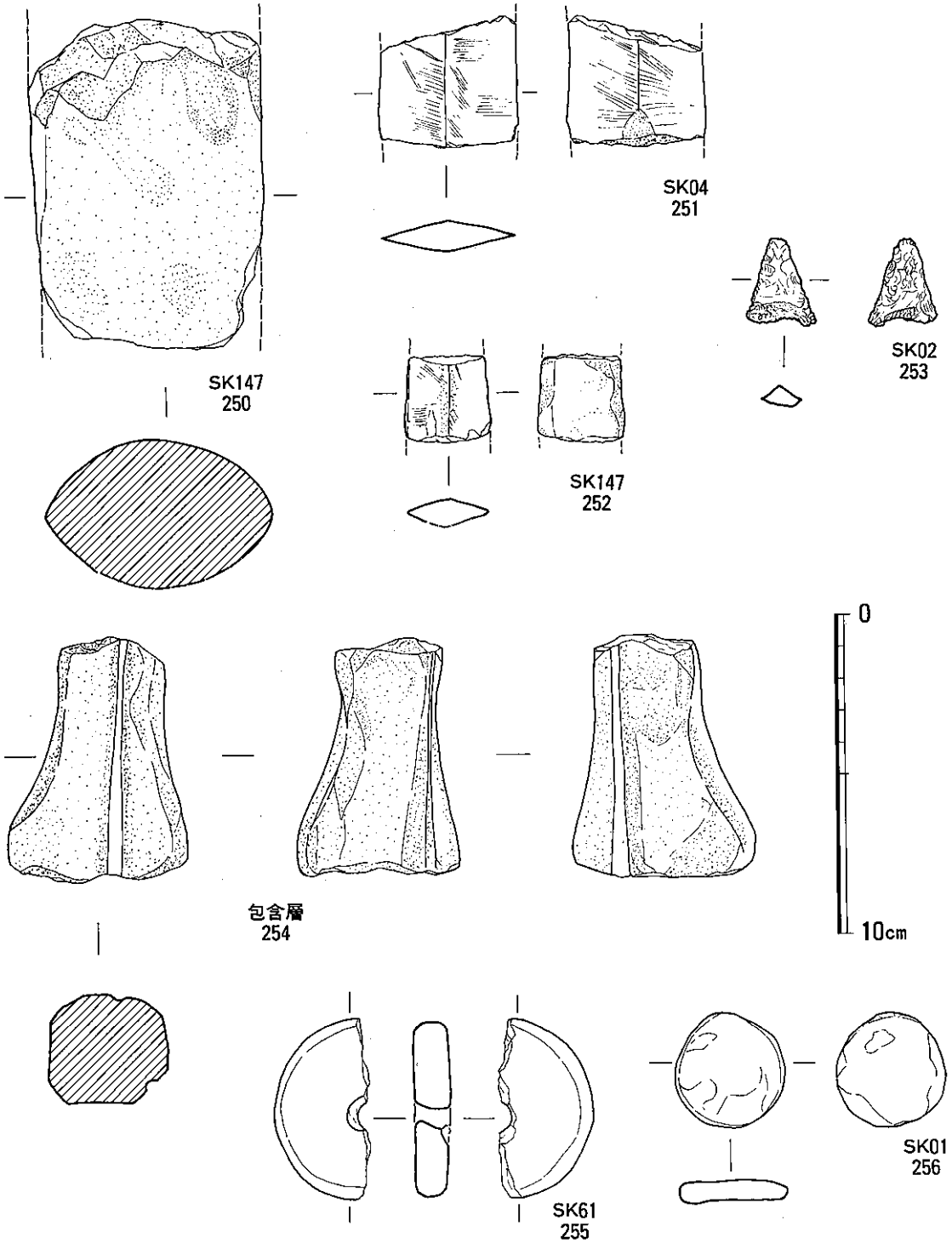


図27　C地点出土石器実測図②、石製品・土製品実測図（1/2）

4　E地点の調査

(1)　概要

大野城市瓦田1064－5に当たる。調査期間は1990年8月25日から同年9月10日までである。個人住宅の建築に伴う調査で、住宅の基礎によって破壊される部分のみを調査範囲に限定したため、面積は約60㎡と狭い。A地点とは道路1本を隔てて東側へ約15mしか離れていない。位置的にA・C地点に近いため、遺物包含層、遺構の状況も同じである。

遺構面は黒色土で、原地表から約70cm掘り下げると現れた。その直上に厚さ約30cmの遺物包含層の堆積が見られた。検出した遺構は、土坑（ピット）群（SK）、溝（SD）、性格不明の遺構（SX）である。

(2)　各遺構出土の遺物

A・B・C地点同様、土器は弥生土器ばかりであったため、土器の器種の前には改めてそのことを表記していない。計測値の後ろに「(復元)」とあるのは、図上復元であることを表す。

SK11

径約1.2m×75cm、深さ約65cmの2段掘りの土坑。

出土遺物（図29－257・258）

甕

257は未発達な逆L字形口縁の甕である。口径は34.2cm（復元）。外面には煤が付着している。258は底径7.4cm（復元）の底部である。

SK16

径約30cm、深さ約30cmの円形ピット。

出土遺物（図29－259）

壺（259）

底径6.6cmの底部である。

SK27

SK25の掘り下げを進める途中で見つかった径約40cm×30cm、深さ約30cmの土坑である。

出土遺物（図29－260・261、図32－295）

甕（260・261）

ともに未発達な逆L字形の甕の小片である。261は端部に刻みを入れる。

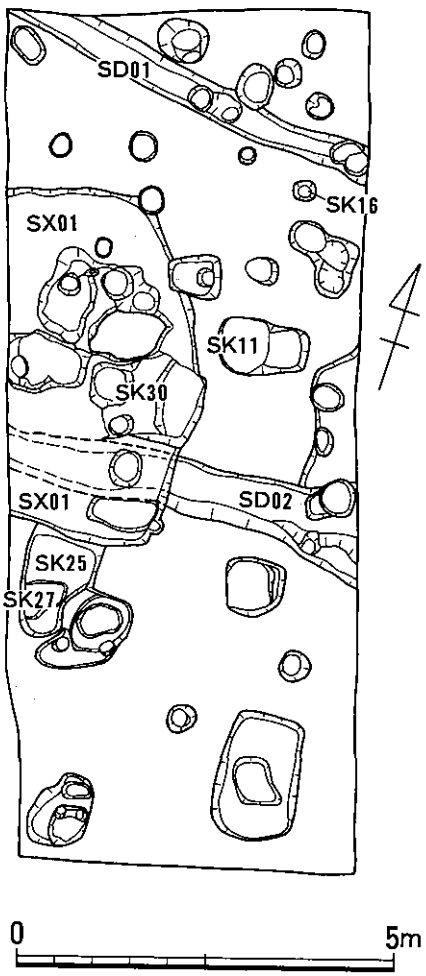


図28　E地点検出遺構図（1/100）

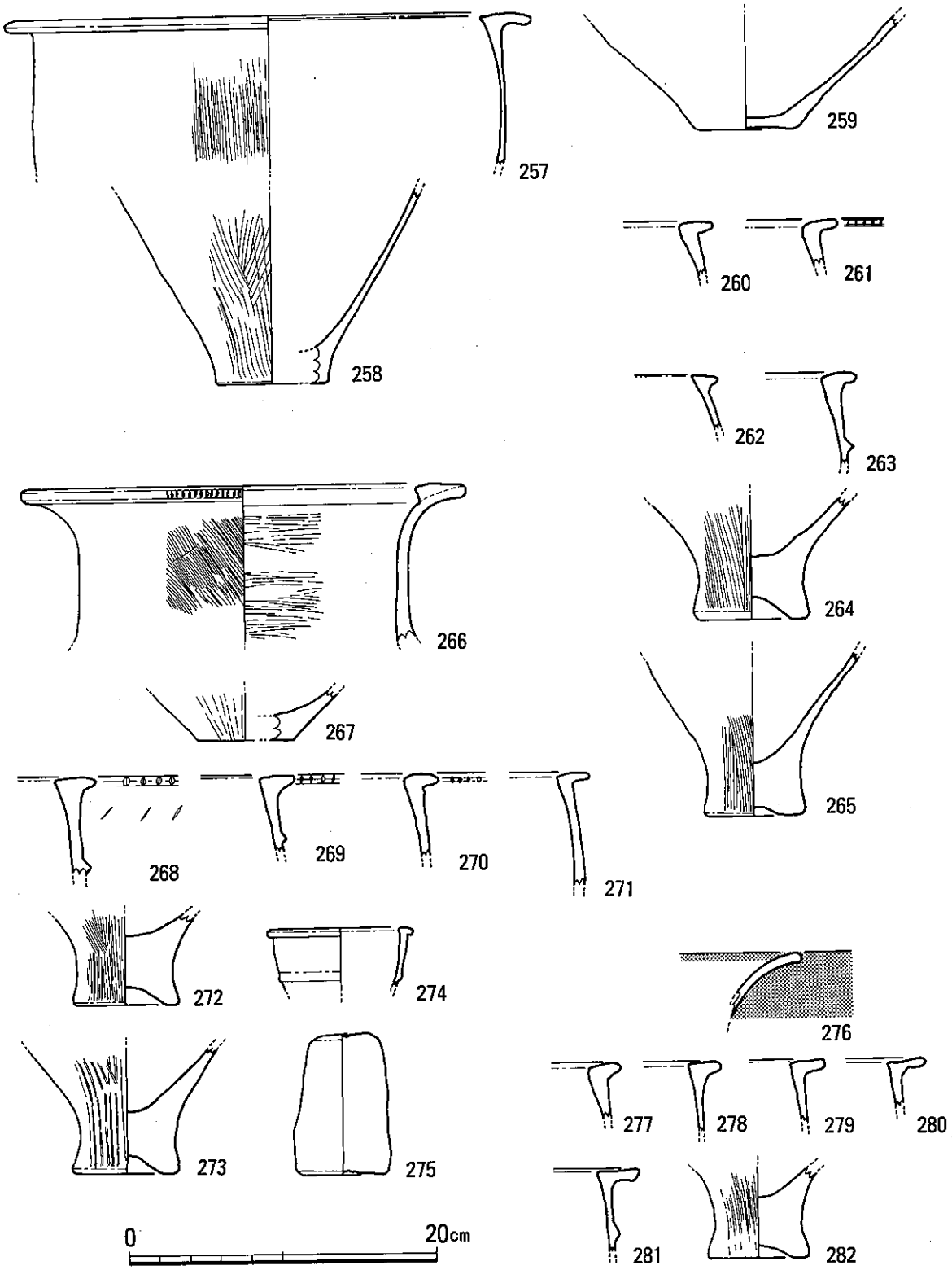


図29　E地点SK11(257・258)・SK16(259)・SK27(268・261)・SK30(262～265)・SD02(266～275)・SX01(276～282)出土土器実測図（1/4）

石製品

砥石（295）

折損品である。３面を砥石として利用しているが、うち１面には幅約1.2cm、深さ約１cmの深い擦り込みの痕が残っている。

ＳＫ30

ＳＸ01の内部で検出した1.4ｍ×1.1ｍ、深さ約40cmの不整形土坑で、３つの小土坑からなる。

出土遺物（図29－262～265）

甕（262～265）

262・263は口縁部の小片である。263は１条の凸帯を巡らす。264・265は底の厚い上げ底の底部で、底径は264が7.6cm、265が6.8cmである。口縁部、底部とも型式的に対応する。

ＳＸ01

調査区西側へさらに広がっているため、全容はよくわからない性格不明の大きな遺構である。溝ＳＤ02を切る。遺構検出時には隅の丸い方形の住居跡と考えていたが、柱穴に当たるピットもなく、1.05ｍ×65cmの不整形の島状の高まりを残す遺構となったため、結果的には竪穴住居跡とするには至らなかった。大きさは検出部分で約4.6ｍ×2.5ｍ、深さ10cmである。内部には最も深い場所で約60cmの不整形土坑がある。

出土遺物（図29－276～282、図32－294）

壺（276）

広口壺の口縁部小片で、内外面と

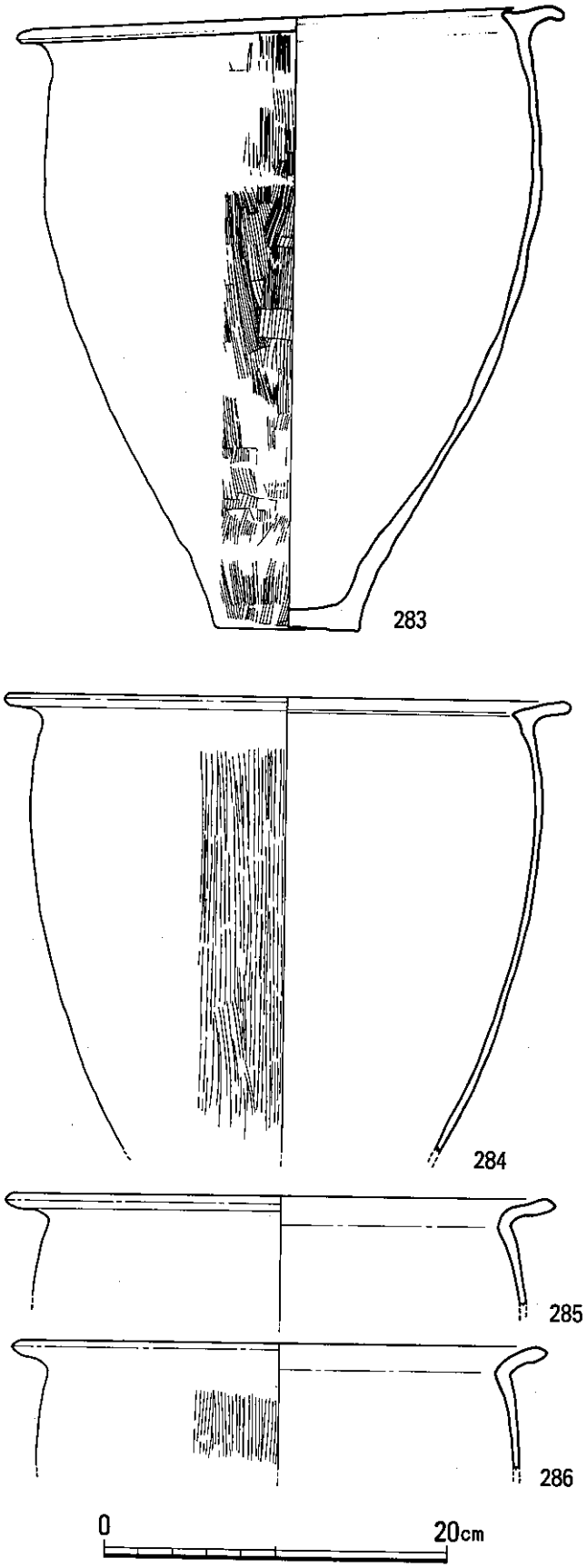


図30　E地点SD01出土土器(283)、包含層出土土器実測図①(284～286)（1/4）

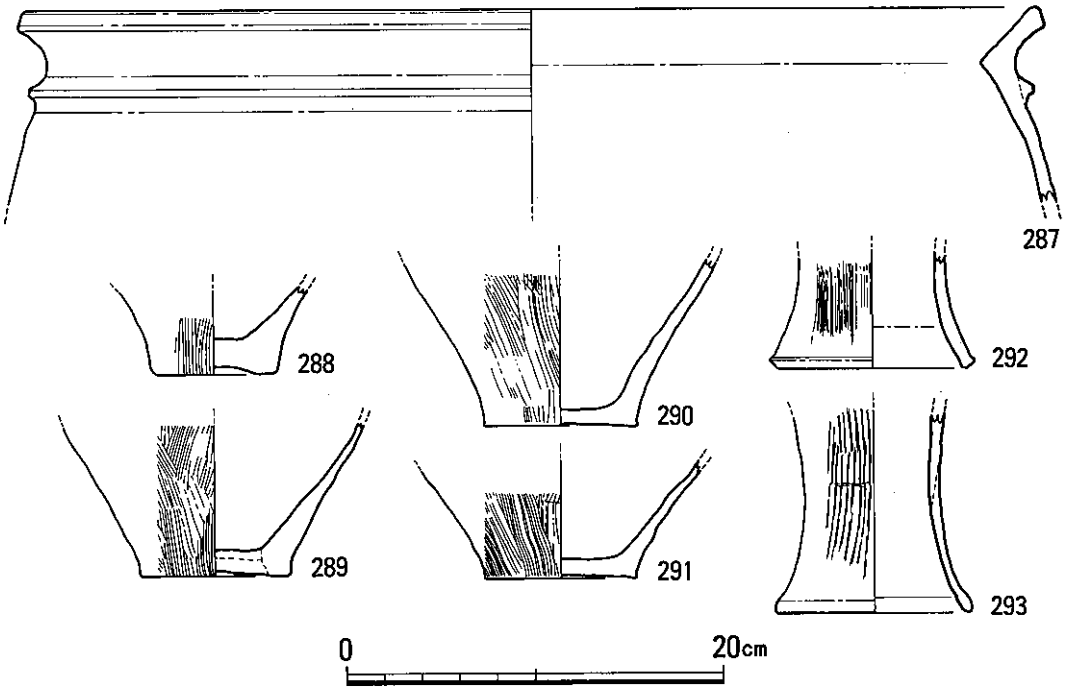


図31　E地点包含層出土土器実測図②（1/4）

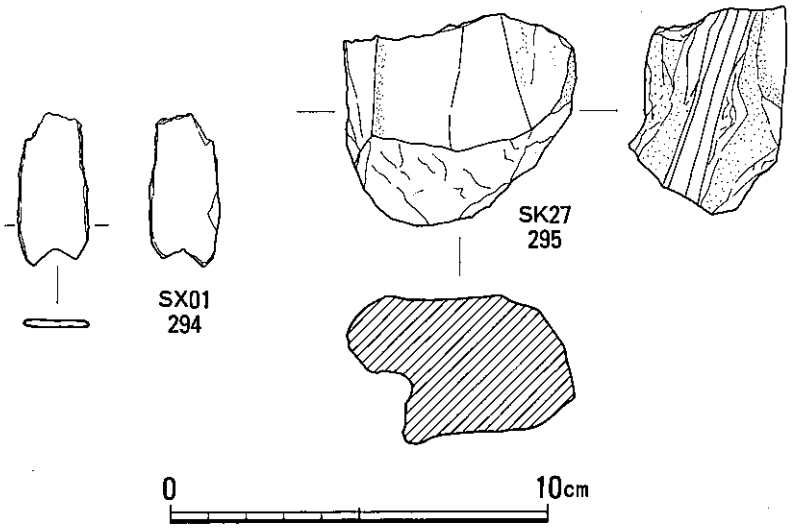


図32　E地点出土石器・石製品実測図（1/2）

もに丹塗りする。

甕（277～282）

未発達な逆L字形の口縁部（277～279）と、逆L字形の口縁部の小片（280・281）である。282は底径6.6cm（復元）の底部で、上記277～279の口縁部に対応する。

石器

石鏃（294）

蛇紋岩質の石材で作られた磨製石鏃である。先端を欠き、残存長4.0cm、幅1.8cm。扁平で、厚さはわずかに2mm。浅い抉りを作る。実用品ではないと思われる。重量は2.2gである。

SD01

幅約35cm～50cm、深さ約15cmの溝で、ほぼ東西に走る。

出土遺物（図30－283）

甕（283）

口縁部の一部を除いてほぼ完形の甕である。口径31.8cm、器高36.8cm、底径8.3cmである。

ＳＤ02

溝ＳＤ01と約５ｍの間隔をあけ、東西方向に走る溝。ＳＸ01に切られる。幅約70cm、深さ約20cm。位置的に考えて、Ａ地点で検出した溝ＳＤ01と連続する同一の溝である。

出土遺物（図29－266～275）

壺（266・267）

266は口縁部上面に粘土帯を貼りつけ、端部に刻みを入れるもの。口径は29.0cm（復元）である。267は底部で、底径6.2cm（復元）。

甕（268～273）

268～270は未発達な逆Ｌ字形口縁の端部に刻みを入れるもの。268・269には１条の凸帯が巡る。268は口縁直下外面にヘラ描きの斜線紋を入れている。271は逆Ｌ字形の口縁の小片である。272・273は底厚で上げ底の底部で、上記口縁部と対応するもの。底径はともに7.0cmである。

鉢（274）

小型の鉢で、底部を欠く。口縁部外面を丸く収め、胴部中位に小さな凸帯を１条巡らす。口径は9.6cm（復元）である。

支脚（275）

器高9.2cm、底径6.0cmの台形の支脚である。

包含層

出土遺物（図30－284～293）

甕（284～291）

284は底部を欠く。逆Ｌ字形の口縁部はやや内傾する。口径は33.0cm（復元）である。285・286は逆Ｌ字形の口縁部が「く」の字形に移行する段階のものである。口径は285が32.0cm（復元）、286が31.2cm（復元）である。287は「く」の字形になった口縁部の直下に１条の凸帯をつける。口径84.0cm（復元）と大型である。288～291は平底の底部である。底径は288が6.2cm、289が8.0cm（復元）、290が8.4cm（復元）、291が8.1cmである。

器台（292・293）

ともに天地の別は明確でない。実測図どおりとすると、脚径は292が11.0cm（復元）、293が10.5cmである。

5　Ｉ地点の調査

(1)　調査概要

Ｉ地点は大野城市生涯学習施設「まどかぴあ」の立体駐車場の建設に先立って発掘調査が行われた。道を挟んで北東側のＧ地点にあたる「まどかぴあ」の発掘調査では、弥生時代中期の住居跡や土坑などが検出され、弥生時代中期の集落跡と考えられている。この事から、Ｉ地点もＧ地点に続く弥生時代の遺跡と考え調査に入った。

調査は排土を持ち出すことが出来なかったため、３回に分けて実施した。表土剥ぎには重機を用い、現地表下約１ｍで遺構面となった。調査は北西側から行ったが、まず風倒木が多く見られた。ピットは南東側に多く分布しているが、住居跡などは検出できなかった。調査区の中央に２本の撹乱溝が走り、南東側ではこの溝に直行するように畑の畝と思われる撹乱が見つかった。

検出された遺構には縄文時代晩期の溝１条・弥生時代中期の甕棺墓１基・土坑１基・多数のピットがある。また風倒木は20例を発掘したが遺物を出土したものは１基のみで、時代を特定できない。出土遺物は非常に少なく整理箱３箱分しかない。その中でも弥生土器が大半を占める。その他の遺物には、縄文土器・須恵器・陶器・石器がある。

Ｉ地点は石勺遺跡の集落跡の中でもはずれに当たる地域で、甕棺墓を出土したＨ地点との関係から、集落と墓地との境界にあたる位置と考えられる。

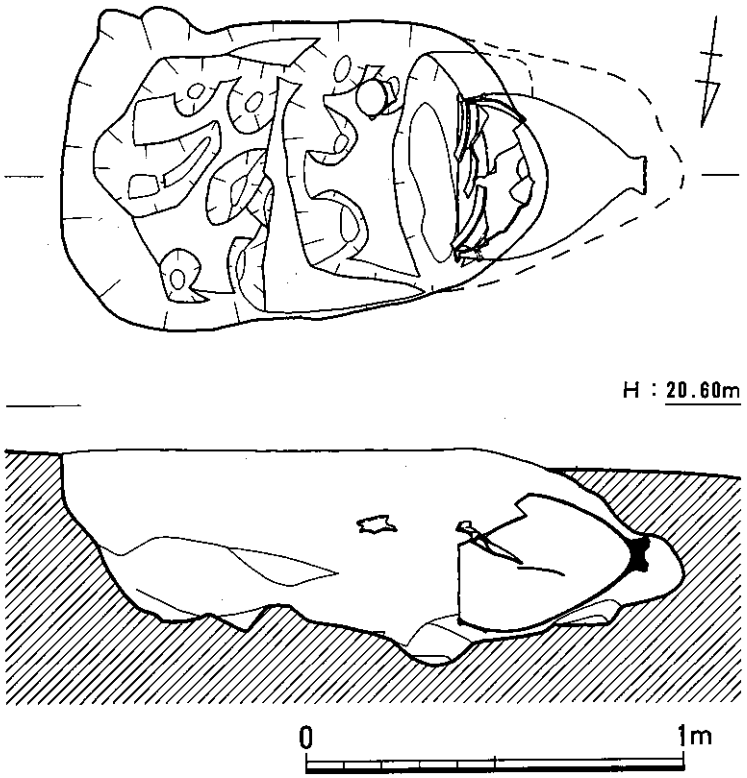


図33　Ｉ地点SJ01実測図（1/20）

(2)　遺構と遺物

①甕棺墓

ＳＪ01（図33、図版25～26）

調査区の南東隅で検出した甕棺墓である。墓坑は長1.29ｍ×幅0.8ｍの不整円形を呈し、確認面からの深さ41cmで奥へ38cm掘り込む。棺は単棺で口縁部の直下に幅20cm×深６cm程の窪みがあることから木蓋を用いていたと考えられる。また、墓坑は２段からなり、それぞれに工具跡が見られる。１段目は深さ45cmで西方向からの掘り込みが４箇所、２段目は深さ50cmで東方向からの掘り込みが３箇所程確認できた。また同様の

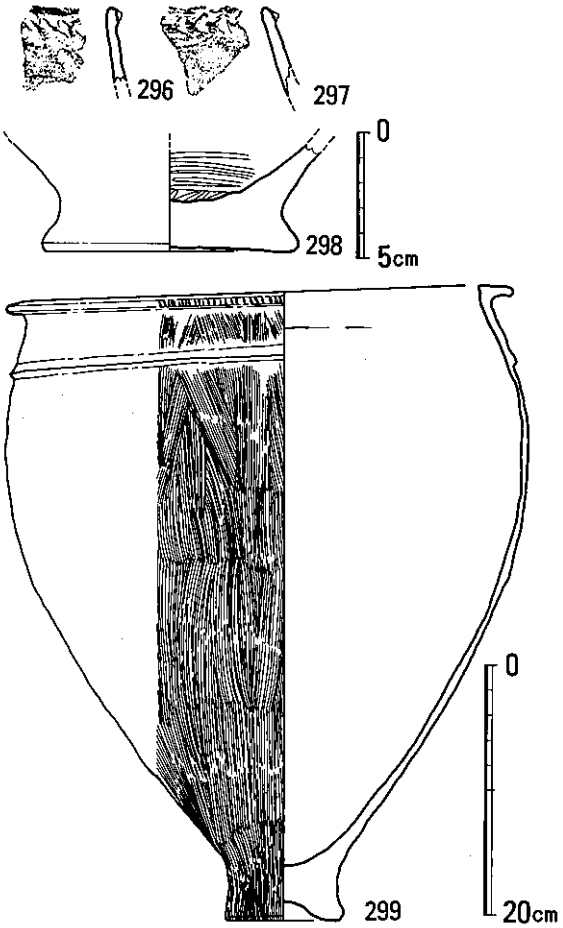


図34　Ⅰ地点SJ01出土土器実測図
（296～298は1/3、299は1/6）

痕跡が壁面にも見られた。主軸方向はN－82°－E、埋置角度は2°。

出土遺物（図34、図版28）

甕棺の他に縄文土器数点が出土したが、小破片が多く図示できるものは少ない。

縄文土器（296～298）

296・297は刻目凸帯を巡らせる深鉢である。296は口縁端部に付すが、297はやや下がった位置にくる。298は底部である。底径10.2cmの胴部より張り出した平底で、内面は粗いミガキを一面に施す。

棺（299）

わずかに外側に低く傾斜する逆L字状の口縁を呈し、口縁外側に刻目を施す。口縁下には1条の三角凸帯を付す。胴部最大径はやや上位にあり、底部は細くしまり、やや上げ底を呈する。口径40.5cm、底径9.5cm、器高50.3cm、胴部最大径41.8cmである。調整は外面ハケ、内面ナデである。口縁部が一部欠損している他は完形となること、甕棺の形状や胴部に炭が付着していることから日常容器の転用と考えられる。

②溝

ＳＤ01（図35、図版27）

調査区南東隅を南北に走る溝である。幅45～70cm、深さは北側で約14cm、南側で24cmとなる。埋土は上層はしまりのない黒色土、下層は黒色土に黄褐色の粘土粒子を含み、レンズ状に堆積している。しかし、A－A'の土層図では黒色土の堆積が不自然なことから北側は削平されていると考えられる。また、遺物は上層から縄文土器・弥生土器・石器が出土している。

出土遺物（図37、図版28）

遺物は小破片が多く図示できるものが少ない。

縄文土器（300～303）

300・301は胴部上半が「く」字形に屈曲する鉢で、内外面共にミガキを施す。301は口縁端部を丸く肥厚させる。色調は300が褐色、301がにぶい橙色を呈する。302は胴部より張り出す底部で、内外面ともナデ調整、色調は橙色を呈する。303は口縁部下方と胴部との屈曲部に刻目凸帯を貼付する甕である。口縁は直線的に立ち上がり、端部で緩く外湾する。凸帯は細く刻目は浅い。内外面とも粗いミガキが施され、色調は褐色、外面に煤が付着している。底部は欠損しているがおそらく302のような底部になると思われる。復元口径27.3cm、胴部の凸帯で最大径の28.5cmを計る。

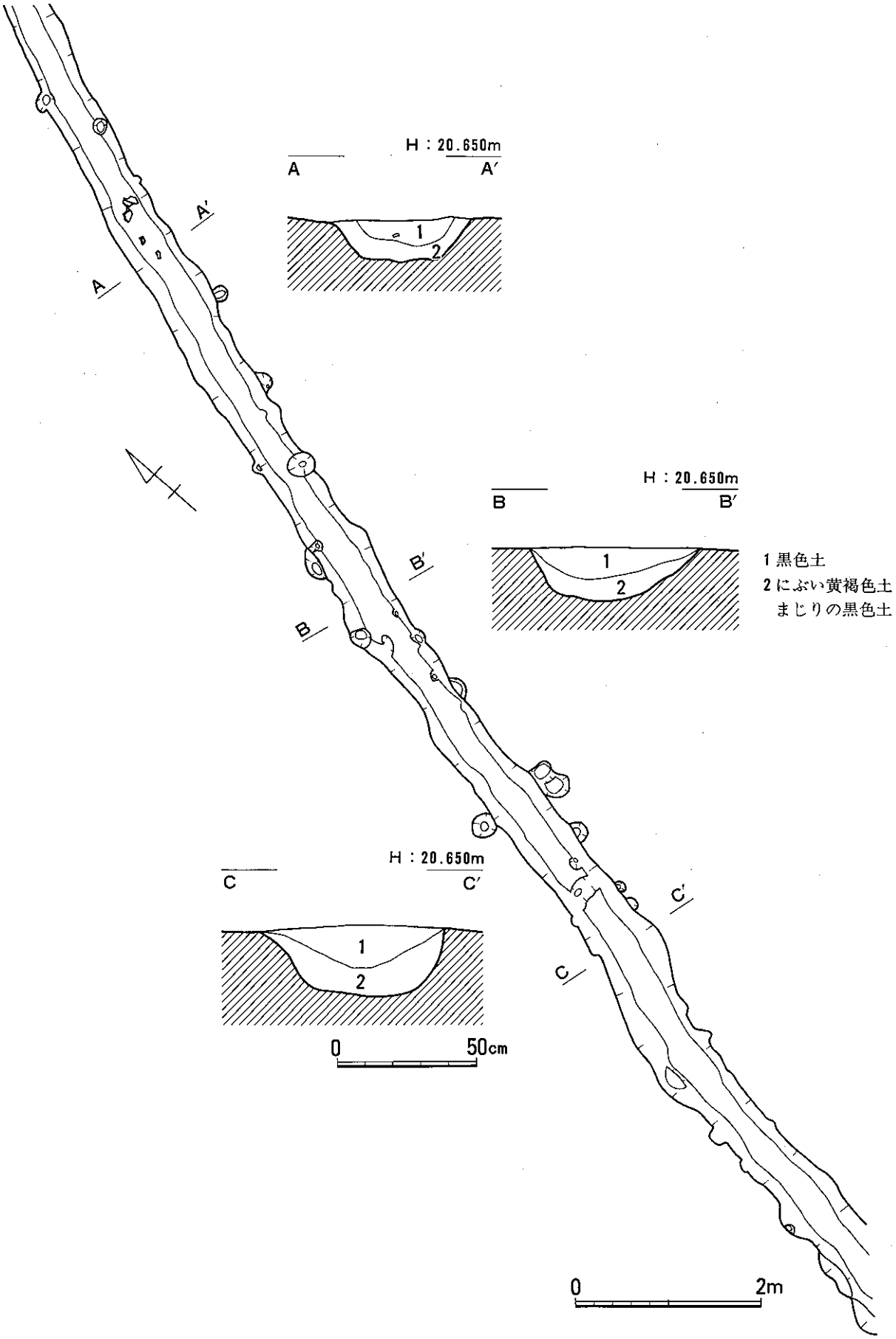


図35　Ⅰ地点SD01実測図（1/60）・土層実測図（1/20）

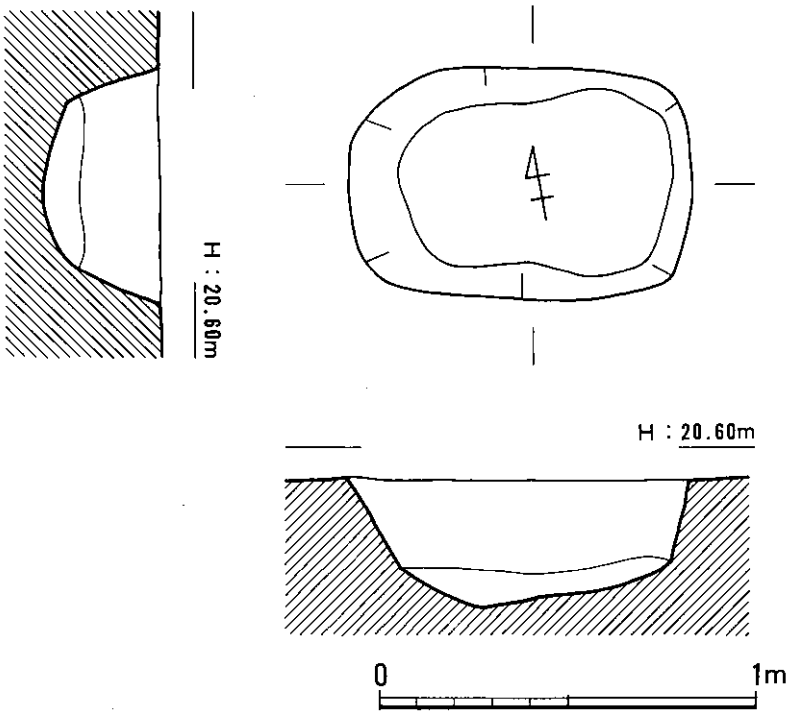


図36　Ⅰ地点SK01実測図（1/20）

③土坑

ＳＫ01（図36）

ＳＪ01の北側約2.5ｍの所に位置し、長90cm×幅63cmの隅丸方形を呈し、深さは確認面から最も深い所で32cmである。主軸方向はＮ－80°－Ｗにとる。

出土遺物（図37、図版28）

縄文土器（305・306）

305は断面三角形に張り出した甕の底部である。復元底径9.0cmで内外面ともにナデ調整、色調は褐色を呈する。306は刻目凸帯を口縁よりやや下方に貼り付けた甕である。外面には凸帯直下から粗いミガキが入る。色調は橙色を呈する。

遺構出土土器（図37、図版28）

304はピットから出土した壺の口縁部である。頸部から口縁部にかけて肥厚し、口縁端部でやや細くなる。復元口径13.2cmで明黄褐色を呈し、調整は磨滅が著しく不明である。頸部内面は赤色顔料が塗布されている。307は風倒木から出土した甕の口縁部である。口縁端部から緩やかに刻目凸帯を貼付する。内外面ともナデ調整、色調は褐灰色を呈する。

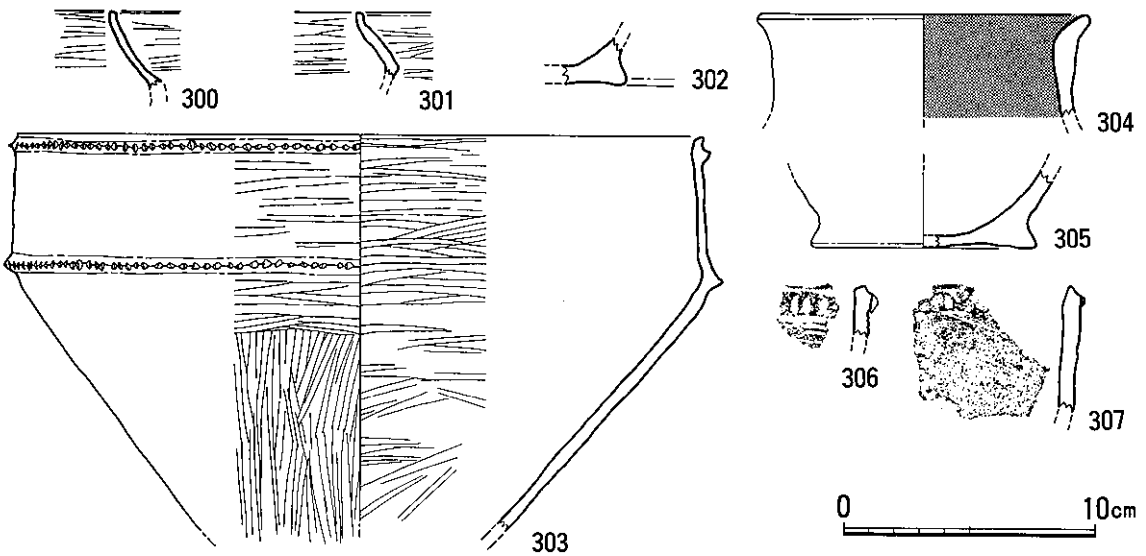


図37　Ⅰ地点遺構出土土器実測図（1/3）

遺構出土石器（図38、図版29）

308はピットから出土した石核である。長さ7.0cm、幅4.5cm、厚み3.0cm、重さ55ｇを計る。石材は流紋岩で、あらゆる方向から打ち欠いてある。309もピット出土である。黒曜石製の石鏃で、長さ2.1cm、幅1.25cm、厚み0.2cm、重さ0.625ｇである。先端部は意図的に打ち欠いてある。

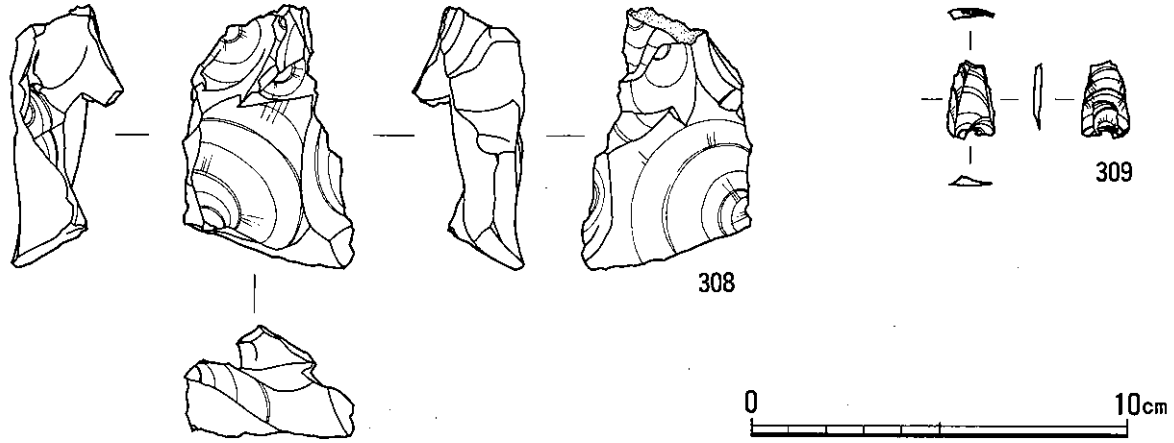


図38　Ⅰ地点遺構出土石器実測図（1/2）

遺構外出土遺物（図39、図版29）

撹乱から出土した土器である。この他に弥生土器・土師器や黒曜石などがあるが、いずれも小破片のため実測は不可能である。

310～313は須恵器である。310は杯蓋で外面にヘラ削りが施される。311は天井部につまみのような突起のついた土器である。突起の端部はやや磨滅しているものの稜をなしていたと思われ、その下端からカキメ、内面はナデ調整をする。器種は不明である。312は甕の胴部片で、外面格子目タタキ、内面同心円の当て具痕を残す。313は復元底径が13.1cmの底部である。底面はナデ調整、胴部との境は稜をなす。器種は不明。314・315はすり鉢である。316～318は陶器である。316はかえりの付いた蓋で復元口径9.2cm、オリーブ色の釉がかかる。317は復元口径8.3cm、底径4.1cm、器高2.3cmの皿で、底面は回転糸切り、暗褐色の釉がかかる。318は復元高台径7.2cmの椀で内面は中心部で釉はぎ、外面は高台までケズリが施される。釉はオリーブ色を呈する。319は土錘で、孔径6㎜、上下とも欠損している。色調は赤褐色。

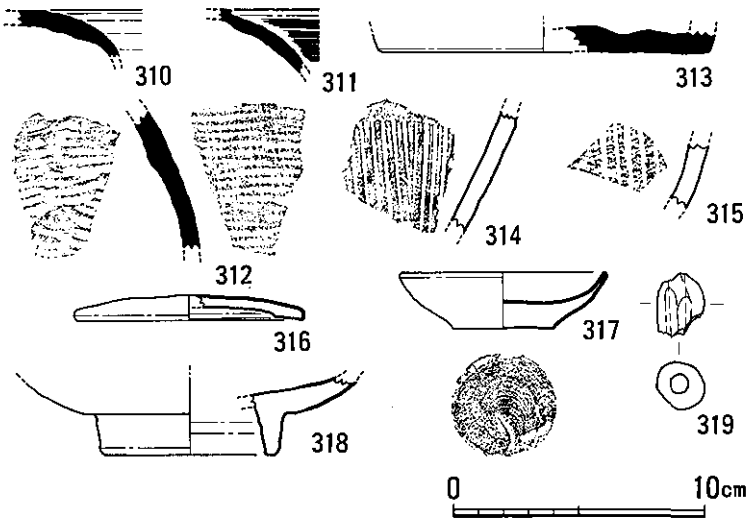


図39　Ⅰ地点遺構外出土遺物実測図（1/3）

Ⅳ　まとめ

近接したA・B・C・E地点はひとくくりとし、これから約200m離れたⅠ地点と分けてまとめとしたい。

1　A・B・C・E地点

検出した遺構はすべて弥生時代中期のものであった。もっと限定すれば、中期前葉の段階から中葉までということができる。

遺構の主なものは、大小の土坑（ピット）であるが、おびただしい数であった。特にA地点のそれは並のものではなかったが、問題は具体的にどういう性格を持つ遺構であるかということである。これだけの数の土坑（ピット）が単なる土器を廃棄したものとは考えられず、特にA地点の東隅部分の土坑は直径（70cm前後）、深さ（50cm以上）などから見ても、壁を消失した竪穴住居の柱穴と考えるのが妥当であろう。調査中から、その並び方を注意して観察したが、円形、あるいは方形の住居の柱穴群となるだけの配列を見極めることができなかった。時期幅はそれほどあるわけではないので、住居跡とすればかなりの数の住居が建っていたことにもなろうし、切り合いもかなり複雑なものであったと想定される。竪穴住居にこだわらず高床式の建物の可能性もあるが、プランを確認することができなかったことには、今も忸怩たるものがある。

いずれにせよ、集落跡であることは確実である。大型の土坑では土器を意図的に廃棄した状況のものもかなりあり、これは集落内のいわば、ごみ捨てと考えられよう。A・E地点で確認した溝は、直線的で人工的に掘られたものであろうが、幅、深さから見ても環濠集落の溝とまでは考えない方がよいであろう。『石勺遺跡II』で報告している弥生時代の溝と連続している可能性がある。

出土した土器は、時期的に2つに区分できる。甕を例にとれば、口縁部は三角形あるいは未発達な逆L字形で、底部は器壁が厚く上げ底のものが古い一群である。口縁部は逆L字形で、底部は平底になったものが新しい一群である。古い一群は、中期前葉の段階（中期初頭と広くいわれているようであるが、その実態は筆者にとって定かでないのであえて使わない）であり、新しい段階は中期中葉のものである。中期中葉の新しい段階から後葉の土器はあまりなく、『石勺遺跡II』で報告されている「まどかぴあ」の箇所の集落よりも一段階古い集落と考えている。『石勺遺跡Ⅰ』（県の身障者授産指導所の調査）では弥生時代の墓地を報告しているが、その甕棺墓の時期は中期後葉のものであり、この地点の集落とは時期的には結びつかない。

C地点の項では遺跡の東縁（東端）を確認したことを述べたが、このすぐ東側を流れる牛頸川の氾濫によって遺跡が削り取られたためである。石勺遺跡はさらに東側まで展開していたわけであるが川を越えてまで広がっていたことを示す事実はなく、現在の川の場所くらいまでが本来の範囲と思われる。

A・C・E地点では遺構面の直上に厚さ30cm以上の遺物包含層が見られた。遺物（土器）は弥生

時代のものが大部分で、しかもほとんどが上記した遺構の時期と一致する。少量ながら、F地点(未報告）で確認した弥生後期後半の土器が含まれている。その流れのものであろう。包含層が形成された理由についてはいまだわからないままであるが、前述した牛頸川の氾濫に係わるものであろうか。

遺物の中には、磨製石剣や大型の磨製石鏃が見られた。土器の時期と同じで中期中葉が下限のものであろうが、使用して折損したのではないかと思わせるものもある。弥生時代の争いの跡を示す実例といわれる、甕棺の中で人骨とともに発見される石剣や石鏃と類するものではなかろうか。石勺遺跡の集落も、他の集落との抗争に明け暮れていたのであろう。農耕集落の象徴ともいえる多数の石庖丁の出土に牧歌的なものも感じるが、同時に集落内に折れた石剣や大型の石鏃も見られることに慄然とさせられる。

2　I地点

(1)　遺構の年代

I地点では多くのピットを検出したが住居跡などは確認できなかった。

甕棺墓（ＳＪ01）

ＳＪ01の甕棺は、逆L字状を呈する口縁部と口縁下に１条の三角凸帯を貼付し、胴部最大径がやや上位にあり、底部は細くしまり上げ底を呈することから、弥生時代中期前葉の古い段階に位置付けられる。これはH地点の墳墓群より古い時期に当たる。

今回の調査では１基のみの検出であったが、25m程南部に位置するH地点では38基の甕棺墓が調査されている。甕棺墓以外にも土壙墓・木棺墓・石棺墓が検出され、弥生時代中期後葉から後期にかけての墳墓群であった。また、この墳墓群は幅42～70cm、深さ約28cmの溝によって区画されており、この溝より北には墳墓が見られないと報告されている。しかし、今回調査したＳＪ01から未調査区はあるものの、弥生時代の墓域はH地点よりもさらに北西側に広がり、時期も遡ることが確認できた。中期前葉の甕棺墓に対応する集落がA・B・C・E地点周辺に営まれていたと考えられる。

土坑（ＳＫ01）

甕棺墓に隣接して、土坑が検出された。この土坑からは縄文時代晩期後半の土器が出土している。しかし、これらの土器は浮いた状態で出土しているため、埋土に混入していたものと思われる。そのため、この土坑の時期は晩期後半以後としか言えない。

また、この土坑は壁が外方に直線的に立ち上がり、しっかりした形態をしているので、ＳＪ01と同時期の土壙墓とも考えられる。しかし、遺物が少なく遺構の時期や性格は不明である。

溝（ＳＤ01）

今回の調査区であるI地点から出土した刻目凸帯文土器はG地点で検出されたＳＤ01でも出土している。これら両地区のＳＤ01はその位置関係から一連の溝になると確認できた。また、今回の調

査では内外面ともにミガキ調整が施された浅鉢も出土し、ＳＤ01の時期を考える上での資料の増加があった。遺物の特徴として、甕の口縁部凸帯の位置が口唇部より下方になり、刻目は凸帯下部にまで達していないこと、浅鉢の胴部上半の内折の度合いが弱いなどがあげられるが、これだけでは詳細な時期区分は難しい。しかし、如意状口縁を呈し、口縁端部に刻目を施す最古の弥生土器が１点も出土していないことから吉留編年の夜臼式期(小様式では２式)に当たると考えられる。[註1] また、ピットから出土した壺の頸部(図37、304)も内傾しながら立ち上がり、口縁部は短く外反するといった特徴がみられ、夜臼式期の２式に該当する。

石勺遺跡のＩ地点とＧ地点からは、弥生時代前期の遺物が出土していない。吉留編年では板付Ｉ式の甕のみが出現する時期を夜臼式小様式３式とするが両地点からは出土していない。Ｇ地点では如意状口縁に肥厚した底部をもつ甕が出土しているが、共伴の土器に口縁が直線的に立ち上がり、端部に断面三角形の凸帯を貼りつける甕があることから、吉留編年の前期末から中期初頭に比定される中でも、より中期に近い時期と考えられる。

風倒木

今回の調査では、風倒木痕20例が検出できた。この内の１基から縄文時代晩期後半の甕（図37、307)が出土した。このことからこの風倒木痕の上限は縄文時代晩期後半以降と考えられる。しかし、全ての風倒木痕が同時期に形成されたとは考えにくく、あくまでも縄文時代晩期後半の時期が与えられるのはこの遺物を出土した風倒木痕のみに留めたい。その他の痕からは遺物の出土はなかったため、これ以上は不明である。

(2) 風倒木の倒木方向について

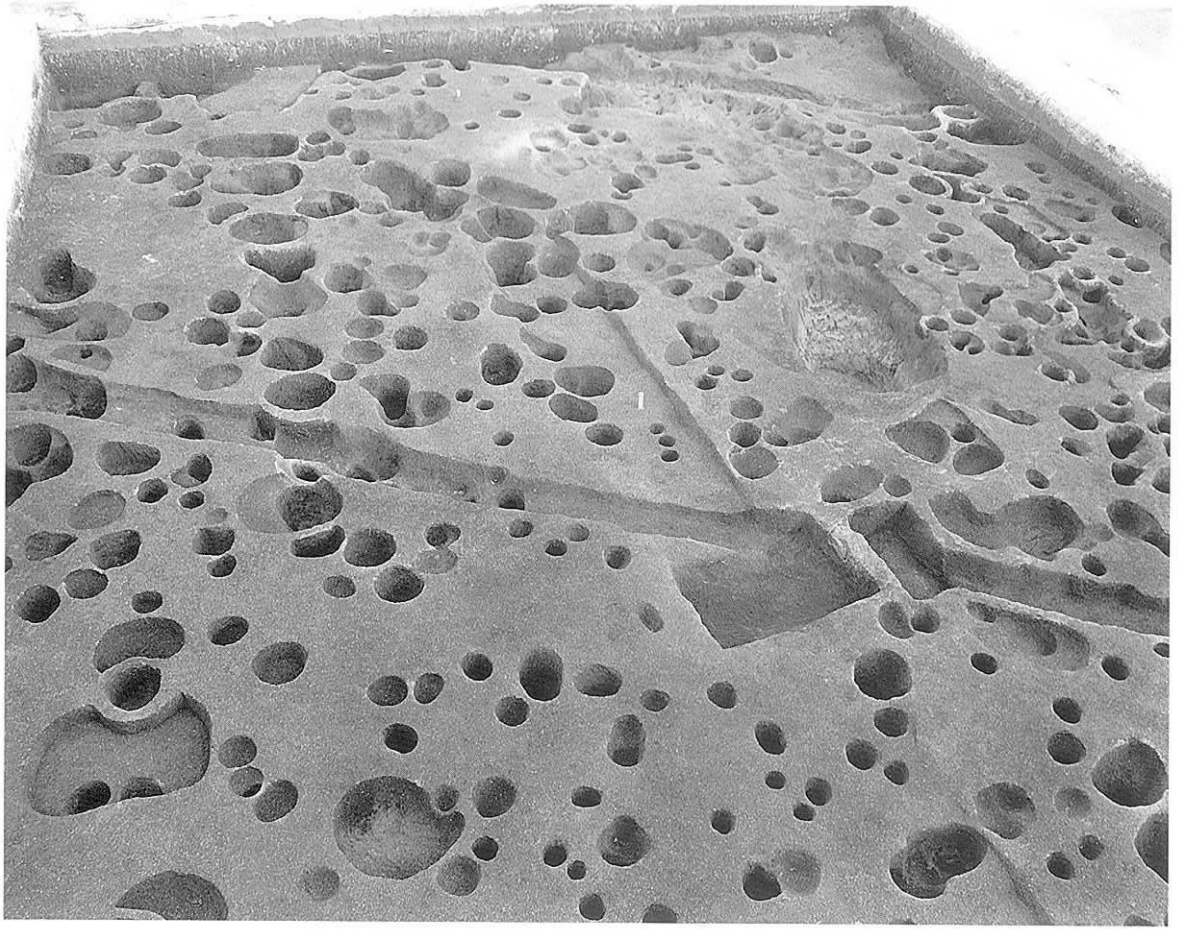
風倒木の倒木方向は検出面と断面の土層の検討によって推定できる。 このことをふまえて、今回の調査では一部の風倒木痕の平面実測と全ての断面実測を行った。遺構検出の段階で風倒木痕の平面土層の観察を行い倒木方向を推定し、倒木方向に沿ってその中央を通るようにベルトを残した。風倒木痕は、倒木時に木の根が土層を抱き込むことで基本層序の転位が起きると考えられており、今回の調査でも平面に基本層序が堆積順を保って現れていた。土層の断面観察により推定した倒木方向の確認を行った。この確認により平面土層を検討して推定した倒木方向と本来の倒木方向が合致するという結論に至った。

上記のような方法で検出した倒木方向を示したものが図40である。 風倒木の倒木方向と地形との関係から、その原因を台風などの強風などにもとめる説もあるが、今回の状況を検討してみると、平坦な立地とあらゆる方向に倒木していて、風倒木の原因の解明には至らなかった。

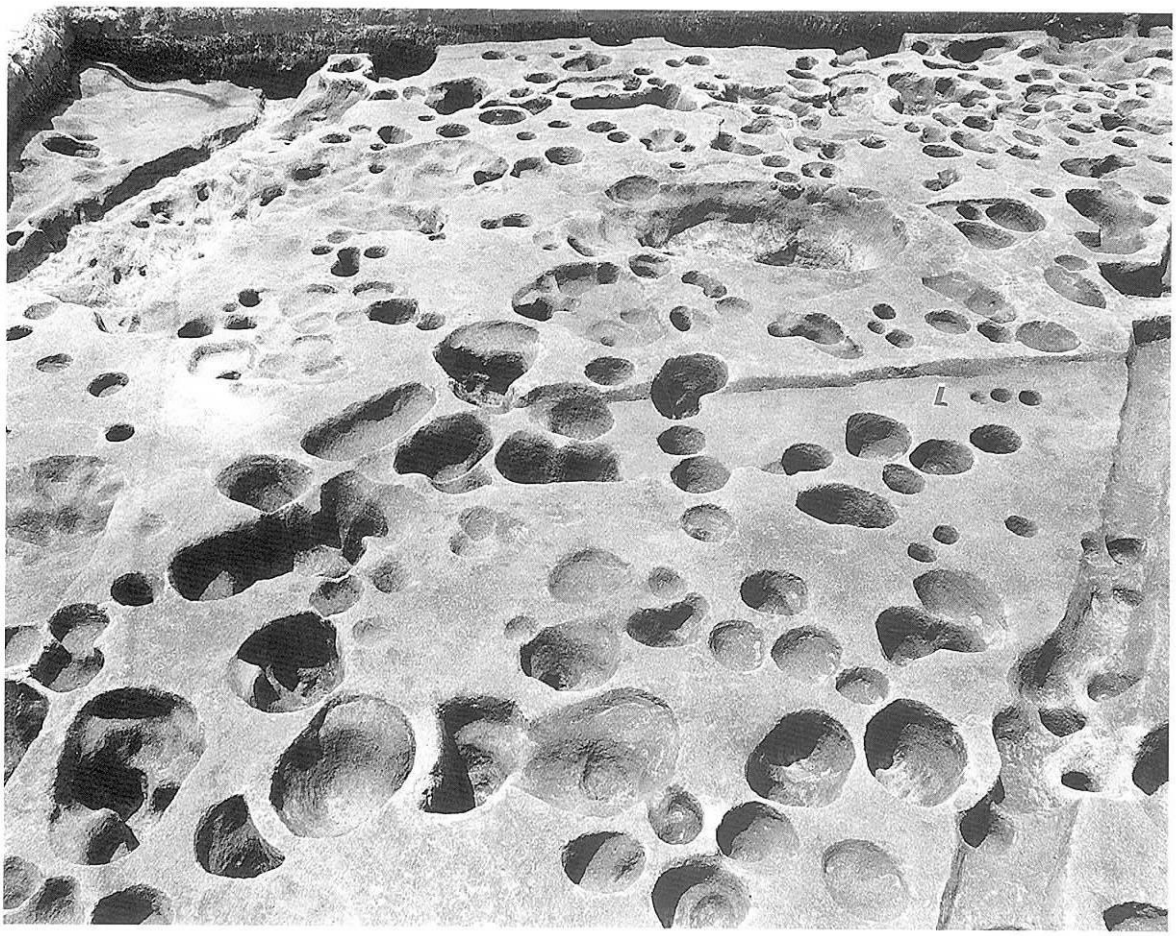
註１　吉留秀敏　「板付式土器成立期の土器編年」『古文化談叢』32　1994年

図40　Ⅰ地点風倒木痕の倒木方向（1/300）

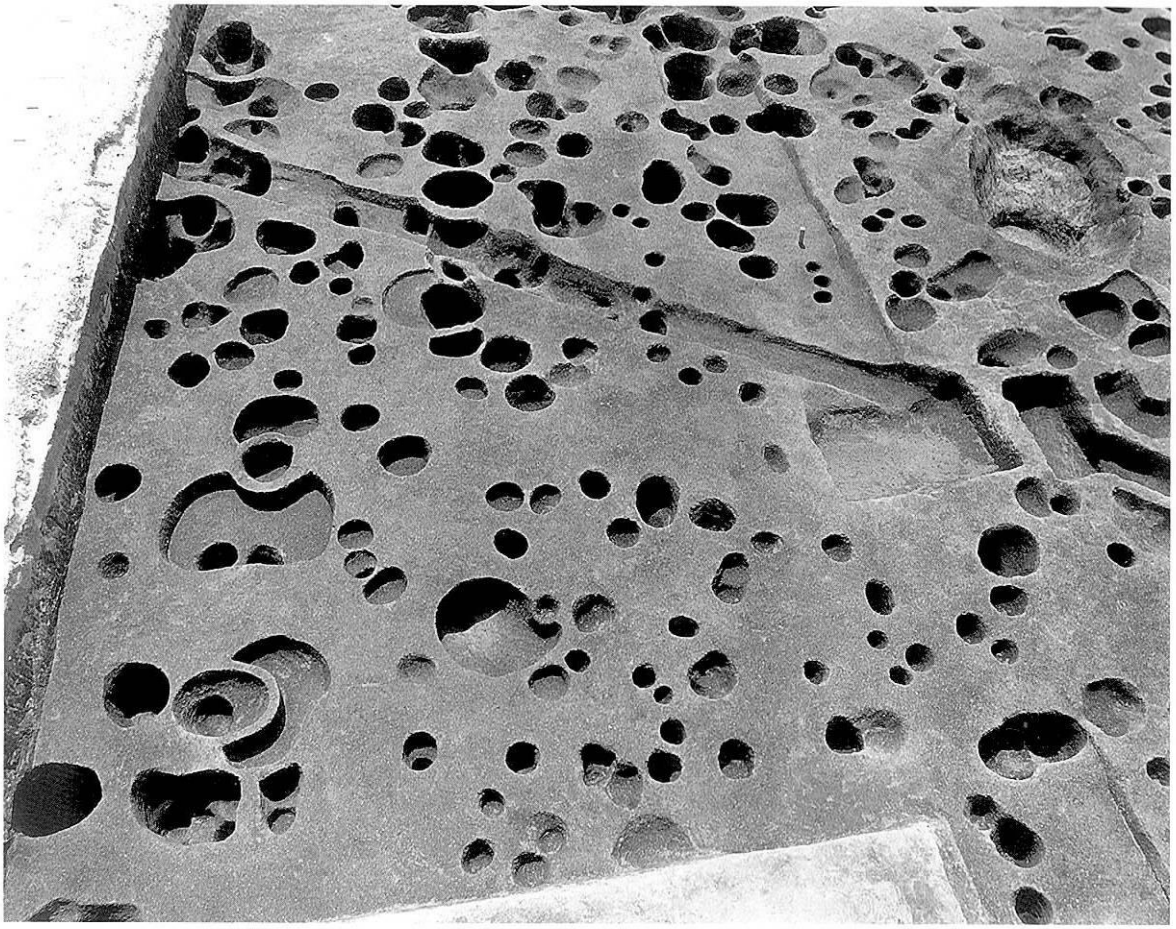
図　　版



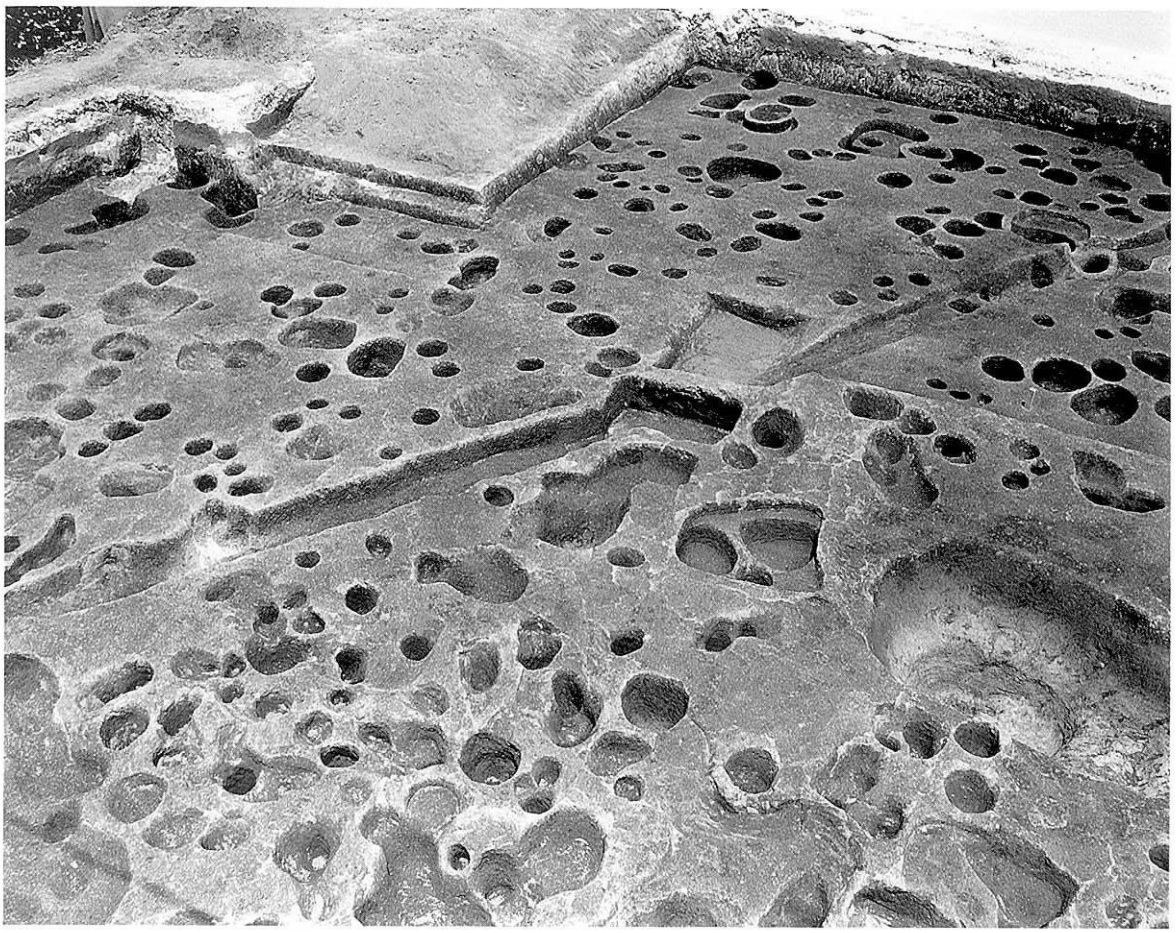
(1)　A地点完掘状況①（北側から）



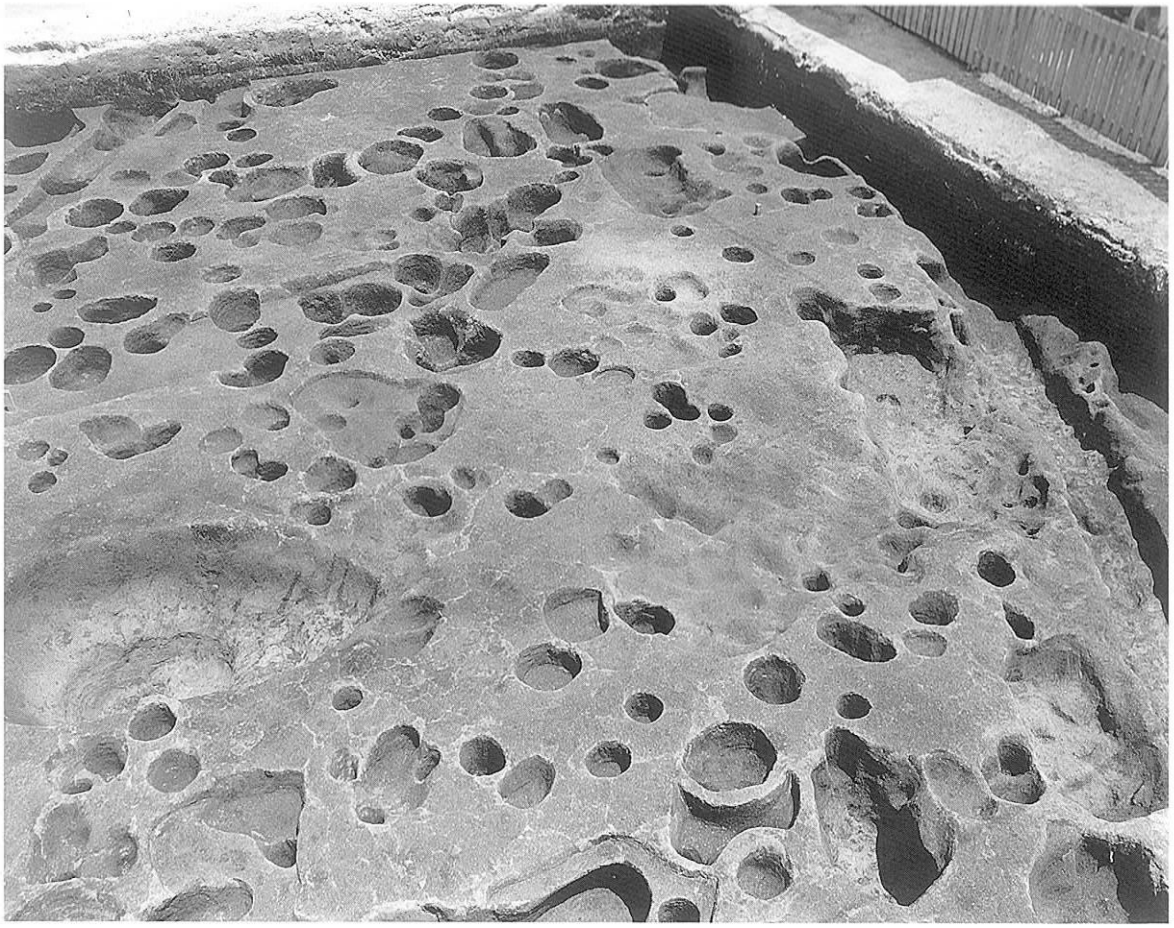
(2)　A地点完掘状況②（北東側から）



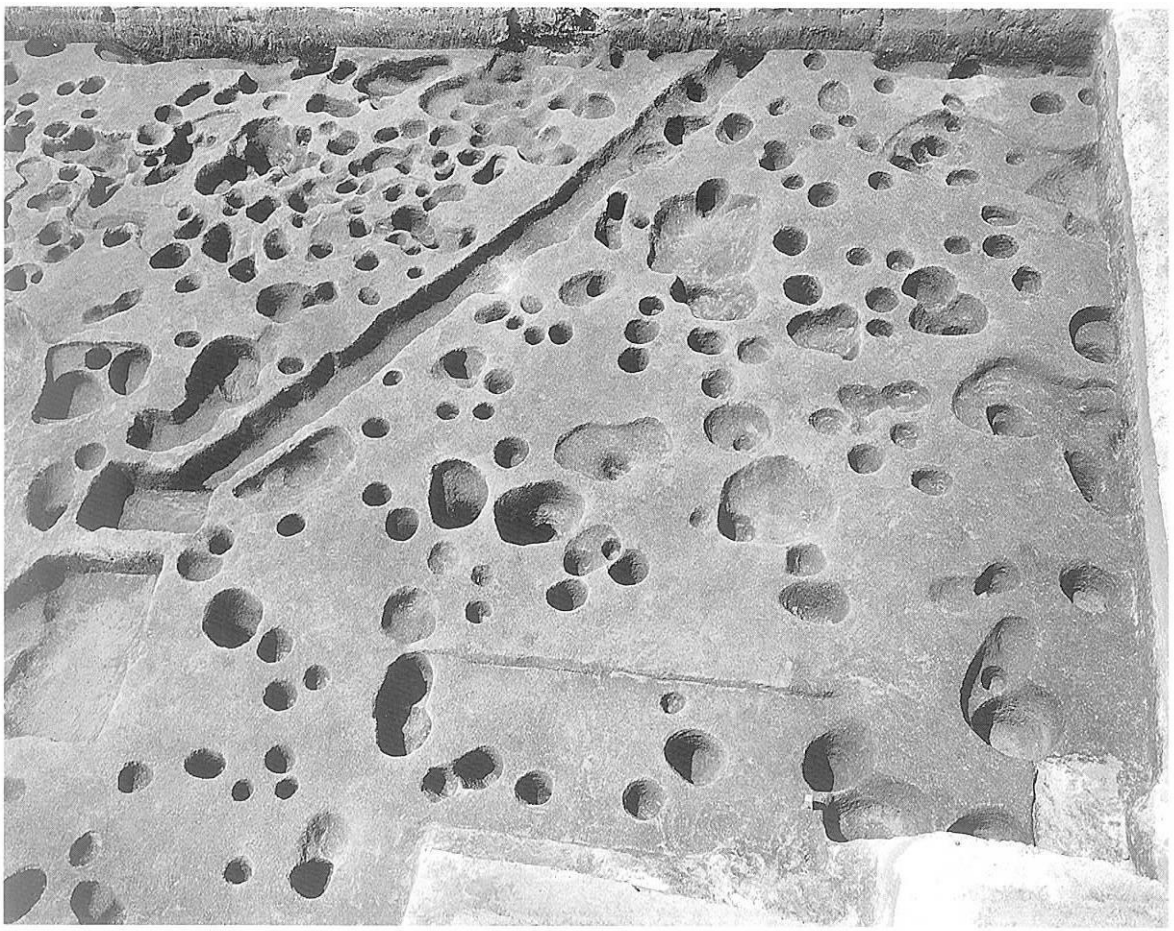
(1)　A地点完掘状況③（北隅の部分、北側から）



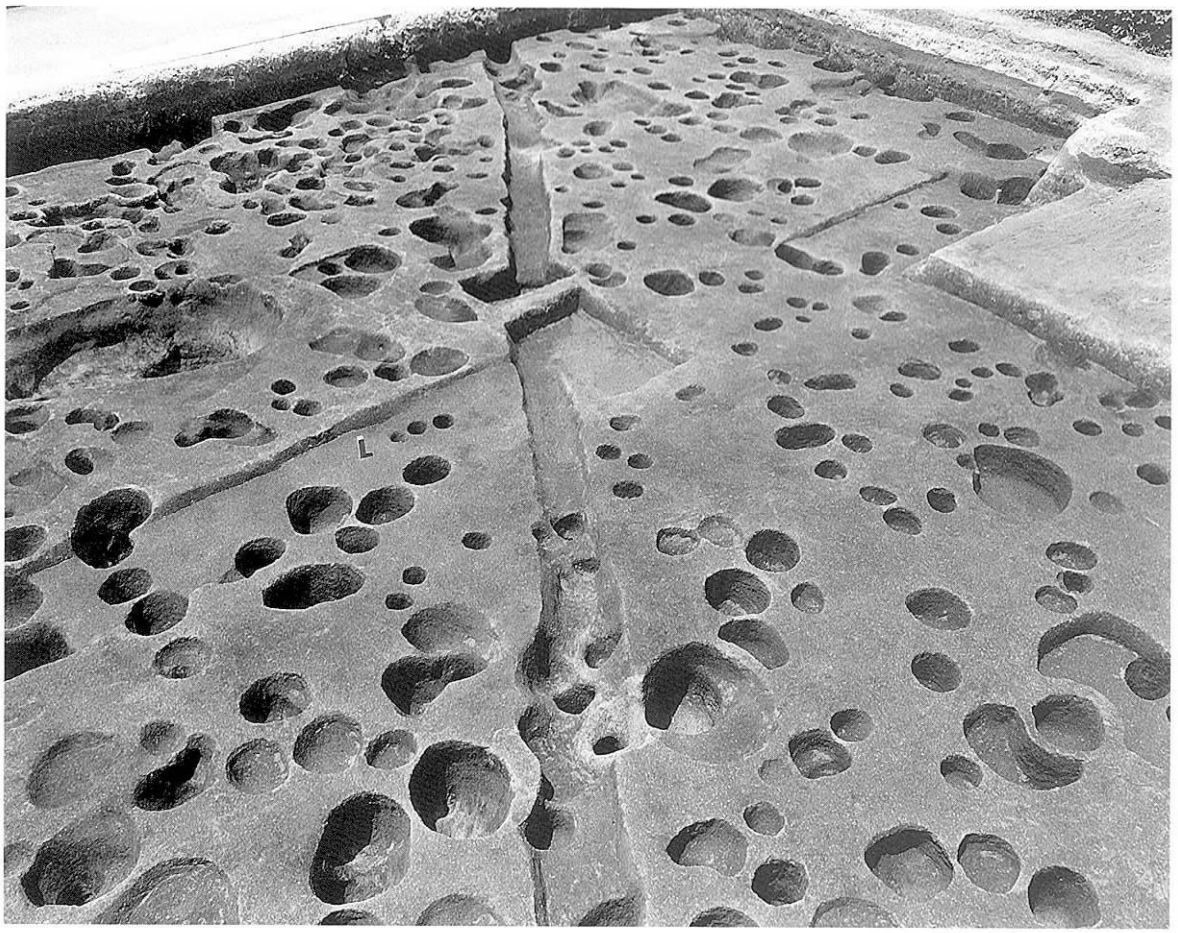
(2)　A地点完掘状況④（北隅の部分、南側から）



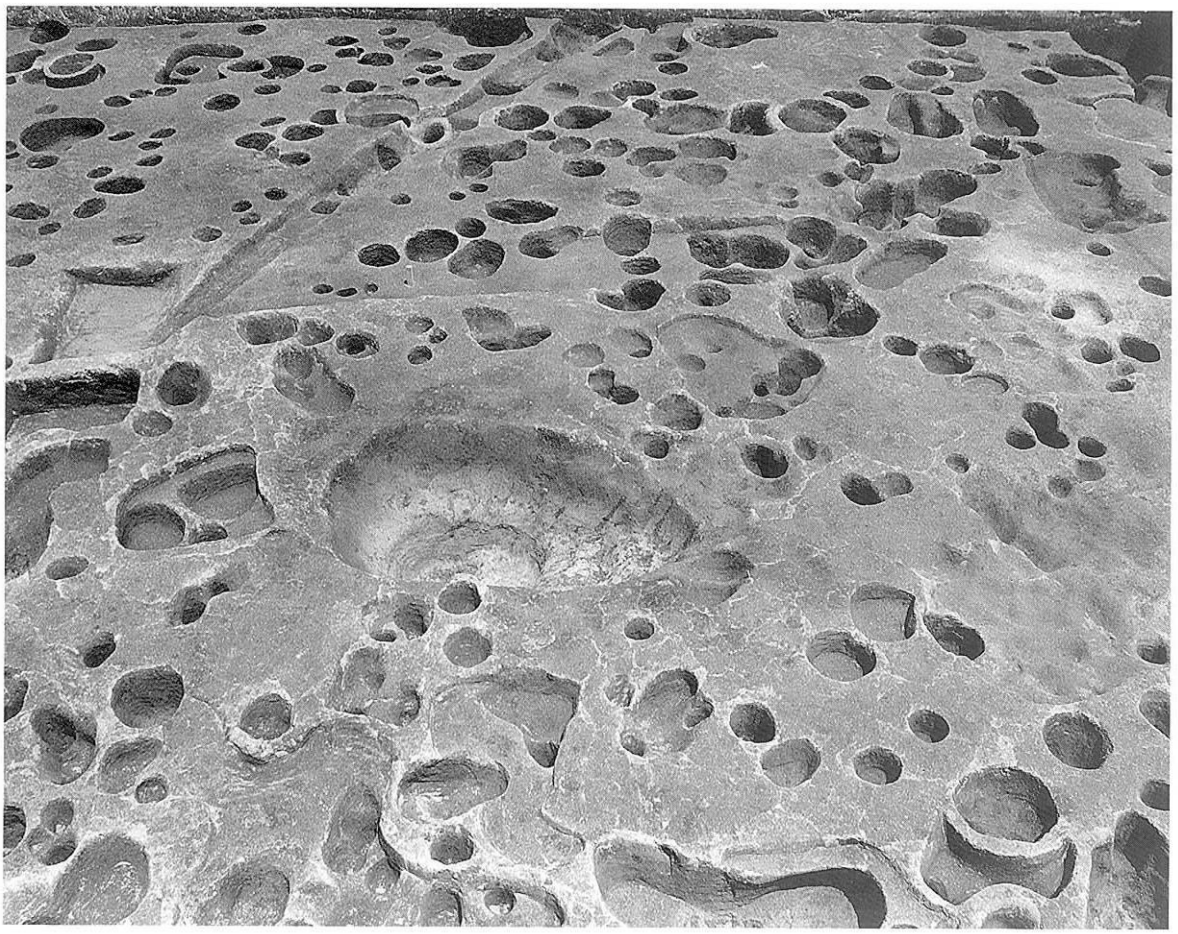
(1)　A地点完掘状況⑤（東隅の部分、北側から）



(2)　A地点完掘状況⑥（東隅の部分、北西側から）

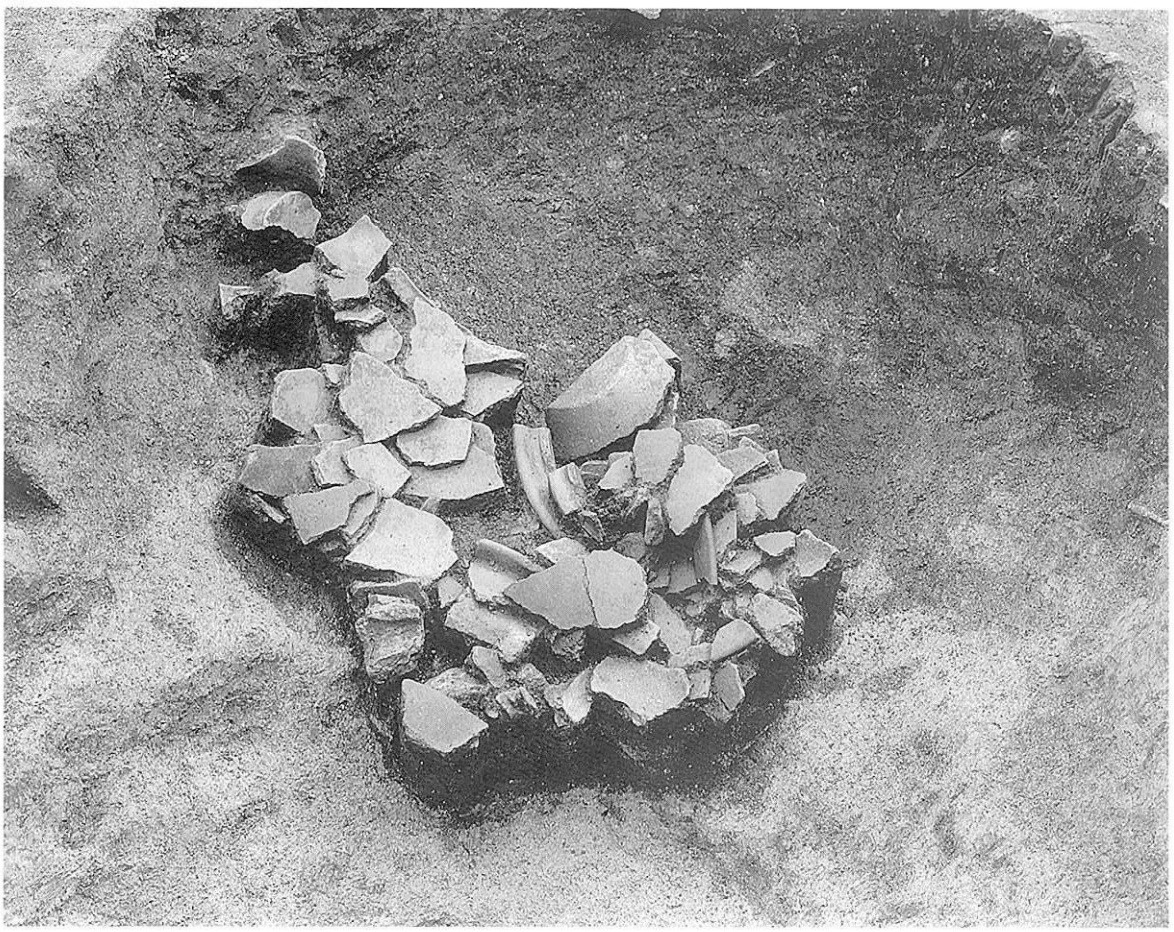


(1)　A地点完掘状況⑦（西隅の部分、東側から）

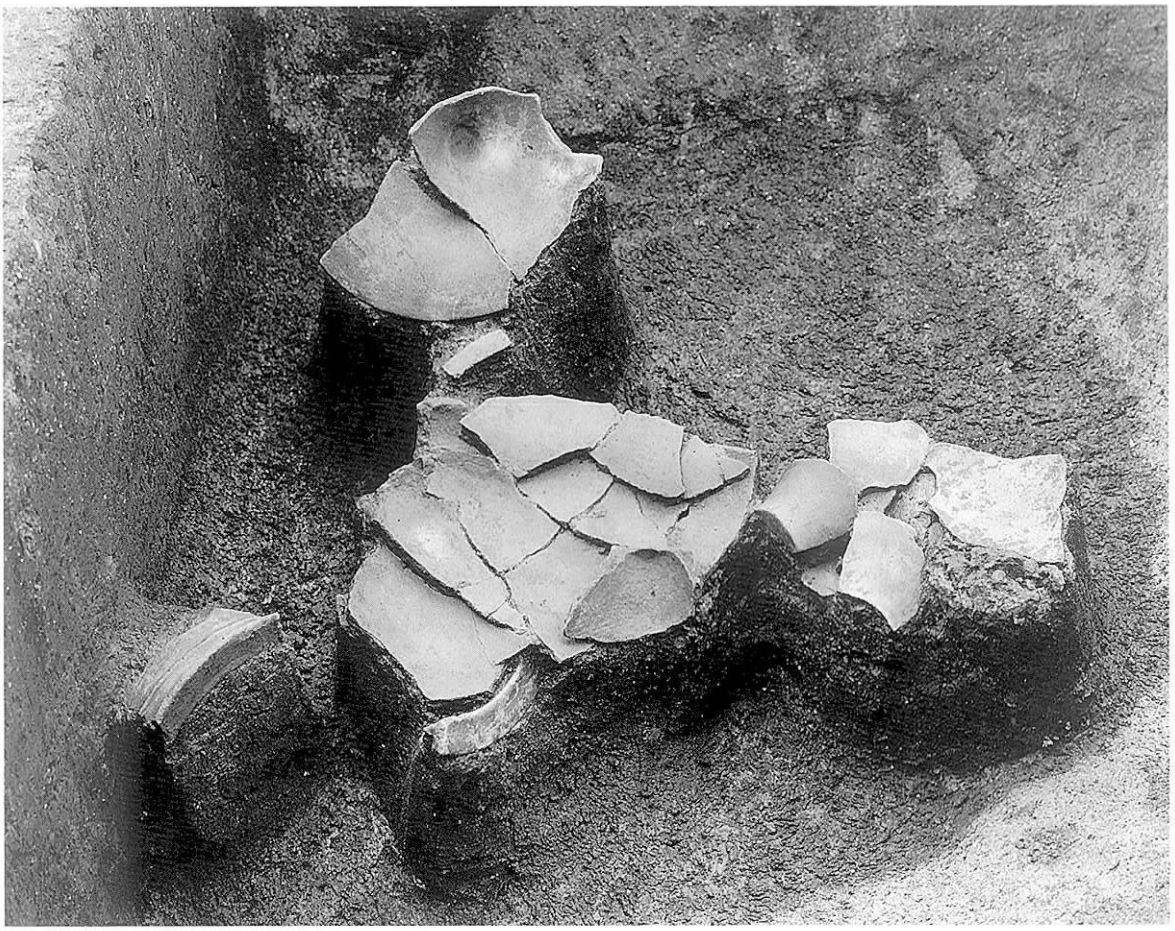


(2)　A地点完掘状況⑧（中央部分、北東側から）

(1)　A地点SK112土器出土状況①



(2)　A地点SK112土器出土状況②



(1)　A地点SK111土器出土状況

(2)　A地点調査中の状況（北側から）

SK08　1

SK152　37

SX01　108

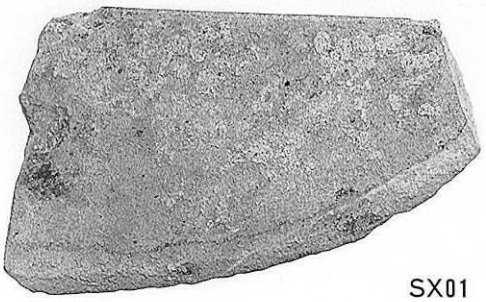
SX01　109

SX01　110

SK111　4

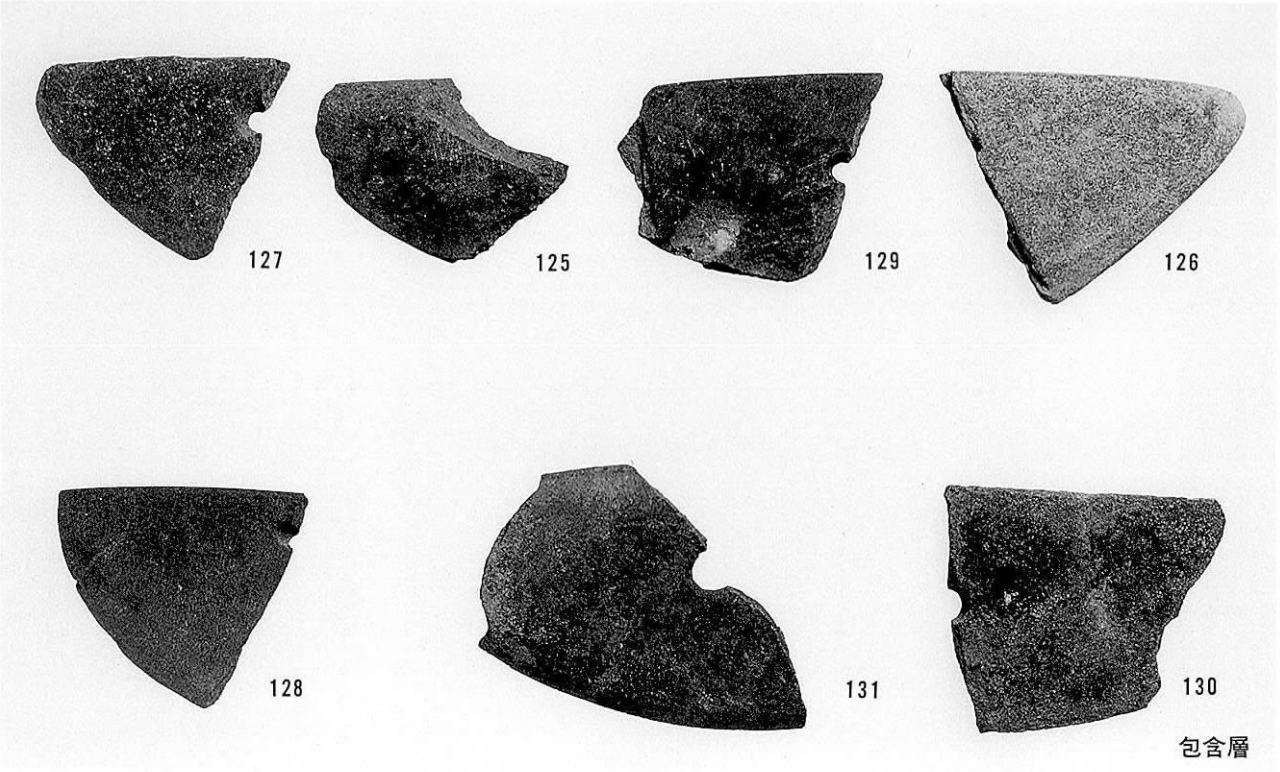
包含層　117

SK49　123

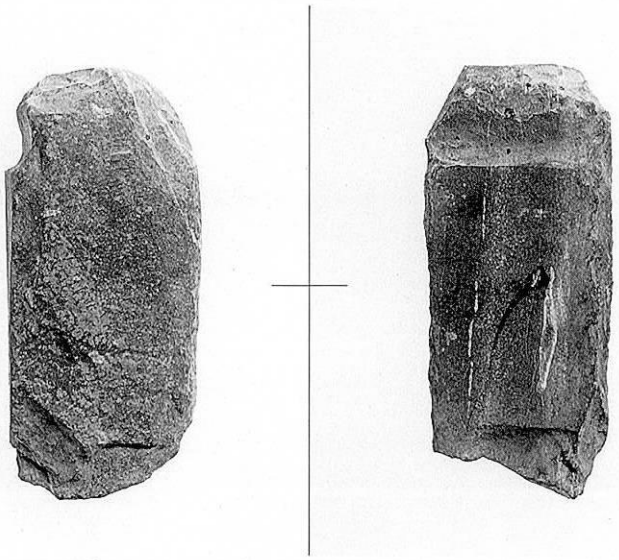


SX01　124

A地点出土遺物①



包含層



包含層
132

SD02
133

A地点出土遺物②

139

138

137

136

135
包含層

SK237
134

SK164
141

SK111
142

SK159
140

SK111
143

包含層
144

SX01
146

包含層
147

包含層
148

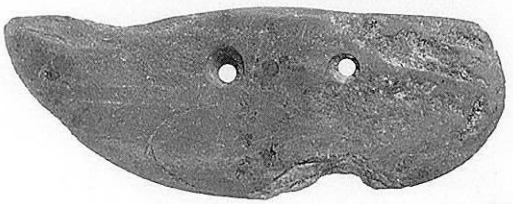
A地点出土遺物

(1)　B地点調査前の状況（東側から）

(2)　B地点１号トレンチ完掘状況（南東側から）

(1)　B地点２号トレンチ完掘状況（北東側から）

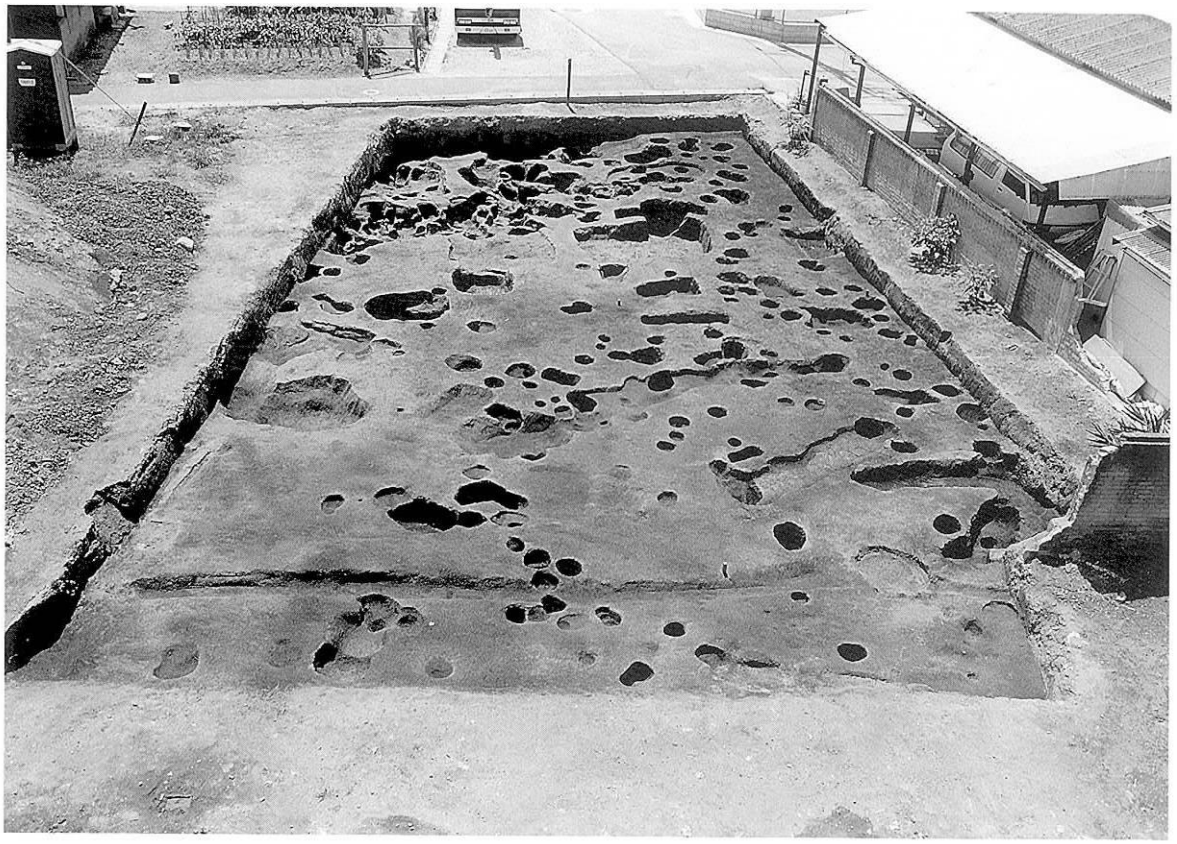
(2)　B地点１号トレンチ(手前)と2号トレンチ(奥)の関係(南東側から)



(3)　B地点出土遺物

(1)　C地点調査前の状況

(2)　C地点遺物包含層の状況（遺構面の上の黒色土層）

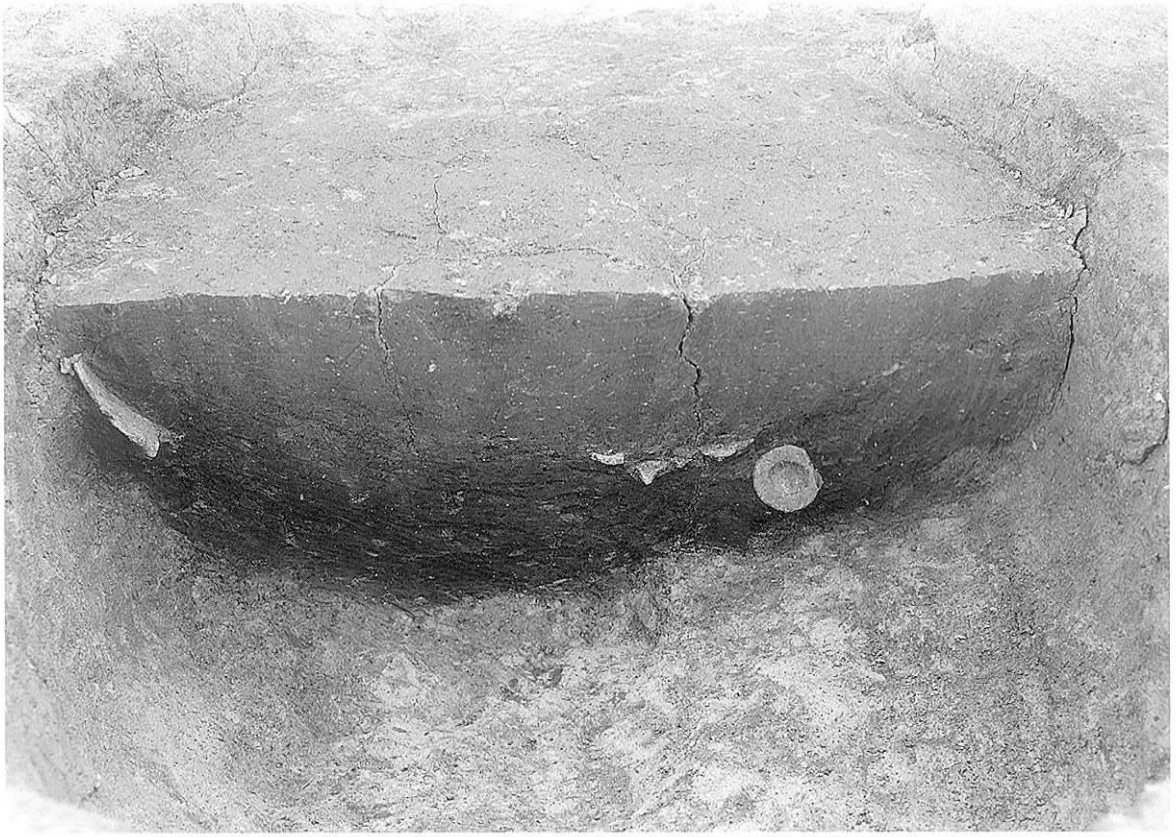


(1)　C地点完掘状況（東側から）①

(2)　C地点完掘状況（東側から）②

(1)　C地点南隅の土坑群（SK146・SK147を掘る前）

(2)　C地点SK01（北側から）



(1)　C地点SK01断面

(2)　C地点SK29（東側から）

(1)　C地点SK31土器出土状況

(2)　C地点SK74（西側から）

(1)　C地点SK74断面

(2)　C地点SK68土器出土状況

(1)　C地点調査風景（東南側から）①

(2)　C地点調査風景（東南側から）②

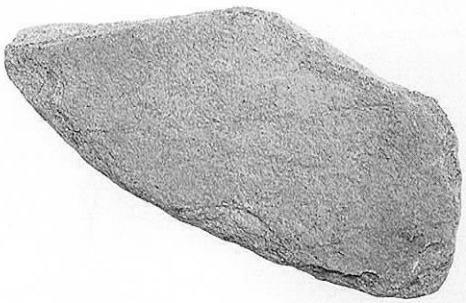
SK01　166

SK68　190

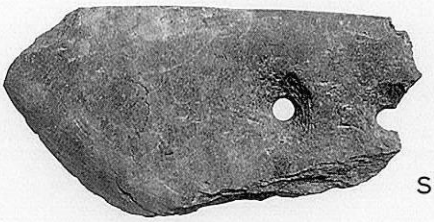
包含層
241

SK18
242

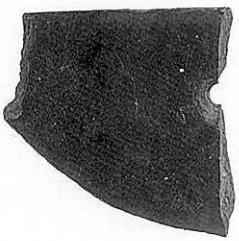
包含層
243



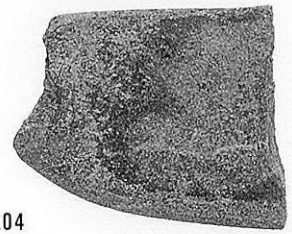
SK01
244



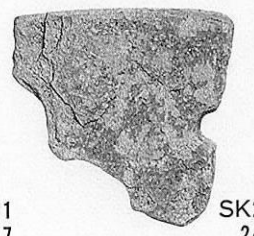
SK147
249



SK04
245



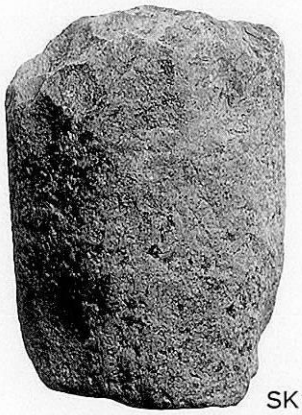
SK31
247



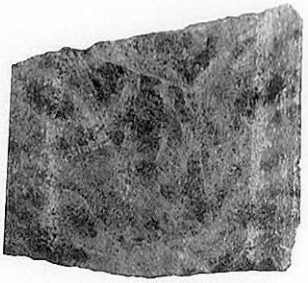
SK23
246

SK64
248

C地点出土遺物①



SK147
250



SK04　251

SK147　252

SK61
255

SK01
256

SK02
253

包含層　254

C地点出土遺物②

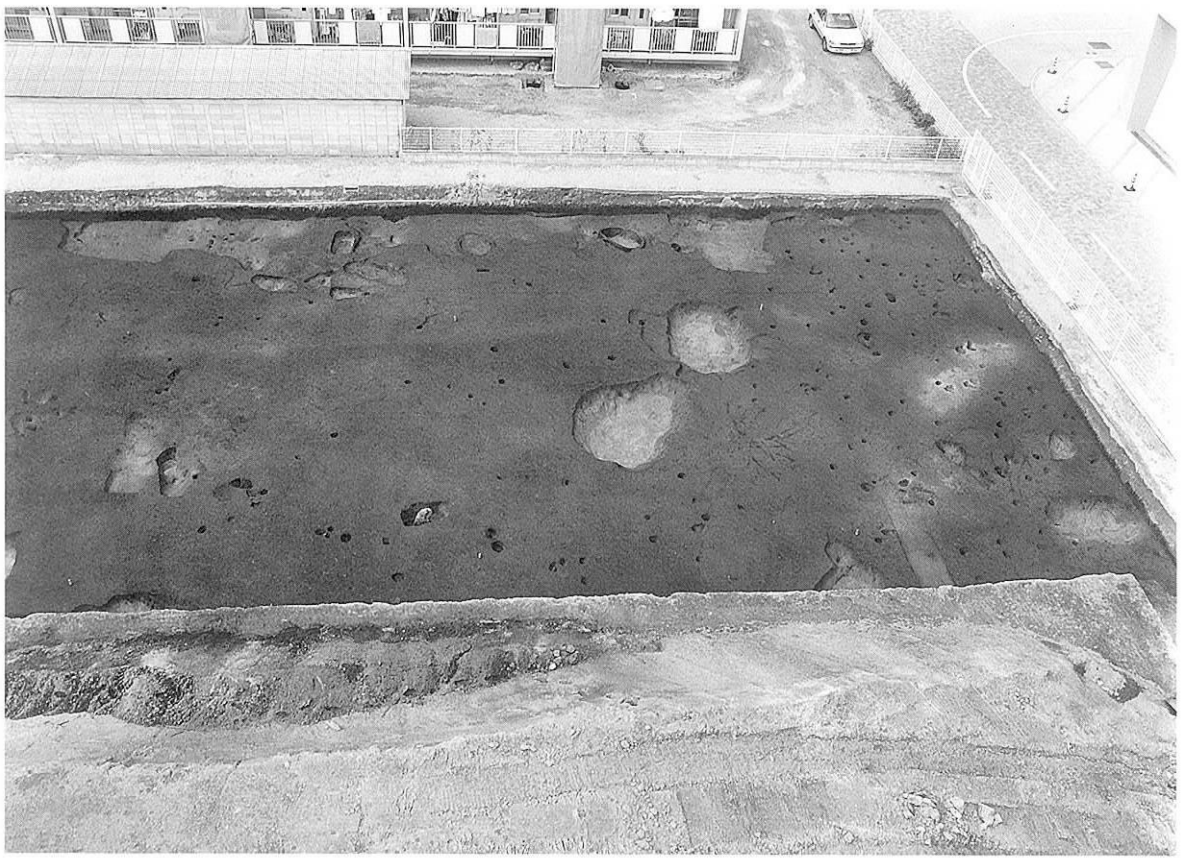
(1)　E地点調査前の状況

(2)　E地点完掘状況（南側から）

(1)　E地点SD02土器出土状況

(2)　E地点出土遺物

(1) Ⅰ地点北部完掘状況（南側から）①



(2) Ⅰ地点北部完掘状況（南側から）②

(1) Ⅰ地点中央部完掘状況（南側から）①

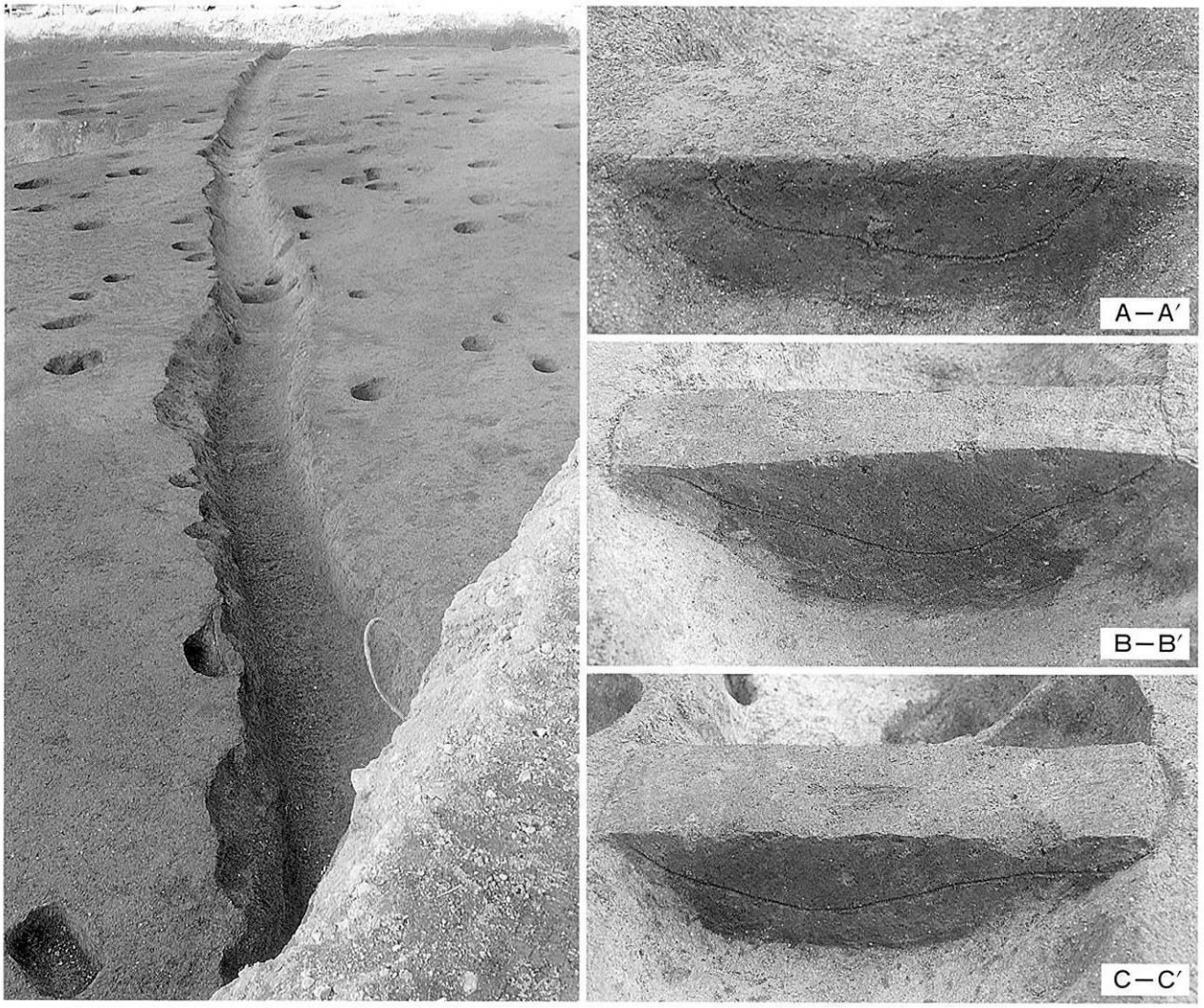
(2) Ⅰ地点中央部完掘状況（南側から）②

(1) Ⅰ地点南部完掘状況（東側から）

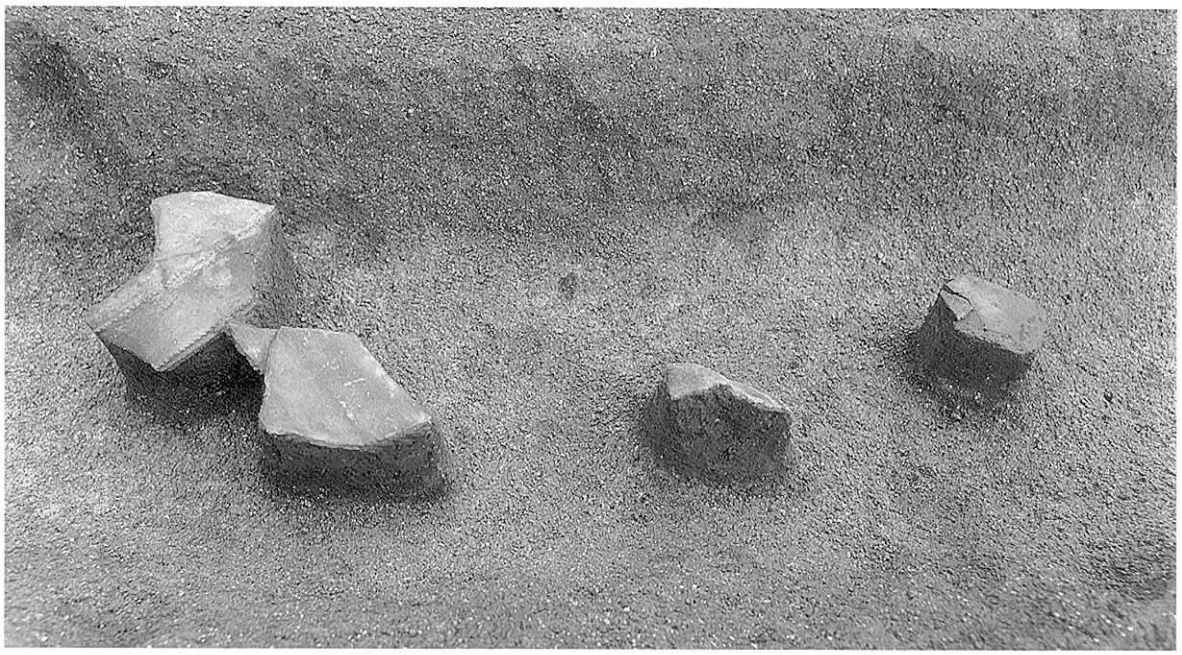
(2) Ⅰ地点SJ01（北側から）

(1) Ⅰ地点SJ01完掘状況（東側から）

(2) Ⅰ地点SJ01工具痕の状況（南側から）



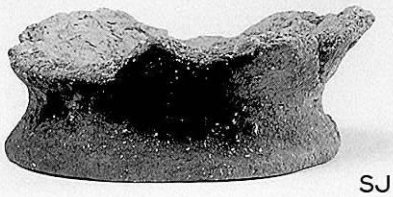
(1) Ⅰ地点SD01完掘状況（南側から）・埋土土層



(2) Ⅰ地点SD01土器出土状況

SJ01　299

299



SJ01内　298

SD01　303

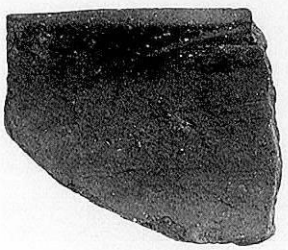
SD01　303

風倒木痕
307

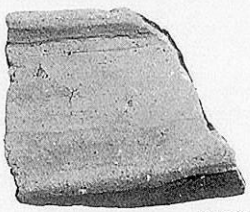
SJ01内
297

SJ01内
296

ピット　306



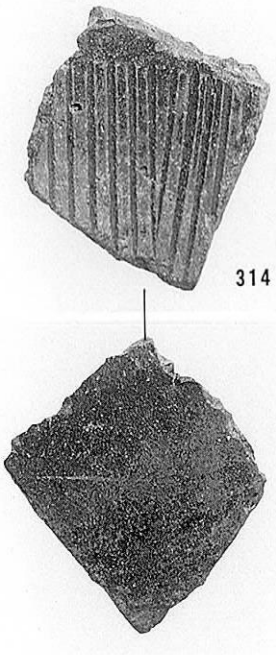
SD01
300



SD01
301

ピット
308

ピット
309

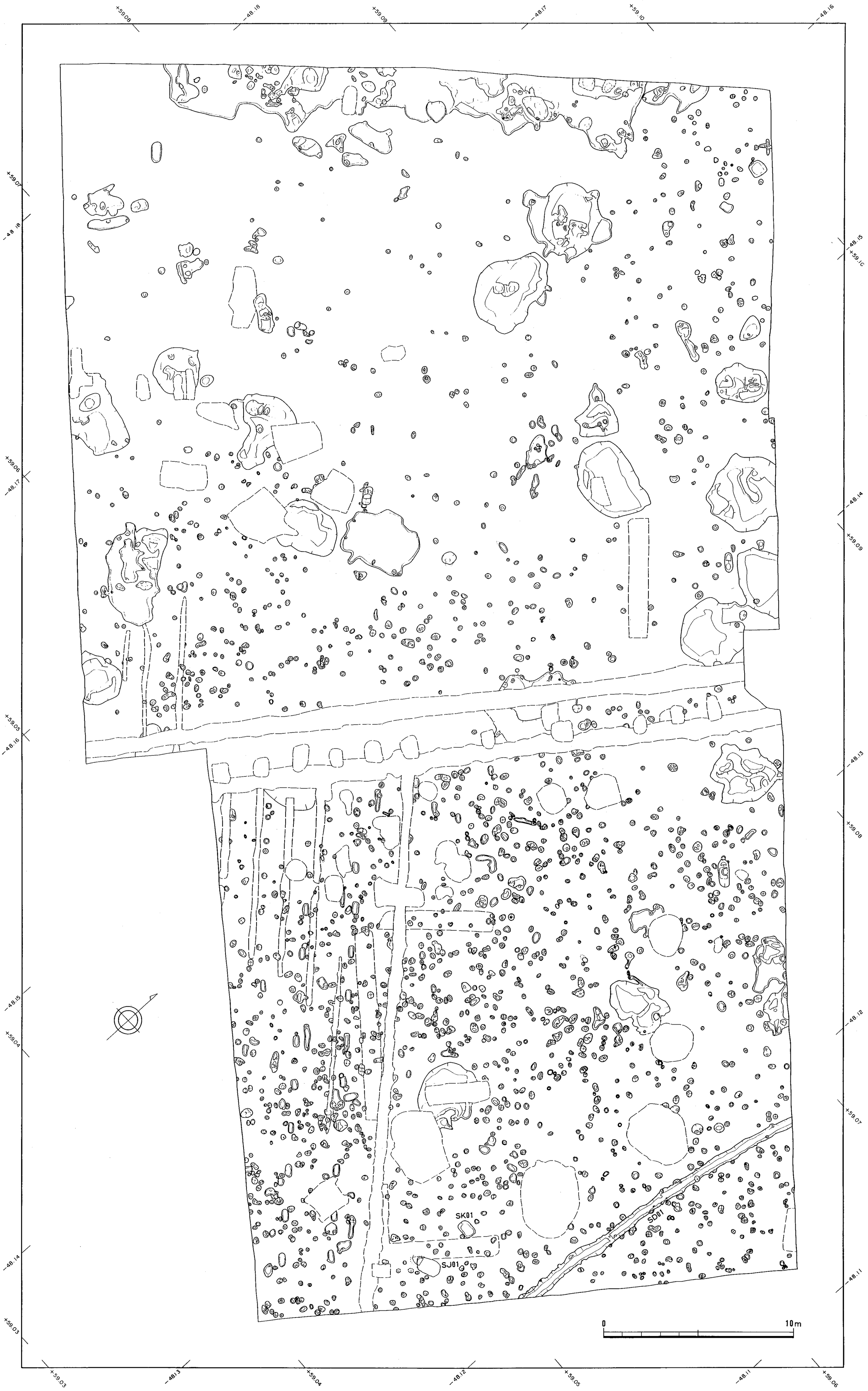


314

315

撹乱

Ⅰ地点出土遺物②



付図　石勺遺跡Ⅰ地点遺構配置図（1/100）

報 告 書 抄 録

ふりがな	こくじゃくいせき
書名	石勺遺跡Ⅲ
副書名	A・B・C・E・I 地点の調査
巻次	
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第52集
編著者名	向 直也・丸尾 博恵
編集機関	大野城市教育委員会
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町2丁目2-1 TEL092-501-2211
発行年月日	1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こくじゃくいせき 石勺遺跡	ふくおかけん 福岡県 おおのじょうし 大野城市 かわらだ あけぼのまち 瓦田・曙町			33°31′54″ ～ 33°31′59″	130°28′53″ ～ 130°29′4″	1988.6.13～1988.9.9 1989.7.10～1989.8.18 1990.8.25～1990.9.10 1996.10.7～1997.2.27	約2,940m²	道路建設 個人住宅建築立体駐車場建設

所収遺跡名	種名	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石勺遺跡	集落	縄文 弥生	甕棺墓 土坑 溝	弥生土器・須恵器 土師器・陶器 石器	弥生時代中期の遺構が主体

大野城市文化財調査報告書

第 52 集

1998年3月31日

発 行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2丁目2-1

印 刷 鹿島印刷株式会社
佐賀県鹿島市古枝甲249－3